
赤羽館

有里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤羽館

【Nコード】

N0497X

【作者名】

有里

【あらすじ】

大学進学と共に上京して早1年、こつこつと地道に貯金をしてきた俺は、今日から念願の一人暮らしを始める。……訳ありアパートメント「赤羽館」に引っ越してきた神前丹の日常。

始まり

大学進学と共に上京して早1年、こつこつと地道に貯金をしてきた俺は、今日から念願の一人暮らしを始める。

今まで居候させてくれた伯父さんにはとてもお世話になったが（ついでに美味しい飯を作ってくれた伯母さんにも感謝している）、とうとうこの日がやって来た。俺はこの日が楽しみで仕方なかった。

大学の友達地元の人間もいるけれど、俺のように地方から出てきた人間も多くて、そいつらは学校近くのアパートや学生寮に住んでいたりで、そういう奴らはそこからなら毎朝時間的にも余裕があるし、夜飲み会で遅くなった時は俺も泊まらせてもらうことがあった。

金銭的に余裕がない学生だから部屋は狭いし不満な点を挙げれば限は無いのだろうけど、そこは全て自分の色で埋め尽くされていて、子供の頃作って遊んだような自分だけの秘密基地のようで、その一人の空間が正直羨ましかった。だって、友達と小さなテーブル囲んで酒飲んで馬鹿騒ぎ出来るのも（今考えれば絶対近所迷惑だったけど）、やっぱり一人で暮らしていて他に気を遣う人間がいないから。一人暮らしなら、休みの日なんか何時に起きたって良いし、一人ならわざわざ朝飯を作って食べる必要も無いし（いや、休みの日も伯父さんや伯母さんに合わせて朝早く起きざるを得なかったことに不満はないけど別にもう終わったことだしな！）。

とにかく、全部自分の好きなように決められるんだ。その分自分で全部やらなくちゃならないんだけど、高校まで実家暮らしで、そしてつい最近まで親戚の家に住んだ俺にとっては、一人暮らしはとっても魅力的だったってこと。

荷物を肩に掛け直し、俺は相庭駅の改札を出た。

3月の終わりの、冷たいんだか温かいんだか分からないくらい中途半端な風がすうっと通り過ぎて行く。

俺の荷物はこのボストンバッグ一つだ。黒色でちょっと大きめで、確かこれ、中学の修学旅行で使った奴だったかな。まあ、これじゃあちよっと格好付かない気もするけれど、引越し先の部屋は家具付きで、しかももともと荷物の少なかった俺はただ衣類を持っていけば良いだけなのだから（あ、あと本業の、大学の教科書とか資料とか）、この程度で十分だった。

相庭駅は、俺が通う大学の最寄駅から二つ目の所にある。

この辺りは閑静な住宅街で、というか高級住宅街と言っても過言でないのだが、その雰囲気は上品だけれど親しみやすく、とても馴染みやすく思えた。長閑な雰囲気が、春の昼下がりを暖かく包んでいる。

一応調べて印刷しておいたこの辺りの地図を取り出し、歩き出す。でも俺がこれから暮らす「赤羽館」という建物はレンガ張りで風見鶏が立っていて、しかもそれが物凄い高い塀で囲われてるって言うから、歩いていればすぐに見付かるだろうと思われる（実は実際に物件を見るのは今日が初めてだったりする。でもここを紹介してくれた不動産屋の親父は親切で良い奴だったし、バイト三昧でそうそう何件も見える時間が無かったのだから仕方ない）。

案の定、そう考えながらきよろきよろと真っ直ぐ歩いて来ると、突き当たりを左に曲がった向こうにそれらしきものが見えた。自然と俺は小走りになって、とうとう、赤羽館のでかい門を見上げていた。立派な洋館である。しかしここからだと言と塀と…その向こうに聳える尖塔の先に揺れる風見鶏の先っちょしか見えなかった。

「やあ、君が神前丹くんかな？」

でかい建物（視界のほとんどが門と塀だけど）を見上げていた所
為で首が痛くなった頃、ぴったり閉ざされた門の脇にある小さな扉
（門と比べるから小さく見えるけれど、これは普通の大きさの普通の
玄関だ）から、若い男が一人出てきた。……彼は俺よりも少し年
上くらいかな、と思う。

「ここの管理人をしています、赤羽真咲です。よろしく。」

人の良さそうな笑みを浮かべながら、彼はさり気無く俺の荷物を
持つと、門を潜り、中へと案内してくれた。しかし門を通り抜け赤
羽館の敷地内に足を踏み入れた途端、俺は驚嘆の声を上げること
になる。

その重厚なレンガ造りの外観、空を突き抜けるように伸びる塔（
こう言うってはなんだが、城の屋根みたいな感じ？）、その尖塔に黒
く雄々しい風見鶏が光り輝き、右奥に見える洒落た外階段、建物を
覆うようにあちこちに聳える木々の深緑色の葉っぱたち、向こうに
見える一角は恐らくバラ園か何かのようで……。もはやこの
古風な木造3階建ての異人館は、単なるアパートとも言えない。威
厳があり、頑丈な騎士がその門を守らなくてはいけないような、ま
るで小さな城のようにとても美しいものだった。日の光を浴びて、
ますます光り輝いて見える。辺りをぐるりと囲む木々の中から、鳥
の鳴き声のようなものがあちこちから聞こえた。

その内装も見事で、玄関を入ると広い吹き抜けのホールがあって、
正面玄関の扉の上にはその吹き抜けの一番上まで何メートルもの大
きさのステンドグラスが、様々な色合いでキラキラと外の明かりを
取り入れている。そして床には、控え目の落ち着いた色をした絨毯

が廊下に長く続いている。……——右に食堂（ここもまた、豪華な中世の城館風な造りだ。誰もがここはどこの国だ?! と絶対思う）、正面に談話室（置いてある家具がどれも高級そうで触れられやしない）、左に応接室兼書斎のようなものがある。そしてホールの中央に大きな螺旋階段があつて、それ以外にホールの左右突き当たりにも階段がついている。

2階に行けばそこはまるでホテルの廊下みたいに落ち着いた雰囲気、各部屋の焦げ茶の扉が並んでいる。壁に掛ったランプがやんわりと橙に光っていた。

「神前くん、君の部屋は……ここ、11号室だ。これが部屋の鍵。」

赤羽さんはそう言いながら、扉の繊細な装飾に似合わないごつごつとした鍵を手渡した。11号室——…廊下の突き当たりで角部屋だから、きっと12号室から3階になるのだろう。一番端の階段がちょうど目の前というように近くにある部屋なので、いくつも同じ色をした扉が並ぶ中で、この自分の部屋の間所だけはすぐに覚えられると思った。

その扉の覗き穴のすぐ下辺りに一枚古びたカードが貼り付けてあったけれど（よく見ればどの部屋にも扉に一枚必ず何かのカードらしきものが付いている）、どうもそのカードは薄れてしまっていて、何が描いてあるのかよく分からない。それよりも、扉の横に付いているランプの下プレートに、ローマ字で「K a n z a k i」と俺の名字が入っている。それを見て、内心ひしひしと嬉しさを噛み締めながら、赤羽さんから荷物を受け取る。赤羽さんは微笑みながら、その眼鏡の奥から瞳を光らせて俺を見た。

「食堂のキッチン共同で使えるから、君の好きな時に使ってくれていい。それか僕に一言言ってくれさえすれば、こちらで三食用意出来るからね。」

「…え、ほんとですか?!」

食事のことは初めて聞いたので、驚いてパツと赤羽さんの顔を見た俺は、彼の顔に浮かぶ笑みにつられたのと、自分で食事を用意しなくていいことを思っふにやりと口元が緩んだ。それを見た赤羽さんは口元に手を当ててクスクスと声を立てて笑う。

……あ、何か、すごい絵になる人だな。

よく見れば：俺よりも背が高いし、痩せているけれど肩とかしっかりしてるし、姿勢も良くて、知的で、しかもすごい美形じゃん（眼鏡かけていてもいいけれど、外したら外したで一層いいんじゃない?）。同じ男の俺でも、この人の前に立てば赤くなって緊張しちゃうくらい。悪友である村田や大学の女友達にも自慢したくなったが（俺んとこの管理人さん、すげーカッコいいの。って?）、何となく、他の人には見せたくないと思った。赤羽さんは俺のものじゃないのに変なの。

赤羽さんの髪は地毛なのか、金に近い色をした茶色は柔らかく揺れて、形の良い眉はなだらかで優しげな表情を作り出している。ハーフなのかな。そのグレーの瞳は———：光の加減で時折淡いブルーにも見えた。すごく、綺麗な色だ…。

「うん、ここに住んでる人はほとんど皆頼んでる。料理が苦手だったり、時間がなくて面倒だったりするなら、君の分も用意しようか? 今日夕飯は無理だけど、明日からなら…。」

「あ、はい、お願いします!」

慌ただしくペコツと頭を下げた俺に、うんわかったよ、他に何かあったら遠慮なく聞いてくれていいからね、と優しく頷いて、赤羽さんは階段を下りて行った。

うわー、何か管理人さん良い人そうで安心した。これなら俺でも一人でやっていけそう。これからの生活を思い浮かべてにやにやと笑いながら、俺は自分の部屋へ入った。

あれだけ建物の周りを植物に覆われていれば日の光もあまり入らないんじゃないかって思ったけれど、窓から入り込む太陽の光で部屋の中は異様に明るかった。角部屋だからかな、窓が大きくて二つあるし、そのお陰でそれほど広くない部屋でも開放感がある。昼間は部屋に備え付けられた照明も必要ないくらい。俺はすぐに窓へ駆け寄って、それを開け放つ。爽やかな風が、緊張して火照った体に気持ち良く感じた。

備え付きの家具はこれまたアンティークな感じのばかりで、これを普段使うにはちよつと…と思うけれど、木の質感というか、そういうものが古いけれどしっかりしていて、とても長く大事にされていたんだろうなとか…そういうのがよく分かる。もはや芸術品と言えそうな、綺麗に磨かれた本棚や洋筆筒、デスク、こういうの、俺なんかが使っちゃっていいのかななんて思った。

そして、持って来た荷物と、明日届くであろう荷物（今日伯父さんの家からまとめて送っておいたやつ）の置き場所を考えながら、部屋の中を歩き回る。まあ部屋は一人部屋だしそれほど広くもないけれど、隅から隅まで、まるで新しい玩具をもらった子供みたいに

飽きることなく何度も観察をした。その中で驚きだったのが、バスとトイレが分かれていること。一か月の家賃から考えてそれは無いと思っていたんだけど…。それとなんと、その白い陶器のバスタブの黄金の足は、動物の足の形をしていた。

何か西洋の家具ってかっこいいし洒落てるものが多いな（田舎者の俺には絶対似合わないが……）。照明も骨董品で高く売れそうな感じのだし。

こうして部屋を見回る度新たな発見があつて、ますます、契約時に確認したけれどあの家賃でいいのか：俺、騙されてる訳じゃないよな：と不安になる。ベッドに腰掛けてじっと頭の中で換算してみたけれど（頭の悪い俺には、脳味噌がぐるんぐるん回ってるみたい）に頭が痛くなった）、それでもこの部屋であの家賃で、それでやっていけるの？ それとそれは別料金、こっちも別料金とか言われたら困るんだけど。でもホント、これ普通に考えても安すぎじゃない？ 伯父さん家にいた時でも親からの金銭的な援助が少なくて（残念ながら実家も俺も、どっちも辛いのだ）、全部バイトで稼いで何とか持ってきたものだけだ。だからまあ、家賃の安さが決め手でここにしたらただとさ、落ち着いて考えてみたらこんな条件良い物件であの安さって、大体が『訳あり』って奴じゃない？

「……………と、とりあえず、…赤羽さんここに、」

なぜか足音を立てないようこっそり立ち上がり、一度覗き穴から廊下の様子を覗き、耳を澄ませて辺りに人がいないことを確認してから部屋を出た。とりあえず管理人さんに相談しなくては…。後から請求されたって払えないって絶対。

「…あれ、いや、そもそも、あの不動産屋の親父も良い奴だったけど、こういうことに関しては結構いい加減な感じだったしな、……」

俺も忙しくて、それほどちゃんと契約書類に目を通していなかったかも（サイテーだ！）。

今から考えてみれば……と、ぶつぶつと独り言を零しながら何だか不安になった俺は余所見をしていたのか、ホール中央の階段へ向かう途中、くると曲がり角を曲がった途端誰かにぶつかった。あいたっ、と高めの声が響き渡った。

「う、うわ、…ご、ごめんツ…なさい、……」

俺は後ろによろけただけだったけれど、相手はどうも尻餅をついてしまったようで、俺も慌ててしゃがみ込んでその顔を覗き込んだ。

「いてて…こっちそごめん、余所見して——…あ、もしかして君、新しく入った子!？」

赤茶の髪で、よく通る活発な声を上げてがばつと顔を上げた少年は（高校生くらい…かな?）、俺をまじまじと見詰め、珍しいものを見るようにうわあ〜と目を輝かせた。…う、何か凄いわくわくしてキラキラしてる……。

「は…はあ、そう…ですけど…?」

「わ〜新しい人なんて何年振りだろう!　ねえ、君も『アレ』なんでしょ?!」

ぴよこんと立ち上がってお尻の埃を払っていた少年だけど、突然思い出したようにばつと顔を向けると（彼がそうする度に乾いた色をした赤茶がばさばさと揺れる）、当然、というようにそう言った。
…ア、アレ?　アレって何?

「あれ、違う?　君も、だから真咲んどこに来たんじゃないの?」

きよとんと首を傾げて、もう一度確認するように俺を見る。俺の困惑顔を見詰めてその黒い瞳が丸くなって——…うわっまさか!　と小さく囁き、驚いた風後ろによろめいた。いちいちリアク

シヨンがオーバーなんだけど。……何コイツ、ホント訳分かんない。

「あー…えっと、君、何か勘違いしてない…？ 俺、今日11号室に越してきた神前丹っていうんだけど、…」

あはは…と愛想笑いを浮かべて、困ったように頭を掻きながら言うてみれば、しかし目の前の彼の目は今度は恐ろしいものを見るようにこちらを見ていて、そして俺の名前を聞いて、うそッ！？ と慌てた顔が急に青褪めた。仕舞いには、うわゝまずいよおゝ何で最初に確認しなかったんだよ僕ゝてつきり同じかと思ってたのにゝと唸りながら頭を抱える。

「……えー…と、あのゝ…大丈夫？」

愛想笑いも心なし硬くなって何だか苛々しながらも、心配するよ（特に心配なのはコイツの頭なんだけど…）少年の肩に手を置いた――…と思ったら、彼はまた吃驚したように奇声を上げて飛び退いて、じりじりと後退りしながら、早くここから立ち去りたそうにした。

「うわあああごめんッいやごごめんなさい！ 僕、何もやってないから！ ねえそうだよね君、…ホント、指一本触っちゃいないから！ …ね！？」

あわわと辺りに目を走らせながら（すげー挙動不審：誰かに怯えてるみたい）何だか訳分かんないことを大きく主張して（時々俺にも譲かせて）、上擦った女の子みたいな声を廊下に響かせると、少年はそれじゃ！と俺にぺこりとお辞儀してそそくさと傍を離れ、ピュウツと風が吹くようにどこかへ走って行ってしまった…。

「……………って、ハア?! 何さっきの!」

さっきの子もこの住人なのか? ……何て名前だろう、絶対関わらないようにしよ…アイツ絶対何か勘違いしてるっていうか絶対頭おかしいって。

むっとしながらも廊下を進み、1階の食堂にでも行ってみようと思っただけ階段を下りて行く。

どこのマンションやアパートにも管理人室みたいなものがある訳だから、ここに住んでいても毎朝ここに通って来ているとしても、赤羽さんの私室が絶対あると思うのだ。さっきちゃんと訊いておけばよかった。つーか1階案内してもらった時に何か言ってた気がするけど、……思い出せない。

思い出せないがとりあえず、赤羽さんに会って聞かなくちゃならないことがある。すべすべとした手摺の感触を伝いながら、螺旋階段をぐるぐる下りて行く……………螺旋階段はホールの中央にあるのだから、食堂もすぐそこだろう。食堂なら誰かしら人がいそうな気がした。

ホールは相変わらず広くて、大理石のような白い床が光を反射するので、床の表面で温かみのあるランプの橙が揺れている。高級そうだけどシンプルな柄の壁紙に、その空間にぴったりのような

絵画が飾ってあったり、そしてちょっとした壁紙の禿げ具合だったり薄れ具合でさえも、やはりどこも品が良い。

そうやって辺りを観察しながら（内心俺は場違いのように思えた。ここに住んでると言ったら、村田は何て言うだろう……似合わねーッ！）とか言ってるグダグダ笑いそうだが、俺は食堂の入口の所でまたこの住人に擦れ違った。宗教の決まりとかで女性は肌を晒してはいけない、というような国の女の人の人みたいに白いベールで頭を覆って、長いマント……のようなものを羽織っている女性だ、……体形からして多分だけど。

その女性はふっと俺に気付いてこちらに顔を向けると（ベールで丸く囲われた中に眉と目と鼻と口しかないからよく分からないけれど、きつと美人だ。どちらかと言うと浅黒い肌をしていて、東洋人に近いんじゃないか？）、だが何も言わないまま、じいっと俺を見たままだ。

「あ、あの……今日11号室に越してきた神前といいます。……」

その、よろしく願います、と軽くお辞儀をして、相手の反応を待つ時間がとても居心地悪い。

相変わらず女性は細い睫毛に囲われた黒っぽい瞳でじっと俺を見るだけで、俺の声が聞こえてないのか何なのか、気味悪いほど無表情だ。……ああもう、何なんだよ！　と内心俺が痺れを切らした頃、ようやく彼女が口を開いた。

「あなたもしかして……カンザキ、マコト？」

意外なことに、彼女は俺の名前まで知っていた。

「え？ …ええ、そうです、けど。…あなたは？」

何を考えているのか分からない色をした目が、ふっと瞬き、突然弓形に笑った。

「え…？」

彼女の無表情だった顔が一瞬にして綻び、その変化に俺は驚いてぽかんと口を開けてしまった。クスクスと抑えるような笑い声が微かに響く。

「ふふ、…ふ、そう…あなたがそうなの。…」

女性は肌と似た色をした形の良い唇を綺麗に笑わせながら、私は2号室の千草よ、と言った。そしてうつすらと目を細くして妖艶に、よろしくね…可愛仔ちゃん、と笑うと、もうこちらを見ることなくすーっと床を流れるようにして階段の方向へ消えた。白いベールの裾が翻り、薄い唇の間から一瞬見えた真白い歯と血のように赤い舌が、残像のようにそこに現えてすぐに消えた。

「あは…はは、…何あの人、………」

おい村田ア、可愛仔ちゃんなんて言われちゃったよ俺……。

「ううー……——いない！ ……何で、どこにもいないじゃん！
」

あれから食堂を書斎を、そして談話室も見回ってみたけれど、なぜだか誰もいなかった。

1階の廊下の奥にあるいくつかの部屋も、扉に鍵が掛かっていて誰もいないみたいだった。

誰もいない…何か…特に一つ一つの部屋が広いのだから、一人も人間がいないと辺りは異様に静かで不気味な雰囲気だ。何も喋らないはずのソファや家具たちの中で、だけど誰かが囁き声で会話をしているような、どこから誰かに見られているような、何となく肌寒く、寂しいと感じるよりも先に奇妙な気分になる。きつとたった一人で広い屋敷に住んでいる人なんかは、こんな気分になるんじゃないだろうか。

それにいつの間にか日が沈んでいたようで（そんなに時間が経っていたのか？）、廊下の窓から見える空が薄暗く曇っていた。ごわごわと静かに蠢く雲の重なりを見上げ、ガラス窓の震えで強い風が吹いていることに気付く。カタカタカタとどこかからか、あちこちからか、微かな物音が聞こえてくる——…何だか少し怖くなってきた俺は、赤羽さんを探すのを諦めて大人しく部屋に戻ることにした。

だって、絨毯を歩く自分の足音でさえも不気味に聞こえてくるのだから不思議だ。こういう洋館で雰囲気があるから、ますます何か出そうで怖いじゃん。昔からお化け屋敷とかそういう類は苦手だったのに……。

内心うひゃーと冷や汗をかきながら階段を上がり、だけどまた足

元を見ていたからか、目の前にいた人の気配に気付いたのは、その人の爪先を踏むか踏まないかのギリギリの所だった。

「…あ、すみません。……」

ぼんやりしたまま顔を上げれば、そこには長身の男がいた。

黒いロングコートを着ていて、これまた黒い髪は肩に付くくらいに長く、先がくりりと癖毛になっていて、それを後ろで一本に結っている…。その彼は目を伏せて細長い指で口に咥えた煙草を摘み、微かに横を向いてふう…と煙を吐き出す。そして俺を見ると異様に紅い目をずっと細めて、へえ…珍しいな、と感心するように呟いた。ハスキーな声が響き、この人もきつと新たな入居者が珍しいのだろうとぼんやりと思ったが、しかしその男の口から飛び出た次の言葉に、俺は違和感を通り越して果てしない恐ろしさを感じた。

「……真咲の奴、どういう風の吹き回しだ？　この屋敷に人間を招き入れるなんて物好きだな。……」

狼の群れに羊を一匹放り込むようなものじゃないか…、そうやってこちらを見る眼差しは鋭くて冷たくて突き刺さるように感じて、俺は体が固まってしまったように指一本も動かさなくなった。蛇に睨まれたカエルみたいだ！　どくんどくんと心臓の音が耳元で鳴っているように、なぜか、早くここから逃げなくてはいけないと思った。だけどそう思えば思うほど、ガチガチに固まってしまったみたいに足が動かない…。

そうしている内にも、男は持っていた煙草を握り締めて（ジュと

火が消えるような音と、灰色の煙が拳の中から漏れた）それを捨てると、その口元だけ笑わせながら、そっと長い指を俺の頬に伸ばした。

「んな顔するなよ……俺は小僧のそういう顔が好きでね、…」

うつとりと掠れた低音が囁いて、ひた…とひどく冷たい感触が（それは蛇にでも触った時のような）頬に添えられ、ぞぞ…ツと鳥肌が立った。男の指がくいと顎を上を持ち上げ、俺の顔を自分の方へ向かせる。明らかに日本人ではない中性的で整った顔が、にやりと笑う。

近付いた男の紅い瞳に（よく見ればそれは鮮やかに、それこそ血のように、…）怯えた顔をした俺の姿が映り込む。耳鳴りがして頭の中がガンガンと鳴り響くようで眩暈がする。男の舌が、まるで獣が獲物を前に堪らず自身の口元を舐めるように、そして異様に白く尖った歯がちらと顔を覗かせる…。

「お前、何も知らないでここに来たのか？」

ぐっと顔を近付け、額と額がぶつかった。男の顔がぼやけて、彼の吐息がすぐそこに吹き付けられ、しかしその中でも瞳の赤色だけはくつきりと焼き付くように見えた。

と思ったら、近付いた赤色がずっと離れ、男は俺の顔を見下ろして吐息をつくように笑みを零す。だがその目は笑ってない。その顔は意地悪く歪んでいる。ギラギラと光る眼差しが、俺の体を細く鋭い針で刺すように感じられた。

「…ふ、運が悪かったな？　ここはな、かつてドラクル公の古城を改造した屋敷なのさ。…驚くだろう？　何百年も昔に…：…しかもシギシヨアラから遠く離れたこの日本のど真中に、だからな———」

喉の内側が何かに張り付いてしまったみたいに声が出ない俺に、男は独り言のように話を続ける。

「しかし一般的に知られている歴史ほど疑わしいものはないよなあ…：…なんせ、俺達一族はまだ生きている。単なる伝説や伝承の中じやなく。…なあ、」

ふっと一瞬視線を逸らして遠くを見るような眼差しになり、ククッと肩を竦めるようにするとこちらを向き、———そうだろう…？　と俺に向かって問い掛けた。その瞬間、男の唇が俺のそれを塞いだ…。

「…ッん?!」

…ッんぎやああああ!!!!

この口が塞がれていなかったら思い切り叫んでいただろう。脳天を一撃、物凄い力で殴られたような気分だった。ああッ気持ち悪い！ 体の感覚や脳味噌はぐるぐると物凄い速さで動くのに、でも体が動かない。恥ずかしさと怒りとで、顔がカッと熱くなった。

…くちゅ、と音を立てて、男が一度唇を離す。男の綺麗な顔に、俺は目を見開いたまま、信じられない気持ちで何だか情けなくなってしまった。熱くなった唇に一瞬冷たい空気が触れて、しかしすぐにまた唇が合わさる。ぞっとした。信じられない…知らない男に無理やりキスされた！ いつの間にか緩んだ唇を抉じ開けて、生暖かな舌がつうつと歯列をなぞり、口内へ侵入する。

「んん、んんんッ！」

必死に叫ぼうとするのだが、それさえも呑み込まれていく。しかもコイツの手が俺の顎を掴み、そしていつの間にかもう一方の腕を腰に回しているのだから離れたくてもそうはいかない。体の中は熱くて堪らないのに、男の手や体が触れる部分はひやりと凍るようで…。

だが、ガクン、と後ろに倒れるようによろけた俺は、それと同時に凍り付いたように動かなかった体の感覚が戻ったのか、金縛りの解けたような状態で手当たり次第に手を動かした。

「……ん、…ふぁ…ッ、く、やめ…やめろよッ!!！」

ぐっと腕を突っ張って、男の肩を力いっぱい押しやった。する
と思ったよりもすんなりと男は離れる。しかし頭上で、神経を逆撫
でするような笑い声が聞こえる。俺はゼゼエと呼吸をしながら、
怒りで真っ赤になった顔でキッと睨み付けた。

「おーおー、怖い顔しちゃって。」

「い、いったい何なんだよお前！ ……ッいきなり！ 初対面の人に
するようなことじゃねえだろ！ この変態！」

大声で叫んだつもりが、急に声を出した俺の喉は引き攣って、代
りに掠れて上擦った声が飛び出た。それでも真っ直ぐに睨み付けて
やれば、男は笑いを堪えるように肩を震わせた。その表情が俺をか
らかうように憎たらしい。

「なっ…何笑ってやがる…！」

「ふっ、元気のいい奴は嫌いじゃないな————…そういう奴ら
に限って、中々いい味してるからな。」

「は？！」

何か不吉な言葉が聞こえた気がする。いやいや、気のせいじゃなく……。

「ッうわああ何なにに?! 何するんだッ:は、離れろよ:!!」

ガキのようにぎゃーと叫びながら振り回した俺の手を簡単に避けて、男の手が俺の襟元を引っ掴み、ぐいと首元を露わにする。ひゅっと俺の喉が空気を吸い込んで呑み込むような音が鳴ったのが聞こえた。呼吸の度に喉の凹凸が動く。男が目を細めてそこを眺めた。……いや、違う、その男の視線は上下に動き、頸動脈の血液の流れを見詰めている———:それに気付いた時、俺の頭の中でもう一人の俺みたいなのが嘘だろう?! と悲鳴を上げて、またその片隅でまさかコイツ吸血鬼?! と物語のような物語じゃないような、実在するんだかしないんだか分からない存在をどこからか意識の内に引っ張り上げてきた。

だけど、あれ、そういえばさっきこの男、何て言っていた? ドラ:ドラクル:『ドラクル公』だって:?? ド

「ド、ド:————ドラキュラッ:!!」

辛うじて声になった言葉が、男に噛み付かれたのと同時に空しく消えた。

ドラキュラに噛み付かれた人間って…どうなるんだっけ……？

俺これで死んじゃうのかな…ぼんやりする意識の中で、馬鹿げた疑問だけがぐるぐる回っていた。物語の中でしか存在しない筈のドラキュラがこんな身近な所にいたなんて（しかも引越し先に）、誰が聞いても信じられるもんじゃない。夢でもあり得ないって…。

どこか遠くの方で悲鳴が聞こえる――…それはなぜか近付くように、いや、俺の方がそっちの方へ近付いて行くみたいに大きく聞こえてきて、一瞬何か衝撃が走って、意識がふわりと浮上するように、俺は重い瞼を持ち上げる。すると廊下に仰向けに倒れた俺の上の人影が見え、そいつが頻りに俺の頬を叩いている。

虚ろな眼差しを向ければ、気がついた？　ねえ、大丈夫？！　と心底焦ったように聞いてくる。

「……う、……頭が、痛…い……………」

「…ああ、よかった…生きてる！」

少年の声が、一瞬ほっとしたように落ち着いた。

「ミツ、こいつは俺の獲物だ。何をする。」

少し不満気な男の声が聞こえる。するとすぐ、ヒイイ！　なんてこと言ってるのさあ！　と少年が叫んだ。

「そんなこと言ったら真咲に殺される！　————…レイ、この子、あの11号室の子だよ?!」

「…………なに？」

「万が一君の血とシンクロ出来て吸血鬼化しても、それで命が助かるならばまだいいけれど、そんなの稀で、普通は君の血が強過ぎて人間なんてすぐに死んじゃうんだよ?!　そしたら真咲に何て言われるか…いやいや、そもそも少しでも手エ出した時点で…………ああッ、もう『皆殺し』でも済まされないよ…!!」

「なっ…まさか————…この小僧が？　嘘だろう…?」

「ホントだってば!　…僕もてっきり女の子かと思ってたんだけどさ、彼自身が『11号室』に越してきた、って言ったんだよう!」

きんきんきんきんと犬が鳴くように、少年の高い声がキンキン響く。

「まさか……。俺はエレナを知っている……こんな奴じゃ……」

「もう、レイのばかあ！ そりゃ生まれ変わり死に変わりで性別も変わるよ！」

あーもうッ！ 失敗したなあ……！ と男にも自分自身にも苛々したように息を吐き出す。

その少年は、意識がはっきりして起き上がりとしている俺が少年と男とを怪訝に見ていたことによりやく気付いて（不思議どころじゃない。彼らの会話には意味不明な言葉が仰山飛び交っていた）、横にしゃがみ込んで背に腕を回すと、俺をゆっくりと丁寧に起き上がらせた。

俺は床の上に座り直して、まだ霧が掛ったかのように重く感じる頭に手をやった。痰が絡まった時みたいに喉が痞えて、口の中が気持ち悪かった。そして首を動かすと、そこをチリツと微かな痛みが走る。首の根元の方とか、肩に近い左側の方、その辺りにつつつ……と何か液体が流れるような感覚があった。思わず首筋に手をやると、透かさず隣にいた少年がその手を遮った。

「直接触っちゃダメ。僕が手当てしとくから。」

直接触っちゃダメなんて不思議なことを言う彼を真正面から見て、あ、と思った。赤茶の髪の少年だ………彼は昼間会った時よりも大人びた表情でそう告げた。そして真面目な顔付きで、どこからか取り出した綺麗なハンカチの先をそっと俺の首に押し当てた。少年は隣に正座をして、よく目を凝らして見るように、俺の首筋に顔

を近付けていた。俺は少年が手当しやすいように首を出来るだけ伸ばして、上を向いた。すると自然とその視界に、あの、俺に噛み付いた男の姿が入る。男はぴったりとスマートな黒いコートを着ていて、そしてその紅い眼差しが、……—サアと霧が晴れていくように、俺の脳裏に先程の出来事が蘇った。

「……あー、そのー…これはどういうことでしょうか？ …えーつと、俺はどこか不思議の国にでも迷い込んだとでも？ ……」

吸血鬼だとか狼男だとか？ 何だかもうよく分かんないんだけど！ 男はむすつとした顔で俺と少年を見下ろしているの、居心地が悪くなった俺は堪らず、反った喉から絞り出すように皮肉った声を出す。

何しろ今日俺には、このちっぽけで拙い頭では到底理解出来ない事態ばかりが起きている。……—いや、こんなこと他の誰にも理解出来やしないだろう。誰かにちゃんと1から10まで説明してもらいたい、今すぐにだ。そもそも、コイツ等はやっぱりヴァンパイアとかそういう類のものなの？ 一体何なの？ この館は変人の集まり場なの？ …いくら『訳あり』物件っていてもそれはダメでしょーよ。俺、凄いわい変な所に引っ越してきちゃったみたい、何だか分からなくて頭が混乱して、どうしようもなく泣きたくなる。

しかし俺の間の抜けたような問い掛けには何の返事もなく、すると背後から、あらあら、と実はそんなに驚いていないのに驚いた振りをしているような女性の声が聞こえた。

「まさかとは思ったけれど、レイ、あなたって本当に人の話を聞かないのね。」

呆れたような言葉に、少年が顔を上げ、マイ！　と女性の名を呼んだ。

男は女性を横目に見て、ウンザリしたような表情でそつと肩を竦めただけだった。しかし、お前は知っていたのか？　と疑うような目付きをする。女性はその視線を平然と受け止めて、だが、……私も、真咲さんの言う人がまさかこんな可愛い男の子だとは思っていなかったけれどね、と渋々認めた。

そういえばこの男の名前はレイ……というらしい。

そして、俺はちよつとだけ振り向いて女性の姿を確認し、彼女が千草マイという名前なのだと改めて知った。昼間食堂の入口で擦れ違った2号室の住人——…白いベールに白いマントを羽織っている彼女は不自然にマントの奥に隠した両手で、透明な液体の入った小さなガラス瓶を持っていた（持つというよりも、マントで包み込むように抱えていると言った方が正しい）。

「それよりも、…聖水を持ってきたわ。この子が例の人と分かった以上、どこかのお馬鹿さんの所為で取り返しのないことになる内に。」

何もかも見透かすような無表情の中にもどこか皮肉が込められていて、レイと呼ばれていた男は眉を顰めつつも、どこかのお馬鹿さんねえ……とにやにやしながら千草マイの言葉を繰り返して言った。ミツと呼ばれていた赤茶髪の少年が、礼を言いながら素手でその聖水とやらが入ったガラス瓶を受け取った。そしてその透明な液体（聖水なんて大層な呼び方だが、ただの水みたいだ）をハンカチに

染み込ませると、もう一度俺の首筋へ当てた――……一瞬、氷よりもずっと冷たいものを押し付けられて焼けるような痛みが走ったと思ったら、でもすぐにその痛みは消えて、傷も何もなくなくなってしまったみたいに感じた。あれ、と俺が目丸くしてミツを見た。

「……噛んではないない筈だ。ミツ、直前でお前が俺を突き飛ばしたから……その時に歯が掠って少し切れただけだろう。」

相変わらず無愛想な顔で様子を眺めていたレイが興味無さそうに言う。その言葉に、ミツは一度ハンカチを外して傷のあった所を確認し、安心したように頷いた。

「そうだね、ただ傷になったただけだ。大丈夫そう。良かったあ……」

「……そう、それじゃあ『皆殺し』からは助かるようね。それは良かったわ。」

ミツが心底ほっとしたように言って、千草マイが抑揚のない声で不吉な言葉を無関心にさらりと続けた。……しかし、次に俺達4人の背後から地を這うように響いた声に、俺は底冷えするように感じ、他の3人は笑みを浮かべていた口元をヒクヒクときこちなく震わせて、突然石になったかのようにギシリと緊張した。辺りの空気が一瞬にして氷点下になったようだった。

「そうか……残念だな、『皆殺し』はナシってわけか？」

ふつと鼻の先でせせら笑うような、冷めた低い声……。

隣の俺を通り越し千草マイを通り越し、そこに立っている人物を凝視して動けなくなってしまったミツが、震える両手を胸の前で握り締めた。千草マイは、ここで振り返らないまま消えてしまいたいと願うような表情で、しかし逆らうことは出来ないとなんと振り返る。ミツの斜め後ろに立っていたレイは組んでいた腕をぶらりと解いて手の平を上に向けると、降参というような仕草をした。しかしすぐにその表情を引き締め、すっと音もなくそこに片膝をついて頭を垂れた。まるで主に跪くようだ……。

「ヴラド公………：知らぬこととは言えこのようなこと、赦されるものではありません。しかし、この者共は単にここに居合わせただけで、……」

レイの低く掠れた声が、しっかりとした口調で紡がれる（この者共、というのはミツや千草マイのことだろう）。レイの俯いた表情は確認出来ないが、閉ざした瞼が小さく震えていた。飄々とふざけたように笑うレイの態度をこんなに変えてしまうとは………：俺はちら、と3人が恐れる人物をこの目で見た。

その人物は流れるような仕草で眼鏡を外し、くいつと眉を持ち上げると、血のように紅く輝く瞳を見せた。

「……ふん、お前は人の話を聞かな過ぎる。俺は、その名で呼ぶな

と言ったはずだが？」

赤羽真咲が、冷たい表情でレイを見据えている———……俺は何だか分からない内にショックを受けていた。昼間見たあの穏やかで爽やかな赤羽さんが、想像出来ないくらい、別人と思うくらい……。

真紅の瞳を細めて見る赤羽さんに、レイは微かに顔を上げた。器用に片方眉を持ち上げて、……確かに、そう口の中で呟いてすくつとその場に立ち上がる。そして何か考えるようにぼりぼりと頭を掻き回すと、先からは一転、俺やミツたちに対するような話し方で、カズィクル・ベイはエレナ嬢に御執心のようにですからねえ……、と小さくにやりと嫌味じゃない笑みを浮かべた。

それを聞いた途端、ミツは地獄に突き落とされたように感じただろう。地雷を踏んだ、俺もそう思った。ピシリと凍り付いた空間に亀裂が入って、粉々に砕けてしまった感じがする。だってこの雰囲気から、そんな口利いたらやばいんじゃないかと誰もがそう思う。

しかしレイがハスキーボイスで笑った途端、逆に、重苦しくピリピリと緊張した空気が軽くなった。はっと振り返れば、赤羽さんもむっとしながらもその表情を緩めている。その顔を見て、何だか分からないけれど物凄く安心した……。それは千草マイにとってもそうだったのか、彼女は白いベールの奥でうつすらと笑みを浮かべた。

「レイ、……お前じゃなかったら問答無用で殺っていたところだ。」

「……ふっ、生憎俺は串刺しにされても死なないけどな。まあその時は心の臓でも抜き取って完全に灰にしてくれ。」

へっと笑うレイに、赤羽さんは半眼になって呆れたように肩を竦めた。それを見たミツは息の詰まったような表情から、はあくツと思いい切り息を吐き出してようやく緊張が解けたのか、疲れたようにぐったりと脱力した。

「んもく何だよ2人とも！　僕たちをからかうのは止してくれよ、真咲も！」

子供のようにぷくくと頬を膨らませて唇を尖らせる。そして、本気でダメかと思った…と低く小さく呟いたミツに、赤羽さんは軽く笑うようにして、悪かったな、と言う。

「……俺の説明不足も否めないが、…だが、どうもお前たちは早合点で粗忽だ。」

「……………まさか男とは思わなかったんだもの、…………だから彼はただ普通に…ダンピールかと思った——…。」

「…女だと言った覚えも無いけどな。」

ミツがうっと言葉に詰まって、赤羽さんを見る。
ミツが口を噤み、他の誰もが口を閉ざしているので、気まずくて微妙な沈黙が訪れる。何だか俺は居た堪れない気持ちになったけれ

ど…。千草マイがちらつとこちらを横目に見た。

「……ところで、真咲さん、」

赤羽さんは笑ってはいないが、それでも纏う雰囲気は和やかに、昼間会った時のように穏やかな表情になっていた。その彼（胸ポケットに眼鏡を仕舞ったまま、ふっと瞬けば、いつの間にかさっきまで真紅に光っていた赤羽さんの瞳は淡いグレーになっていた）に、何か気にするように白いマントの千草マイが珍しく言葉を選びながら、だがズバリと今まで俺が一番訊きたかったことを代弁してくれた。

「…不本意とはいっても、こう……ここまできて、今日のことは事故みtainなものだからすっかり忘れてくれと言っても、誰も納得しないでしょう——……丹にちゃんと説明しなくても良いのですか？　いくらなんでもそれは可哀そう過ぎます。」

はっ……そうだッ！　それだそれ！　雰囲気の流れですっかり忘れていたが、この意味不明な展開を分かりやすく俺に説明してくれ！　巻き込むだけ巻き込んで、はいさようならじゃ済まされねえ！　急にレイにキスされた時の怒りや、今まで蚊帳の外のように扱われていたことや色々なことが一気に思い起こされて、訳の分からない

い感情でいっぱいになって、俺はいきり立って勢いよく立ち上がった——…と自分ではそう思ったのだが、ぐっと足に力を入れて立ち上がった瞬間、しかし俺の両脚はふにやりと曲がって、またふつと後ろに倒れるような落ちていくような感覚の中、俺の意識はぷつつりと途切れた。ずっと遠くの方で、誰もが袈裟に思うほどのミツの叫び声が聞こえた気がした…。

こうして、まるでどこか変てこな世界に迷い込んでしまったように非現実的で、奇妙で（単なる奇妙じゃない、余裕で一般人が想像するような『奇妙』を通り越している）、それでいて嘘のようにリアルティのある散々な一日が終わったのだった。

いや、これから赤羽館の、楽しいんだかそうでないんだかもわからない、新たな現実の日々が始まるのだろうか。

彼女のこと

次に俺が目覚めたのは翌日の朝だった。

真っ暗闇から光が一筋こちらに差し込むように、それはとても強烈に輝きながら、瞼の裏からチラチラと何かが見える……。

俺は弾かれたようにはっと目を開けて、薄暗く深い色をした天井を見上げたまま数秒、自分が一体どこにいるのか考えるように動きを止めた。だがすぐに、ぐう…と腹が鳴る（こんな時でも体は正直である）。その音が静かな部屋の中にやけに大きく響いた。

何度か瞬きを繰り返した俺は温かなベッドに上体を起こし、ぼうつとした頭で、ここは昨日俺が越してきた11号室の部屋の中なのだと言わく気付いた。それと共に、昨夜己の身に起こった数々の出来事、そしてもう一度訊き返してしまいたいそうなくらい俺の常識と掛け離れた会話の数々を、全て、思い出した（残念ながら初対面で見知らぬ男にキスされたことも）。俺は咄嗟に両手で自分の犬歯を確認した。

「…あ……俺、…ドラキュラに、なってない、…」

自身の首筋に触れ、ぺたぺたと頬を触り耳を触り、指先でもう一度歯列を確認するようになぞる（ドラキュラってほら、歯が牙みたいになってるイメージがあるじゃん）。そしてポツリ、間の抜けた声で呟いた。

「なってない、……うん、なってない…！」

はあっ…と深く息を吐き出し、安心しきった俺は体の力を抜いてボスンッと後ろに倒れた。柔らかくふかふかな枕に沈み込む。天井が目の前にあって、きつと窓の外からだろう…鳥の鳴き声が可愛らしく聞こえた。一瞬にして、昨日のことが何十年も昔のことのように遠退いた気がした、のだが…。

「ダンピールにはならない方がいいよ。」

誰もいないはずと思っていた部屋に突然響いた声に、ガバッと起き上がる。目を凝らせば、部屋の入口に人影が見える——…窓を覆う薄いカーテンから差し込んだ光で、彼の髪の毛が赤茶に光った。それを確認して、俺は再びほとと吐息をついた。俺は戸惑いながらも、その名を呼んだ。

「……ミツ、それってどういうこと？」

両手で食事の乗ったトレイを持ってやって来たミツに、俺は問い掛ける。

するとミツはベッド脇の小さなテーブルにトレイを置き（そこにはパンと、温かくとても美味しそうなおいのするスープが見える）、すつと俺に向き直った。俺はベッドにいて、ミツは傍に立っている訳だから、自然と俺はミツの小さく整った顔を見上げることになる。

「そのままさ。君はまだ人間なのだから、わざわざ中途半端な存在になることはないよ。」

ミツは相変わらず鈴の鳴るような、男としては高い声で言うけれど、表情豊かなはずの彼の顔は暗く、瞳は夜の海のように静かに見えた。

ダンピール？　　そういえば昨日もこんな単語聞いた覚えが……中途半端な存在って一体――……。その意味深な表情に俺は言葉が聞えた。それを知ってか知らずか、ミツはコロツと表情を変える。と何事もなかったように明るい笑顔で、だけど申し訳なさそうに眉を下げて口を開く。

「昨日はごめんよ、丹。体は大丈夫？　　……ちゃんと説明するから、とりあえず軽く食べて、下に降りておいでよ？」

そう言って静かに微笑んだ顔は不思議と、彼の少年らしい顔をぐんと大人にして見せた。

ミツはそのまま他に何も言わず、窓のカーテンを開けてキラキラ輝くような日の光を部屋に招き入れると、振り返ることなく部屋を出て行った。

その小さな後姿を見送り、今すぐにも確かめたいことが沢山あったが、まずは腹ごしらえというようにミツが持って来てくれた朝食を頂いた。

案外俺って図太い神経してるかも……こんな訳分かんない環境で訳分かんない事態に巻き込まれながら、それでも腹が減るは出され

た飯は残さず食うは。しかもこうして体の芯まで温まるようなスープを飲みながら、俺の頭は大学のことやバイトのことさえも考え出している――……。今週はバイト休むって言うておいて正解だな……この状態じゃあバイトどころじゃないしなとか、しかし大学の近くにしておいてよかったな……。ここから通える場所だし、これならバイト先変える必要もないしなとか、無性に大学の友人である村田に会いたいなとか（奴は、俺が上京してから初めて仲良くなった友人だ）、昨日無事着いたって伯父さん家に連絡すんの忘れてたとか色々さ。

とりあえずシャワーだけでも浴びて着替えると、空になった食器が乗ったトレイを忘れずに持ちながら、いくつも部屋があるのにひっそりとした廊下を進む。中央の螺旋階段を下りた所で、ちょうどミツが談話室の扉から出てきた。ミツは俺からトレイを受け取りながら、：丹は談話室に、と目配せした。

「……………何から話せばいいか、……………正直、僕も迷ってるんだ。」

いきなりこんなことを言われたって信じられる訳ないって知ってるからさ、とどこか哀しげに赤羽さんは言った…。

俺は座り心地の良いソファーに緊張して硬くなって座りながら、向いに座る赤羽さんの顔を見ることは出来ずに、ここに来てからずっと、目の前の上品なデザインのローテーブルを見詰めていた。その間、赤羽さんも何だか気まずい雰囲気の中、脚を組んだり直したりしながら、俺に言うべき言葉を探しあぐねているようだった。しかし、赤羽さんの両足が絨毯の上に落ち着き、彼はふっと静かに呼吸をして、口を開いた。

「まず…端的に言おう、」

赤羽さんのグレーの瞳が眼鏡の奥で覚悟を決めたように光り、……………どんな夢物語だろうと、赤羽さんの言うことを信じよう、俺もそう覚悟をして、ごくりと唾を飲み込んだ。

「レイが君に言った通り、この屋敷はかつてヴラド2世ドラクル…僕の父のことだ。…彼がワラキアで権力闘争に敗れて日本に亡命した際、身を隠すために造られたものだ。確か日本だと室町幕府の頃じゃなかったかな、今伝えられている歴史上ではね。…」

まあそれに僕がちょっと手を加えて、今はこうして使わせてもらっているのだけど、と赤羽さんは続ける。そうして出来るだけ俺に分かり易く、言葉を選びながら話す彼の表情を見詰めたまま、俺はじつと耳を傾けていた。

「……さっき権力闘争と言ったけれど、それは正確に言うところ……一族の内部で起こったもので、俺達、ヴァンパイアの一族の、……」

赤羽さんが微かに口を開いたまま、一瞬自身を落ち着かせるように目を伏せ、喉を震わせ、静かに呼吸を繰り返す。そしてすぐに瞼を持ち上げると真っ直ぐに俺を見て、だけど一瞬こちらを見ただけで（彼の淡いグレーの瞳がゆらりと揺れた）また視線を落としてしまふ……。

「今では信じられないかもしれないけれど……かつてはヴァンパイアも人間と共存していた頃があったんだ。一族ごとに、それぞれ異なる王国に仕えて、……でも人間にしたら、俺達の驚異的な回復能力や特異な身体能力を利用したかっただけで、結局、戦の道具に使われただけ。俺達に対する人間の扱いも酷かった。……そこで一族の中でも人間に反感を持つ者たちが国を乗っ取り、それは後に種族間、同族同士の争いに発展していく。……」

『ヴァンパイア』……それじゃあやっぱりこの人も、……だけどそう思っても、不思議と特に何も感じなかった。恐れや嫌悪感や、そう

いうものも何も。ただ俺の中で、誰かが納得するように頷いただけ。だって、覗き込めば吸い込まれそうな万華鏡みたいに綺麗な瞳や、陶器のように滑らかで美しい肌や、あの時の一瞬で凍りついてしまいうるくらいに冷たい眼差しや、……そういうものを見ていて、分かるだろう？ やつとパズルのピースが合わさったみたいに。歪んで遠い世界のように見えたものが、やつとピントが合わさったみたいに。ああ……そっか、そうだったんだ、って。もちろんこの一言で片づく訳ではないけれど、俺の常識じゃあ片付けられなかった出来事も、すっかりこれで説明がつくじゃないか——…。

俺は押し黙ったまま、赤羽さんも少しの間口を噤んでいた。

しかしその沈黙も居心地の悪いものでなく、どこかひっそりと寂寥の感が漂い紛れ込んでいるものだった。

「……その頃、もちろん俺も国の内部闘争に巻き込まれて、……ある人と生き別れになってね。……いや、彼女は人間で俺はヴァンパイアの血を引くダンピール……当然、人間と吸血鬼との寿命は異なるから、死に別れになったんだって。……」

寂しい話の内容とは裏腹に、俺から視線を逸らすように横を向いた赤羽さんは微かに微笑んでいる……。

だけど、弱々しく光る瞳は何かを堪えるように瞬きを繰り返して、口元に浮かぶ儂げな笑みが自嘲的で、彼が自分を責めているのだと哀しいほどに俺には分かった。彼の笑みは美しく、だけどそれ以上に痛々しい。目を伏せれば瞳のグレーが消えて、長い睫毛がそっと影を落とす。

「その人の名はエレナ、……」

「…え、……」

ふっと、彼の顔が真っ直ぐに、懐かしそうに微笑みながら泣き出しそうな表情で俺を見た。エレナ…、そう呟くように繰り返す。

途端に俺は急に胸が悶えるような苦しみと、だけど仄かに心が温かくなるような、不思議な感覚に囚われた。急に息苦しくなって、まるで水の中にいるみたいにただ一心に酸素を求めて、は…と息をするように口を開いたまま、引き込まれるように、俺は赤羽さんの優しげに細まったグレーの瞳から目が離せなくなった。一瞬、彼の瞳はグレーなのに、それが紅く光ったように見えた。

「とても、素敵な女性だった。……ッ…探したんだ、ずっと、今まで、」

赤羽さんの声が震える。そして彼の願うような声が、俺の心を震わせる。

「俺はこの身体に生まれ変わってから、どこかに必ず彼女がいると信じてた。だから、探し続けた。それでようやく見付けたんだ。…」

彼は一度そこで口を噤み、唇をきつく結んでうつすらと微笑んだ。

だけどそのまま、ゆるゆると小さく首を振る。

「本当はこんなことを言うつもりはなかった……ただ一緒に時を過ごせるだけで、それなら何でも良かったんだ、……本当は。何も知らなくても、……何も知らないままで、……。」

「……——ッ……赤羽さんはその女性を、……いや、……『俺』を探して……いたんですか……？」

思わず、俺は口を開いていた。

赤羽さんは口を閉じてこちらを見詰めたまま、頷くことはなかったけれど、それでもその眼差しから、俺には彼の気持ち手が取るように分かった。彼は、赤羽真咲は、『俺』を探していた。かつてエレナと呼ばれた一人の女性、その生まれ変わりと信じられているこの『俺』を——……まさか、……そんなの、誰だってまさかと思うだろう。

俺は、今の俺のこの状況、俺の情けない背中を後ろから眺めているような感覚で、何が何だか分からず、ふと手が震えていたことに気付く。……ああ、俺はどこか不思議の国に迷い込んだアリスの如く、よく分からない幻の世界にいるんだ。絶対そうだ。いや、でもその半分は現実っぽくて、もしかすると俺は夢と現実の狭間に落ちてしまったのか。本当なのか嘘なのか、訳の分からない情報が洪水のように流れてきて、頭の中がめちゃくちゃにパンクしそうだ。俺にはまるで知らないことばかり、つか普通の人間なら絶対関わることはない事柄、それが我が物顔で俺の頭の中をずらずらずらと行進している。その所為か、鈍い頭痛がした。

だけどきつと、確実に、そのまさかなのだろう。

いや、でも、……ヴァンパイアの一族にワラキアの権力闘争に（絶対どこを調べても全て、知ってる歴史と噛み合わない）、……そして仕舞いに転生問題まで出てきやがったからな……！

「だけど……でも、……俺はそのエレナじゃないッ……！」

俺は俺の置かれたこの状況に眩暈を覚えながらも、反射的に口走ってしまった。

今更何を聞かされても驚かないぞ、とそんな気持ちでここにやって来た俺が、彼の話を聞き出して、すぐに弱気になったんだ。言葉を口に出してから、ハッと気付く。俺は話を聞きながら、それを冷静に確かめることなく否定しかしていない……。

赤羽さんは俺を見詰めたまま穏やかな表情を変えることなく、ただ、俺の言葉に頷いた。

「分かってる……君にそれを押し付けるつもりもないし、今聞いてすぐ信じてもらおうとも思わない。ただ……俺達のような『種族』を嫌わないでほしい……。人間を嫌っているヴァンパイアももちろんいるけれど、ここに住む者たちの全てが全て、そういう訳じゃないから。……君には、特に——……」

心の底から願うような、その優しくも哀しげな声に、俺はもう何も言えなかった…。

ようこそ赤羽館へ

あれから、ミツと俺は昼食をとり食堂にやって来た。

実は俺が起きたのは昼に近い朝で、そして色々話を聞いている内に、既に時刻は13時を過ぎていた。そりゃお腹が空く訳だ……そうぼんやり思う。

確か俺は方向音痴じゃない筈だが、部屋を出ればミツが待っていてくれたようで、にこっと可愛らしい笑みでお腹空いたでしょ？と言いながら、赤羽さんの話を聞いて少し呆然としていた俺の腕を引っ張った。…ミツもヴァンパイアなのか……でもこんなに近くにいて、一緒に話をしたり手を握ってみても、別に全然普通じゃん。どこがヴァンパイアだよ…真咲さんだって、そう見えないのに。でも…やっぱり、そうなのかな。……ただ俺が直感的に知る限り、真咲さんは冗談であんなことは言わない。

「あ、もしかして君が丹ちゃん?!」

食堂の奥のカウンター越しに、緑がかった鮮やかな青い瞳でこれまた鮮やかな赤毛の若い女性が、ミツと共にやって来た俺を見て、わーい！と嬉しそうに手を叩き、その場で踊り出すのではないかなと思うくらいはしゃいでる。俺がぼかん、と驚いていると、隣のミツが苦笑した。

「丹、この人がリユードジュリックだよ。毎日僕たちの食事を作ってくれる。毎食このカウンターに来れば出してくれるから。」

「ジュリアでいいわよ。その呼び名、長くて言い難いし私好きじゃないから。」

ミツの説明に、透かさず女性が付け足した。

そのジュリアという女性はにこにこしながら俺に向かって、よろしくね丹ちゃん、と快活に言う、白い美しい手をこちらに差し出した。それを握り返し、こちらでも微笑みながら頭を下げる（どうやら、この赤羽館のキッチンを取り仕切るのは彼女なのだろう。近所の元気な姉ちゃんみたいな雰囲気、とても親しみやすい人に思えた）。そうして顔を上げるといきなりぐいっと手を引かれ（突然のことに俺は、うえ?! と変な声を出してしまった）、ジュリアの顔が突然アップになった。青い瞳がじっと観察するように光って、カウンターに上体を乗り出して綺麗な顔を近付けられた俺はドキドキと戸惑う。……誰だって美人に見詰められればそうなるだろう!

「そっかぁ…男の子なんだぁ……——可愛い、……この仔、私の好みだわ。…」

強烈な眼差しで俺を見ながら、ぞくりとするような赤い唇が呟いた。

へ…?! と間拔けな俺の声が驚いたようにヒュッと響く。か、可愛い…?

「だああああ! ダメッ! ジュリア、ほら、早く離れて!」

突然大きく叫びながら間に割って入ったミツが、ぷんぷん怒りながらジュリアに何か文句を言っている。それを彼女はふふーんと口笛を吹き出しそうな顔で聞き流した。

「別にいいじゃない。取って食う訳じゃあるまいし。」

「ぎゃあ！ ジュリアだったらやりかねない！！ ダメ、絶対ダメ！」

からかうようににやにやと言ったジュリアに、ミツが頭を抱えて大きな声を上げて、俺に向かってジュリアに近付いちやダメだからねえ！ とも言った。その必死な様子を見ていたジュリアはまた何かからかってやろうかというような顔をしたが、あ！ と思い出したように向こうの調理場（まるでどっかの料理教室のように広くて、様々な調理器具が見える。素人の俺でもその設備の豊富さがよく分かった。こんなキッチン、例えば料理が出来ても使うには気が引ける）に引っ込んだ。

ぎゃあぎゃあ騒がしかった食堂が、急に静まった。

「…ね、ねえ、もしかしてあの人もヴァンパイアなの？」

ドキドキしながら、俺はミツにそつと尋ねる。

ミツは調理場を睨み付けながら（それでもその顔は、きつと睨まれている人でさえ可愛いと思ってしまいうくらい迫力がない）、うん

？ と無愛想に鼻を鳴らすように訊き返す。もう一度同じことを言えば、ああ：そっか、いつものミツの表情に戻って、何か自分で納得したみたいに頷いた。

「ジュリアはダンピールだよ。日中から普通に動けるのなんて、ダンピールくらいだよ。……まあ、そうでないヴァンパイアもいるけれど。」

「ダンピール……。確かそれって……。ミツもそうなの？」

「うん。簡単に言えば吸血鬼と人間の混血——……。人間にもなれる、望めばヴァンパイアにもなれる中間地点にいる者たち。」

「へ、へえ……」

「……東欧に伝わる話だと、ダンピールは吸血鬼ハンターとか生れつき吸血鬼を殺す力を持っているとか言われてるけれど、そんなの全然ウソ。吸血鬼の能力も人間の能力も半分ずつ持っているから、人間よりかはその身体能力も高いけれど、……。だけどどちらかというと、人間に近い暮らしをしている人たちが多いかなあ……。由緒ある純血の一族なんかは混血を嫌ってる奴らが多いし。それを知ってるダンピールたちは、……。自分たちから進んでそういう奴らの中に入っていくなんてしないだろう？」

少し眉を寄せ、だがさっきよりかは穏やかな眼差しで、ミツは続ける。

「あ、それと、現代に生きるヴァンパイアは人間たちが勝手に想像しているような……太陽の光を浴びると灰になっちゃうとか、そういうのはほとんどなくなってる。普通は朝が弱いヴァンパイアが多いけど、この時代、ヴァンパイアであることを隠して人間社会に溶け込んで暮らしている奴も多いし、それにヴァンパイアの血を抑える薬もあるし、長い歴史の中で徐々に環境に順応してきてるんだ。」

「そっかー……あッ、じゃあ十字架とかニンニクとかは？」

「ふふっ…僕も最初はそれ試してやろうかと思ったけれど、そんなのもウソ。残念だよね。」

俺の疑問にミツはクスクス笑いながら、上着の下から首に下げた十字架のペンダントを引っ張り出し、ウ、ソ、とはっきりと言った。何だかガツクリきた。

「でも、うーん…そうだなあ、ヴァンパイアは身体能力が優れていて、人より何十倍も鼻が効くし目がかなり良いから、人間にとっては不思議なことだらけだよな。だから、…色々な言い伝えがあるんじゃないのかな？」

軽くカルチャーショックを感じながらそこまで話していると、ジュリアがあゝら何話してんのよ？ とカウンター越しにやって来た。そしてカウンターにトレーを乗せて寄越しながら（トレーにはふわふわのオムライスとサラダが乗っている）、きつと絶対俺達の話聞いていたのだろう、……純血と信じられていたツェペシュも……実はダンピールだったとかね、と脈絡もなく独り言のように、どこか悪い顔でひっそりと笑った。

「え？ ダンピール……、ツェ……ツェペ……？」

「ジュリア、」

「……………あらあら、私はお呼びでないって？」

素早く飛んだ低く牽制するようなミツの声に、ジュリアは眉を持ち上げて肩を竦めた。

「私も話に混ぜてくれたっていいじゃない。」

俺はミツとジュリアとを交互に見遣る。ジュリアは冷やかに微笑みながら横を向き、しかしずっとミツに視線を向けた。そしてミツに向けて、笑みを浮かべていた口元を引き締めて一瞬真剣な顔をした。

「ミツちゃん、私だって同じ穴の貉。：彼には感謝しているし、立場もこの身体もまるで宙ぶらりんなダンピールが、完全な人間になりたいって思う気持ちもよく分かってるつもりよ。それを悪く言うつもりもない。」

「……ッ、分かってる。だけど、そういうことは言わない方がいい。ジュリアの言い方はそうは思えない時があるから。」

「………分かったわよ。：さっきのはほんの冗談、彼にちよつと意地悪してみたくなったのよ。」

意味深に言葉を交わす二人は、何だか一瞬険悪な雰囲気になって、ただどふうと溜息をつきながら、ジュリアが頷き苦笑を浮かべた。そしてミツだけに向けていた視線を俺にも向けて、さ、たんとお上が、とこちらにトレーを押し遣った。そして片付けをしてパタパタと足音を立てながら厨房から出てくると（カウンターの左の方に扉がある）、上に結っていた赤毛を解いて、食べ終わったらそこに置いておけばいいからね、と言って食堂からそそくさと出て行った。カウンター越しに見た厨房は、他に誰一人いなかった。

「……あれ、：ミツ、」

他にコックさんとかお手伝いの人みたいな、そういう人いないの？
そう聞こうと思ったら、ミツはさっさと自分のトレーを持って振

り返ると、カウンターの前に突っ立ったままの俺に、何やってんの、
と言うような目をした。

「早く食べようよ。僕、お腹空いて仕方ないんだからさあ。」

食堂の中央に置かれた長いテーブル（一体何人用?!　まるで晚餐会をする時みたいな長〜いテーブルだった）の真ん中辺りで、隣同士で座ったミツにさっき言おうとしていたことを訊いてみた。するとミツはもごもごと口を動かしながら、ふえ?　と首を傾げてこちらを見る。……口の周りにオムライスのケチャップが付いている。

「あー…いや、食べてからでいい、…うん。…」

までもぐもぐと咀嚼しつつ、それでも口を開こうとしていたミツを制して、俺はデザートとして小皿にあったイチゴを口に放り込んだ。甘酸っぱい味が広がり、隣でカチャカチャとスプーンを動かす音を聞きながら（他に人がいない上に、すぐ隣だからよく響いて聞こえる）、用意された食事をすっかり食べ終えていた俺は、やたらに広いこの赤羽館のことを考えていた。

ここの住人達は、変わっている。

単なる変人変態ならばまだ良いものを、なんと彼らは吸血鬼だというのだ（まさかそうくるとは……お釈迦様でも思いうまい）。しかしこの建物の、辺りの住宅とは噛み合わない異様な雰囲気（まるで何か強力な力が働いて、厚いベールで覆い隠すような…）、それも納得なのだけど。

今日聞いた話を自分の中でもう一度繰り返し思い起こして、俺は内心頭を抱えなくなった。

別にヴァンパイアだからといってどうこう言うつもりはない――

――…だって、ミツや真咲さんは、確かにどこか人間離れた変わった雰囲気を持っているかもしれないけれど、悪い人には見えないし寧ろ良い人そうだし、一見俺と変わらない人間にしか見えないし……。レイにしろ、ただ吸血病で狂った人なだけかもしれないし……（それもそれで困ったものだが）。

だけどそう思う俺は、どこかでヴァンパイアの存在をちゃんと認めていないのかもしれない。

というかそう簡単に納得出来るとも思わないんだけどね。でも、だからといってそれを忘れて、そういう世界とはこれっきり縁を切って違う所に引っ越したいのかといえば……ちよつと迷ってしまう（まず現実的に金の問題があるしな）。とにかく、もう少し気長に考えてみたら何か他に思うことがあるだろうし……自分の目で確かめてみたいと思うし……。

でもさ、文化や宗教が作り出したであろう物語や伝説の中でしか知らなかった吸血鬼がこのすぐ傍にいるなんてね……そんなこといったら、俺の今まで過ごしてきた世界が嘘のように崩れていく気がした。……今でも、目が醒めさえすればこれは夢になるのだろうとふっと思う。考えていると頭が混乱して、何が何だか分からなくなる。そういう俺の感覚は正常なのか異常なのか、今すぐ村田を呼び出して判定してもらいたいくらいだった。

「僕はさ、……15の時にここに来たんだ。」

すっかり片付いた昼食の器を睨み付けるように（別に睨んでいた訳ではないんだけど、周りからはよく目付きが悪いって言われたりする）しながら、結局は堂々巡りになってしまいう考え事をしていた俺は、え？ と隣を見る。

ミツは目の前の空になったお皿を見ながら、それでもどこか遠くを見るようにぼうつとした顔をしていた…。しかし何を思い出したのか、ふっと優しく微笑む。

「…………あれからもう7年経つけれど、僕、真咲のあんな顔見たの初めてだったよ。」

「…………えッ?!」

「だからやっぱり、君に会えて相当嬉しかったんだろうな〜って思ったんだ。僕も、丹と会えて良かったし。…………だからさ、その、」

人間とかダンピールとかヴァンパイアとか…そういうの関係無しに、仲良くして欲しいと思うんだ、そうやってもじもとミツが照れたようにはにかみながら（誰が見ても、少年らしいその顔は可愛らしいと思うだろう。それこそ見ているこっちの方が恥ずかしくなるくらい）言ったのを、それでも俺はどこか遠くの方で聞いていた気がする。…………なぜなら、頭の中ではうんうんと唸りながらある計算に勤しんでいたからだ。確かに俺の耳が狂っていないければ、15…15+7年…てことはミツは、にじゅう…——22?!…
俺より年上ええええ?!

思わずテーブルに手を付いて立ち上がり、ガターンッ…と物凄い

音を立てて椅子を引っ繰り返していた。

「うわッ丹、何やってんのさあ！」

隣のミツも驚いたように、座っていた椅子からぱっと素早く飛び退いた。

俺は呆然と立ち尽くし、もう…吃驚したじゃないか…とぶつぶつ文句を言っているミツをじっと見た。ミツは俺が倒した椅子をよしよと元に戻すと、じいーっと自分を見ていた俺の顔をはたと見て、はあ？ どうしたの？ というような顔で首を傾げた。

「……あ、あのー…もしかしてもしかしくとも。ミツって、……今年で22歳…？」

再び、はあ？ というような顔を向けて、……そうだけどそれがどうしたの？ とミツはケロリと言った。

「…………マジ？ ……」

半ば放心状態で、辛うじて零れた俺の掠れた言葉に、ミツはきょとんとした丸い目でこちらを見るだけだった。

だって、まさか、だって……22、これで…22歳？ そんなの反則、かわいすぎるだろ…！

「……—あーッ！ まさか丹、君まで僕のこと童顔って言うんだろ？！」

俺の心を読み取ったのか、ミツは憤慨したように目を吊り上げた。

「くそー！ ヴァンパイアの血はねえッ細胞の成長を抑制するんだから仕方ないんだってば！ ……だから真咲もレイもみんな若いだろ？！ あいつらだって本当はもっと年食ってるんだってば！ レイなんてあれで何百年生きてると思う？！ 僕だけじゃないんだよ！？」

仕方ないんだってばあ！ とまるで子供が駄々を捏ねるように、興奮してその場で足を踏み鳴らす。

俺はどうとう噴き出して、思わず宥めるように赤茶の髪にぽんと手を置いた。しかしそれがますますミツを怒らせることになるとは……。

「…ッこ、…子供扱いするなあああッ！」

まるで音楽ホールのようにミツの声が反響して、キンキンと頭に響いた。

ミツは食堂で俺が年齢について言ったことで、未だにブーブーと不貞腐れたように小言を零してる。しかし少し前を進む俺を見て、あ、と声を上げた。振り向けば、ミツは少しは機嫌が直ったようにいつもの表情で俺の傍までやって来た。

「……………丹、そっちは行っちゃダメ。」

そっち…というのは、この白い柵の向こうのことだろう。

俺はじつとその方向を見て（そっちの方もこと同じように緑の芝生が続いて、敷石が道を繋いでいるその先には、何か離れのような小さめの建物が見えた）、何かあるの？ と首を傾げてミツを見た。するとミツは苦笑を漏らしながら、ヒ・ミ・ツ、と言う。…………だからそういう顔が可愛いんだってば。

だが、行くなと言われてはいそうですかと納得出来ますか、止められれば止められるほど止まらない人間の習性を君は知ってますか———内心うずうずしながらも、ミツの視線が痛いので、俺は曖昧に頷いて引き返すことにした。大分日が陰って来たし、今日は大人しく戻った方が良さだろう。今度隙を見て確かめに来てやる。

「んー…じゃあそろそろ戻るか。」

携帯を取り出して時間を確認し、俺は欠伸混じりにそう言った。

談話室とテラスとの境は一面ガラス張りになっており（半分は白いレースのカーテンで閉ざされていたけれど）、ミツと俺はそこから外へ出て、今まで、どこまで続くのかと思うほど広い庭を歩き回っていた。

俺は自分の住む周辺は大体把握しておきたかったので、ぐるとこの近所を散歩した後は（平日の昼間だからか、道路も閑散としていた）、赤羽館内、そしてその周りの庭を見て回っていた（ミツは俺が迷子にならないようについて来てくれた。というよりも多分、見られたくない部屋とか色々あるんだろうな…）。俺達がテラスまで戻ると、テラスはたっぷりとした夕陽に染まり、あちこちに植えられた花々のいい香りに包まれていた。

……この赤羽館は広い。塀の外からは分からないが、その敷地は果てしない。

館内もちろん（俺もまだ行ったことのない部屋が1階の奥に沢山あるっぽい）、建物と敷地を囲う塀との間が広い。つまり、普通の家では庭と言うべきところが、まるで一つの公園のようなのだ。ブランコとか設置すればますます公園だと少々期待したが、大木にぶら下げた手作りっぽい木のブランコなんかは見当たらなかった（当然だ）。だけどそういう大きな木の下で、夏の午後や秋の日に読書をしたりのんびりしたら気持ち良いだろうなと思う。

あ、あと芝生に転がって昼寝するのも良いなあ…。誰が手入れしているのか分からないけれど、黄緑色で柔らかく瑞々しい芝生は、コンクリートやアスファルトに囲まれて暮らしている人間たちにはとても新鮮だ。普段子供たちが遊ぶ児童公園みたいな所でも見ることはないだろう。……ついかにどちらかというと植物園みたいな感じかもしれない。あちこちに珍しい植物も多いし、俺は全然分からないんだけど、バラの種類はそれこそバラ園が開けてしまうほどだ。

その辺りはバラの芳しい香りでいっぱいだった。

でも、：こういう雰囲気は嫌いじゃない。自然がいっぱいで、都会のど真ん中にこういう場所があるなんて思わなかった。思い切り深呼吸をしたら、花の香りや青臭い芝生のおいや、でもすっきりするような空気が気持ち良かった。

「ふう、……何か飲む？　何か入れてこようか。」

昼間ずっと歩き回って日の光を浴びていた所為か、ミツの肌はほんのり赤い、：俺ははっとした。

「ミツ、：ミツは太陽の光とか：本当に大丈夫なの？」

靴の裏の汚れを落とし、ガラスの扉から室内へ入ろうとしていたミツは、心配げに窺うように見ていた俺を振り返り、何で？　ときよんとした。何で、って…。

「……ああ、確かにヴァンパイアでもダンピールでも日光に弱い人はいるからねえ。多分僕もそうみたい。：だけど夏じゃないし、まだ日差しも強い方じゃないし全然平気だよ。」

相変わらずな顔でにこっとそう言ったミツは、ガラスの扉を開け放ったまま先に談話室へ消えた。

「——あゝ丹、それをそこに置くと次僕がこれをここにやって、チェックメイトになっちゃうよ？」

俺とミツは、談話室にあるチェス・テーブルを挟んで向かい合っていた。

先程ミツが持ってきたティーセット（：銀のそれは全体的に細かな装飾が施されていて、ポットの蓋のつまみ部分は花の蕾のような形になっている。何でこの建物にあるものは全部、俺が使うには気が引けるものばかりなんだ。手が滑って落としたらと思うと恐ろしい）。ミツは慣れているのか、無邪気にそれを扱っている。……あーああ、ミツが俺に渡したこのティーカップだって、真咲さんのような人が使えば絵になるのに）で熱い紅茶を頂き、一息つきながら、俺が壁際にあった木製のチェス・テーブルに興味を示したのが始まりだった。

一見それは八角形のごく普通のテーブルで、まるでその真ん中にチェスボードを持って来て張り付けたみたい、真ん中のその部分は柔らかな木の茶色の濃淡でマス目が作られていた。どうも、テーブルの表面にじかにマス目が彫られているようだった。チェスなんてやったことないし見たこともないからよく分からないのだけれど。

……それを俺が相当興味深そうに見ていたのか、ふっとミツが立ち上がり、近くの戸棚の中を漁って箱にまとめて仕舞ってあった駒を出して来て、やってみようよと言った。そして、ミツもあまりやることがないと言いながらも、チェスのルールやそれぞれの駒の動きなどを簡単に説明をしてくれた。うーん、将棋に似ているようなそうでないような……。

「うえッ…？ チェックメイトになっちゃうって…じゃ、じゃあこっち…？」

「丹、その駒はそこには動かせないよ。」

「……む、じゃあこっち？」

「うーん……まあこの状態じゃあ、そこしかないかなあ……。」

うおーッ！ と頭を抱えて奇声を上げてしまいそうくらい、俺は混乱している。

向かいに座るミツの可愛い笑みも、どうする？ と首を傾げた悪魔のような笑みに見える…。悔しい俺はチェス盤に視線を戻して、うぐぐ…と唸る。しかし生まれてこのかたチェスなんてやったことのない一般人に、恐らく上級者であろうミツの相手は出来まい。膝の上で握り締めた手の平がじつとりと汗で湿ってくるのが分かった。ああ、頭の中がこんがらがりそうだ！ これ以上考えていたら俺の脳味噌爆発する…！

「うう…リザイン。俺狂っちゃいそう…も、ダメ…。」

俺はがくりと項垂れて、自分のキングを倒して投了した。ええ

？ とミツがちょっと残念そうに言う。

しかし残念ながらこの俺に、頭脳を酷使用するゲームは不向きだ。ばばぬきとか、トランプみたいな気軽に出来る奴でないと———
：そう考えていると、背後でクスツと震えるような笑みが聞こえた。俺の肩越しに腕を伸ばして、その誰かの細長い指は俺が倒したキングを立て直す。

「まだ諦めるのは早いんじゃないかな、」

はっと顔だけ振り向けば、真咲さんが面白そうにすっと目を細めてチェスボードを見詰めている。い、いつの間に……！ ミツも俺同様目を丸くして驚いていた（扉が開く音も足音も何も気付かなかった……というよりも、不思議と、不意にそこに現れたみたいに感じた）。しかし真咲さんは俺達二人の視線を気にすることもなく、ミツの駒と俺の駒の位置を、そのグレーの瞳が一つ一つ確認するように追った。そして俺が座る椅子の背凭れに片手をつく、俺の耳元で、そこにあるクイーンを———と囁いた。

その低音と思った以上に近くに感じた気配に、思わずびく、と背筋を伸ばす。ちらっと横を盗み見れば、真咲さんは淡々とした普段と変わらない様子で（と言っても俺がこの人と初めて会ったのが昨日のことなのだから、普段と変わらないなんて分からないけどさ）、でも俺は真咲さんの言った『エレナ』の話とその時のこの人の表情を思い出して、この人に対してどういった顔をすればいいのか分からなくなっていた。

：何だか恥ずかしい。とにかく何だか分からないけれど恥ずかしい。

だけど真咲さんの伏し目がちの眼差しはただじっとチェス盤を見

詰めていて、彼がこのチェスゲームに乗り気であることに気付く。
：膝の上に置いたままだった腕を持ち上げて、汗を掻いた手で微かに震えながら言われた通りの所へクイーンを動かした。

ミツがうへえ〜と嫌そうな顔をする。

「真咲が相手じゃ勝てる訳ないじゃんかあ。」

助っ人反対〜、とミツが唇を尖らせて言った。でもそう言いながらもミツは駒を動かす。

「いいじゃないか、ミツ。僕もチェスなんて久方振りなんだし。」

真咲さんは優雅に微笑みながら、しかし確実に、ミツのキングを追いつめていった。俺は石のように座って動かないまま、後ろに立ったままチェスを動かす真咲さんの指先を見詰めていた。

その大きな手はごつごつとしたものでなく滑らかで、思わず触れてみたくなるような白い肌で、繊細な指先の爪はほんのりと色が付いていて、……——いやいや、俺が見ているのはその指が動かし駒の動きであって真咲さんの綺麗な手じゃなくて、：そ、そうそう、素人の俺が見ていても分かるくらい、その駒の動きは完璧で間違いないように思えた。

「そういえば、……君宛に荷物が届いてるんだ。ホールの隅にあるから、後で確認してみてくれないかな？」

真咲の薄情者おくと弱々しい声で嘆くミツを尻目に（既にチェスの勝負はついていた）、真咲さんの顔がふっとこちらを見る。背凭れに手を付いている所為かその顔は少し見上げた所にあって、柔らかな茶色の前髪がはらりと無造作に掛かっているのを、真咲さんは少し邪魔そうに横に払った。

「あ…はい、……——あ、あれ中身全部本とかだったんで…重くなかったですか？」

大きめのダンボールに詰め込んだのはほとんどが教科書やゼミで使う資料や文献などで、予想以上に重くなってしまい、俺でもこれはヤバいと思うくらいだった（持ち上げる際、主に腰が……。うう、運動不足の体にはキツイんだぜ）。しかし真咲さんは、あー……。多少重くても僕は大丈夫だよ、と曖昧な顔で頷いた。

「俺なんか後で持ち上げてみて、入れ過ぎたって後悔したのに…」

俺にとっては多少どころじゃなく重かったのだ。腕がもぎれそう

なくらい。

真咲さんの華奢な体をじろつと上から下まで羨ましそうに見ながらそう言えば、俺の視界の片隅でミツがぶふつと噴き出した。なんだよ？ と訝しげに見てやれば、ミツは口元に手を当てて少し抑え気味にくすりと笑う。そしてほうつと吐息をつくように、言った。

「やっぱり僕、丹のこと好きだなあ。癒されるっていうか……丹、面白いんだもの。気に入っちゃった！」

玄関ホールの隅に見覚えのある茶色の箱がある。明らかに俺の荷物だ。

足で蹴るようにして動かせば、こいつは変わらず重かった。はあ、と溜息をつき、そこにしゃがみ込んで箱の下にぐつと指を差し入れる。そのままふーつと深呼吸をして持ち上げようとした時、膝に手をついて後ろから覗き込んでいたミツが、手伝おうか？ と言った。

「んにゃ、大丈夫……多分ね、」

俺は表情を引き攣らせながらも、気を引き締めてよつと力を入れた。うわ、やっぱり重い……。螺旋階段を何段か上った所で、俺の顔があつという間にへにやりと情けないものになった。それを見兼ねてか、ミツはくすくすと遠慮なく笑いながらも、そつとダンボールの下に、箱を押し上げるように片手を添えた。

「……あれッ？」

ダンボールが軽くなった…？ 目を丸くして階段の途中でふと立ち止まった俺に、ミツはふふふと笑みを深め、ほら、早く上っちゃおうよ、とだけ言って2階を見上げた。しかし2階に上がって廊下を進んでいると、ミツは何かに気付いたようにあ、と口を開けて立ち止まる。

「電話鳴ってる……——あつ、僕また携帯部屋に置きっ放しにしてた?!」

あつと叫んでぱつと手を離す。腕の中のダンボールがぐんつと一気に重たくなった。

「だあああツミツ、急に手え離さないで…!」

「うわああごめん! でもちょっと…! ごめん丹お!」

ミツはこっちを見ることなくそう言ってタツと小走りに引き返すと、さっき通り過ぎた8号室のドアノブを握った。そして焦げ茶の扉を開けた途端、その隙間から、ピリリリと電話の呼び出し音が俺の方にも微かだが聞こえてきた。だけど扉を開けてこの近い距離だから聞こえるのであって、ドアを閉め切っていた状態で聞き取れることは困難だ。扉に耳を押し付けて聞こうとするならまだしも――

――…。プツリと電子音が途切れ、ミツの話し声が小さく聞こえる。開けっ放しになっていた扉がパタン…、と自然と閉まった。これではもう完全に部屋の中の音は聞こえない。

俺は抱えていたダンボールをよいしょと持ち直して（その時ようやく、ミツがダンピールで人間離れた力を持っていることに気付いた）、ヴァンパイアやダンピールの聴力に感心しながら、何とか一人で一番奥の自分の部屋に辿り着いた。

忠告

軽く握り締めた拳でコーンコーンと暢気にノックするよう
な―――だがそれが少しすると、ただただドンッドンッと拳
を扉に押し付けるようなものになる。

「丹ちゃん？」

もう一度トントントントと扉が小さく震える。

「おい、丹ちゃん？」

ドアの隙間から呼び掛けるような声。

一瞬、伯母さんが俺を起こしに来た声かと思ったが、今俺がいる
のは親戚の家の布団の中でなくふかふかのベッドの中だ。時間を確
認するためにサイドテーブルに置いてある携帯に手を伸ばして引き
寄せ、薄暗い部屋にパッと携帯画面の強烈な明かりがついて、横に
なったまま眩しげに目を細めて見れば、……。

「起きなさい！ ……まったく、これだけ私が呼んでいるっていう
のに……あ？ アンタじゃないわよ、私は丹ちゃんに用があるの。
うっさいわねえ！ そんな大きな声出さないでよね！」

……遠くの方に吠えるように、彼女は何だか途轍もなく理不尽なことを言っているような気がするのだが、半分以上がまだ眠っているような頭の中にガンガンと鳴り響く物音に耐え切れず（加えて他の住人との言い合いをこれ以上悪化させてはならない）、俺はよりりと立ち上がり、床の上に漂う冷えた空気に震えながら扉のドアノブに手を掛けた。小さくドアを開ける。

「あのー……ジュリア、…こんな時間に何の用でしょうか……？」

現在——……午前5時ちょっと前。

赤羽館に越してきて数日……。信じられない出来事に巻き込まれたものだが、大学もまだ休みだし、特に早い時間に用事の無い休日に、まさかこんな時間から叩き起こされるとは思ってもみなかった。

意外に薄暗く寝起きの目には優しい灯りが点いている廊下に、俺の弱々しい声がそろそろと窺うように響く。たっぷりとした赤毛を靡かせて、どこか違う方向を睨んでいたジュリアがこちらを向いた。ふっと俺を見て、あら、と表情を和らげる。

「おはよう。さ、丹ちゃん、こっち来るのよ。」

にっこり、そう効果音が付きそうなくらいな笑みを浮かべて、早過ぎる朝の挨拶（まだまだ夜が明けきらないのに）を簡単に済ませると、ジュリアはいつの間にか俺の手首をがっしりと掴んでいて、それはそれは物凄い力でぐいと引っ張った。

「でえッ?! …ちよ、何、何なの?!」

「このくらいの時間じゃないと、落ち着いて話せないのよ。」

ジュリアがそつと顔を近付けて面倒そうに言いながら、何かを警戒するように辺りに目を走らせる。その眼差しは鋭く廊下の端から端までを見渡した。

そうしている内に、俺は引っ張られて廊下へ踏み出した自分の足を見下ろして、踵が潰れて縋れたスニーカーを引っ掛けたままの素足、そして高校時代の臍脂色のジャージと部屋着のTシャツという出で立ちを思い出して、ドアの後ろに引っ込んだ。手首を掴んだままのジュリアの腕が、俺が無理やり閉めようとしたドアの隙間で叩いた。

「ちょっと、何ぐずぐずしてるのよ。」

「待って、とにかくちょっと待ってよ、俺起きたばかりだし、」

「いいじゃない寝間着のままでも。誰も見ちゃいないわよ。」

そういう問題じゃないだろッ……!

だがジュリアは女性とは思えないほどの力でドアを開け放ち（ま、ダンピールだからね）、内心ヒィィと叫び声を上げる俺を、有無を言わさず連れ出した。

薄暗い廊下には相変わらず人がない。

だけどこの間の、昼間に感じたような不気味に閑散としたものはなかった。真夜中町を歩いているように、ただ照明に照らされて無感動な影が落ちるように、でも確かに先程まで誰かがそこにいたような、そんな余韻のようなものが残っている不思議な感じがした。

何とか簡単に身支度をしたかった俺だが、肌寒さにパーカーを羽織って、結局下はジャージのままだった。ジュリアのあの強引さといったらもう、一度捕まったら絶対に逃れられないような気がする……。心なしげっそりとした俺を横目に見て、ジュリアが口を開く。

「純血のヴァンパイアたちにとっては大体：夕方日が沈んでから、夜明けまでが一番活動しやすい時間帯なの。基本的には人間やダンピールとは逆の生活ってわけね。だからこそも、そういう時間のサイクルがあるわ。夜寝ちゃう丹ちゃんには気にしなくてもいいけれど、もし気になるなら起きてるといいわ。真咲がいる時に限るけど。」

そうして俺達が螺旋階段を下りた所で、ちょうど玄関から入って来た青年がいた。軋んだ音を立てて開いた扉の隙間から見えた外はまだまだ暗く、辺りを囲む木々が鬱蒼と見え、まだ眠気が残っている俺は頭を振り、冷たい空気を深く吸い込んだ。

トンッ：と外から帰って靴の裏についた土を落とした彼は、ジーンズとTシャツというラフな格好で（それでもそのスマートな体にはぴったり合っている）ポケットに両手をつっ込んだまま、ふわああと隠すことなく大きな欠伸を漏らす。そして立ち止まり、俯いて

ちよいちよいと綺麗な金髪の頭を掻き毟って、はあと吐息をついて目を上げた。その顔を、ジュリアと食堂の方へ向かいながらちらと見て、大学でもこれほど格好良い人間は見たことないな……なんて、俺は感嘆するようにぼけっと口を開けた。外国人のモデルみたい。多分彼もこの住人だろう。

大体俺と同じ年くらい、それよりもっと若いかもしれない風に見える（……あとで気付いたけど、彼が俺と同じ人間だったらの話だなそれは。……つか、ヴァンパイアって男も女もすごい綺麗な人が多い気がするんだけど何で？）。長い睫毛に囲われた彼の瞳の色は澄んだ空色で、宝石のように真っ青に光っている。その彼が何だか疲れたようなしょんぼりしたような表情を、前を横切るジュリアを見付けてぱっと変えた。人懐こい顔がジュリアに呼び掛ける。

「ねえ、真咲、どこにいるか知ってる？」

「……………あんたさあ、いい加減諦めなさいよ。部屋に行っていないかったんなら私も知らないわよ。」

唐突な勢い込むような問い掛けに、ジュリアは半ば鬱陶しげに一瞥をくれてやりながら気の無い返事をする。そのまま俺を引っ張って歩き出すが、何を思ったかふと立ち止まって俺に向き直り、くっくと片手を上げて、あれが0号室のエドアルドよ、と面倒臭そうに青年を親指で指差した。0号室……普通のアパートやマンションでは無さそうな部屋の番号だが、思い出してみればこの赤羽館は全体で22部屋あると聞いている。俺の11号室が角部屋で、2階に12部屋3階に10部屋ということは、簡単に計算してもやはり0号室という部屋も存在しているようだ。

青年は素っ気無い紹介も気にすることなく、はい、俺はエドアルド・ニツカーですけどー？ と眠たげな間の抜けた返事をした。しかし目を凝らすように細めて、ようやくジュリアの斜め後ろ辺りにいる俺に気付いたようだった。

「えー？ 何さ、その子。…ん？ …人間？ ……ハハッ、まさかね。っーか俺、鼻弱いからにおいじゃ分かんないんだよな。」

はて？ というように首を傾げ、鼻先をくいつと指で擦ると、こっちにやって来る。ぺたぺたと平べったい靴が足音を立てて、エドアルド…と呼ばれていた青年が目を丸くして俺を見る。にこにこ笑っていた顔がふつと真面目に引き締まって、じつと推し量るように難しそうな顔をした。近くで見ると思いの外、鋭く射るような強烈な光が見えるその青い瞳に、愛想笑いを硬く浮かべている俺の顔が見えた気がした。

「見たことのない顔だなあ。…新しい人？」

ふつと俺から視線を逸らしてジュリアに問う。

俺の隣で、ジュリアが何だか分からないが、嫌な予感がする笑みを浮かべたのが横目に見えた…。そう感じた俺が咄嗟に口を開けるよりも先に、ジュリアが俺の手を強く引き、一瞬、丹ちゃんは黙ってなさい、というような視線をこっちに向けた。だがその瞳が、途轍もなく面白そうに光っているのを見て、俺は何だかひやりとした。

ジュリアは勿体ぶるように笑みを深め、上から見下ろすようにエ

ドアルドを見た。そしてわざとらしく口を開く。

「…ああ、そっか、エドは知らなかったつけ。」

そう言って一度口を閉じ、ふっと俺を見て、横目でエドアルドをちらっと見る。

エドアルドはきょとんとしながら、密かにほくそ笑むような（いや、正しく言えば見せつけるように嫌らしい笑みを浮かべてるようだが）ジュリアを見て、えゝなになに、俺に隠し事ゝ？ とおかしく言って口角を持ち上げる（ふうっと腰に手を当てて小首を傾げる仕草だって、エドアルドがやれば様になる）。

ジュリアは突然俺の肩に腕を回してぐいと抱き寄せると（どわっ？！ と中途半端に開いていた俺の口から奇声が漏れる。ジュリアは何でも突然だから困るんだ。美人とこんな密着する羽目になった俺は急に恥ずかしさで眩暈がした）、エドアルドから遠ざかるように少し後ろへ下がって、にやにやと笑みを浮かべる。

そして声高々にこう宣言した――…するとその言葉で、ジュリアの赤毛がふわりと鼻先を撫って俺の頬が熱くなった感覚も眩暈も何もかもが吹っ飛んだ。

「この子は神前丹ちゃん。正真正銘、人間だけど、真咲の――…
…そうね、フィアンセみたいなのだわね！」

「……はあッ?!」

見事に被った。俺とエドアルドの反応が。

とにかく天井を突き破るかのように、上擦った声が口から飛び出た。その後もキンキンとホールに響いた。

ファイ：ファイア、ンセ……？

聞き慣れない言葉どころか、どこをどう考えてその単語が出てくるのか、全くもって疑問に思うものである。

ぎょっとした顔でジュリアを見る俺と、同じくぎょっとしたまま大口を開けてジュリアと俺とを交互に見るエドアルドに、ジュリアはのほほんと笑いながら、だから手を出しちゃダメよ？ 丹ちゃんに何かあったら、それこそ串刺しになっても仕方ないわよねなどと訳の分からないふざけたことを言っている。

俺は呆然としたまま、間拔けな顔でジュリアを見上げていた（生憎なことに、隣に並んで立ってやっとなかったが、俺よりも彼女の方が背が高かった……）。だがケラケラ笑うジュリアは、何かを感じ取ったように突然ピタッと笑うのを止めて、あらやだ、冗談が過ぎたかしら……でも別に半分は真実みたいなものだし、ねえ……なんて言いながらも口元を引き攣らせた。不思議に思っただけその視線を追って見れば……冷や汗を垂らしながら、俺はすぐさまジュリアに視線を戻した。

「ちよちよ……ちよっとジュリア、何でこんな雰囲気になってんだよ

ッ？ 何かめちゃくちゃあの人怒ってない？ こっち睨んでない？」

見てはいけないものを見た気がした…。どうしよう夢に出そう…！

「いやいやいや、彼は決して私を睨んではない。丹ちゃんがそう思うのだとすれば、きっとそうね、彼は丹ちゃんを睨んでるんだわ。恐ろしい目付きね。」

「はあ？！ なにそれ！」

「愒気よ愒気。」

「リンキ？」

「嫉妬してんのよ。あーもー、男の嫉妬は見苦しいわねー。」

「誰の所為だよ！」

ジュリアと顔を近付けて小声で言葉を交わしながら、俺はふと、あれ？ と思った。…リンキ、りんき…愒気、…嫉妬してる？ どういうことだよ？ つーか、エドアルド？ 嫉妬？ エドアルドはジュリアの嘘に怒って、…嘘？ ジュリアは何て言ったわけ？

青褪めた俺を見兼ねて、ジュリアが口を開く。

「だーかーら、エドは、」

「……………ツツーか何で俺と真咲さんが?! ファイアンセ?!」

ぱっとジュリアの腕を振りほどいて彼女を見上げる。ジュリアは急なことに驚いたようにパチパチと瞬きをして、…………え、違うの? とケロツと言った。だあぁーッどう考えたらそうなるんだよ?! 俺が女だったとしても釣り合わねえよッ! いや、そもそも俺も男だし?!

「ちょっとちょっと、そんな怒らなくてもいいじゃない。だから冗談が過ぎたって言うてるのにい。」

「冗談って…………俺なんかなんて言ったら真咲さんに対して失礼だろッ!」

両手を握り締めたまま熱り立ってそう叫ぶように言えば、ジュリアは…………と固まった。

…………誰も口を開かないので、しんと何だか居心地の悪い沈黙が流れる。窓や扉の隙間ともどこからともなく入って来る明け方の冷えた空気に俺は少し冷静になって、は? と顔を上げ、ジュリアを見

た。ジュリアは何だか遠くを見るような目付きで、心なし同情するような眼差しを宙に向けている。…はあ、と溜息をついて何か呟いたようだが、それは俺には聞こえなかった。

顰め面のまま、だけど先程よりかは大分穏やかな表情になったエドアルドは、腰に当てていた片手を今度は自分の顎を支えるように当てて、ふうんと頷いた。そして長い人差し指をぴんと伸ばして、その先が俺を真っ直ぐに指示す。

「えーっと…？　じゃあ何、その人間は、…ジュリア、お前の勘違いじゃん？」

「…ッそうそう、そうですよ、えーとエドアルド…さん？」

何だかよく分からないが丸く収まりそうな気配に慌てて答えれば、エドアルドはなあんだ、とどこか安心したように力無く肩を竦める。そして疲れたような表情を一変させ、そっかそっか…あ、俺のこととはエドって呼んでくれよ、とにやにや人懐こい笑顔を浮かべて手を差し出した。

「ここに人間が来るなんて珍しいみたいだけど、俺もここ来たのつい最近だし？　もともと別に人間とかヴァンパイアとか関係無しに暮らしてっからな。…仲良くしようぜ、丹！」

よろしく、と差し出された手を取れば、ぎゅっと握った腕をぶんぶん上下に振って（それがまた馬鹿力…）離すと、次はパンパンと

音が鳴るくらい肩を叩かれた。何だか横に吹っ飛びそうなくらいに感じたが、それでもエドはにこにこ快闊に笑っている。その笑顔はからりと晴れた太陽のように明るく調子の良いものだが、それは全く嫌味のないものだった。

「ちょっとー、何であんたまでついて来るのよ。」

「丹と友情を深める為？」

「あんたがいると面倒なことになるのよね。ホントもう…。」

「ばか、男同士の方が話しやすい事柄ってのもあるんだぜ。そもそも男にはな、お前みたいな無神経な女には到底分かり得ないデリケートな面があるのだから。丁重に扱ってくれたまえ。」

「誰が無神経ですってえ?!」

俺を間に挟み、ジュリアはエドを睨み付け（…これも見てはならない形相である）、しかし俺の左側を歩くエドは気にすることなく前を向いたまま陽気にカラカラ笑い、俺の肩に腕を回してぐいぐい横に揺らす。何かもう、この2人に挟まれた時点で疲れてんだけど俺……何しに来たんだっけ…。

黙ったままの俺を無視し、ジュリアとエドで何かしら言い合いをしながら、そのまま3人、横に並んで食堂へと入っていった。

「ちょっとエド、私は丹ちゃんに用事があるんだからいきなり割り

込んで来ないでよね。折角明け方のこの時間帯を狙ったのに、…な
あんで一番うるさい奴が起きてるのよ。……」

廊下が薄暗かった所為か、照明に照らされた食堂は異様に明るく
感じられた。暗い中で一瞬だけパツとスポットライトを浴びたみた
いに目が眩んだが、すぐにその清潔な白い明るさにも慣れて、よう
やく俺の体もこの夜が明けきらない朝に活動を始めた感じがした。
そう思ったら何だか腹が空いて、温かいものが飲みたくなった。は
あゝと溜息をつく。

「はーん、『俺達』には聞かせたくない話か？」

エドが何か気付いた風に眉を持ち上げ、鋭い眼差しをジュリアに
向けて立ち止まり、それに冷やかに返すジュリアも立ち止まる。

「別に？ でも、まあね、馬鹿な純血共に食われない為に忠告をと
思っただけよ。」

何だか、ジュリアの言葉にはあからさまな嫌悪が含まれている。

「もうどうでもいいからさ、俺何か飲みたいんだけど——……」

ジュリアとエドの間を擦り抜けてふっと奥のカウンターを見れば、
どうやらこの食堂には先客がいたようだ。

カウンターのすぐ手前の位置にあるテーブル一角を占領している
その人は、あちこちに白いプリント：いや、何やらびっしりと黒い
文字で埋め尽くされている書類を広げながら、その真中で熱心に何
かを書き込んでいる。そしてはっとペンを持った手を止めて、黒く
長い髪を無造作に掻き上げてこちらを見た。モスグリーンの落ち着
いたフレームの眼鏡を、くっと鼻の上に押し戻す。彼女は俺と、後
ろの方にいるジュリアの姿を見付けて、ああ：やっと来た、と吐息
をついた。

「永沢くごめんね、さっきこのうるさい子に会っちゃって。」

はあっと大きく肩を竦める仕草をしたジュリアがエドを押し退け
て近くにやって来る。エドが後ろの方で何さ！ と憤慨しながら、
ぐちゃぐちゃに乱れた金髪を整え直していた。おそらくジュリアに
何かされたに違いない。でもその怒り方は子供みたいに頬を膨らま
せてぶんぶんしているだけで、本気で怒っている訳ではなさそうだ。
……ふと思うのだが、エドとジュリアでは、ジュリアの方が年上
なのだろうか。こうして見ていると、エドが圧されていて、力関係
はジュリアの方が上な気がする…。

「別に構わないけど。……神前くんも、こんな時間から起こされて眠たいでしょう？」

「え、ああ、いえ、……」

「ココアでも淹れてあげようか。」

永沢？ ……と呼ばれたその女性は少し低めの声でそう言う（しかし優しげな目元は眼鏡の奥で柔らかく細まった）、長い髪を靡かせてカウンターの奥に入って行ってしまった。そのすらっとした黒い影が厨房に消えると、ジュリアがすぐ近くの椅子に腰を下ろしながら、私はコーヒ―、と声を張り上げた。……とりあえず俺もその隣へ腰を下ろす。

「丹ちゃん、彼女もダンピールよ。法哲学の助教授やってるの。仕事場で使ってる苗字が永沢だから私はそう呼んでるけれど、本名は知らないわ。ああ見えても日本人じゃないし。」

ペラペラペラと水のように流れるジュリアの言葉に、はあ、とかへえーとか相槌を打っていたが、どここの大学か聞いて、某国立大の名前が返ってきた時は驚いた。俺の隣に割り込んできたエドがぼけっとながら、へえーその大学ってそんな凄いの？　なんて首を傾げていた。そうそう、そんなに凄いとこなんだよ。

「ジュリア、そんな紹介する為に連れて来たんじゃないでしょう？」

ふっと背後から落ち付いた声色が降ってきたかと思えば、さっと目の前に湯気の立つ温かなマグカップが置かれ、エドの前にも俺と同じくココア色が渦巻くカップが置かれた。永沢さんは最後にジュリアにカップを手渡す。

「うん、そうなのよ。……丹ちゃん、それを。」

ジュリアはコーヒーを啜りながら、自分の席に戻った永沢さんに目配せして、1枚のプリントを渡させた。そこには、同じくらいの大きさの長方形がいくつも並び、……——この赤羽館の間取り図のようなものが描いてあった。

永沢さんはそれを手渡すとさっさと自分の作業に戻った（ちらっと見たところ、担当しているゼミで使う資料か、課題用のプリントかなにかを制作しているみたいだった。分野が法哲学とか言っていたから、俺には全然分からないものだが）。エドは椅子を寄せ、テーブルに肘をついてこちらに身を乗り出すようにして紙を覗き込んでいる。

「大体この辺りは案内してもらったと思うけど、1階のこっちの方は一人で行かない方がいいわよ。特に夜はダメ。」

ジュリアが赤く飾られた爪の先を紙の上につーっと滑らせて、丁寧に描かれた廊下の部分を縦に断ち切るように跡をつけた。確かに主要な部屋は案内してもらったが、こっちの方は行ったこともない。ほとんどは鍵が掛かっていて、入りたくても入れないのだから。：何ががあるのか興味はあるけれど、ジュリアが真剣な眼差しで言うからますます興味をそそられたけれど、疑うようにこちらを見ているので、俺はうんうんと首を縦に振って慌てて頷いた。

ジュリアが顔を上げ、永沢さんからペンを受け取ると、間取り図に何やら書き込みをした。

「丹ちゃんの部屋は2階の11号室、ここよ。それで……えーっと、そうね、エドの部屋は0号室だから端っこのここ。永沢は5号室だから、ここ。」

そう言いながら、サラサラと各部屋の部分に名前を記入していく。細く丸っこい文字が、2階部分の何部屋かを埋めた。名前を書いているジュリアの横で間取り図を覗きながら、ミツの部屋が8号室で、レイの部屋が7号室で、千草マイの部屋が2号室であることを知った。

なんだ、みんな同じ2階だったんだ。ジュリアは俺が知り合った人物の部屋を書き込んでくれているみたいで、彼女自身は3階の18号室の部分に自分のサインをしていた。

「へえ〜…ああ、この『Ley』ってさ、あのおっかない奴だろ？」

エドも初めて知るように間取り図を見下ろしながら呟いた。何を思い出したのか知らないが、うげーと綺麗に整った顔を歪めてるの
で、ちよつと笑ってしまった。

「うーん、まあこんなものね。あと……真咲の部屋は13号室よ、
丹ちゃん。」

Vla…と書き掛けたそれを二重線で消すと、ジュリアは『Ma
saki』と上の方に書き直した。

間取り図を見ながら、やはり大体2階と3階は同じ造りで、だ
けど3階は行ったことがないあなんて思う。そう思った俺の心を見
透かしたのかどうかは分からないが、ここでもまたジュリアは一つ
注意するように俺を見た。

「特にそういうことはないと思うけど、万が一、3階に用事がある
時は私か…あと真咲に声を掛けて。もし私も真咲もいなかった時は、
絶対、レイに言っについて来てもらいなさいね。」

「……え？」

不思議そうに首を傾げた俺に、ジュリアはただただ絶対よ、と確かめる。でもそう言われてもなあ…どういうことだよ？ エドも何だそれ、と言うような顔でジュリアを見遣った。しかしジュリアはただ何か思うように俺を見るだけで、うゝん？ と怪訝に返事をした俺に、永沢さんの声が掛かる。

「神前くん、」

「……はい？」

振り向けば、永沢さんは視線を手元の資料に向けながらも話はちやんと聞いていたのか（食堂には他に人もいないし、声を抑えて話してる訳じゃないから普通に聞こえるか）、唇を結んで考えるような表情をすると、動かしていたペンを止めて、真面目そうに光る黒い瞳がこつちを見た。

「現代では生活環境も変わってきているから昔ほどではないけれど、古いヴァンパイアにはその血が急激に強まる時期と弱まる時期があるの。前者ではそういう場合、必ずみんな本能的になるし、後者では大半の力を失うから、弱っていることを周りに気取られないように大分神経を使うみたいね。」

永沢さんはそこでいったん一息つくと、ここで問題なのは…と視線を前に戻した。その横顔は冷静に何かを見据え、何かを捉えるよ

うで、大学で学生相手に教鞭を執るかのようだ。

「その周期が他人には全く分からないこと。つまり、普段からいくら人間に好意的なヴァンパイアでも——…人間はただの獲物にしか見えなくなる時だってあるわけ。親しい、信頼し合っている仲でも、ヴァンパイアが人間に危害を加えることはないとは絶対に言い切れない。残念だけどね。」

その言葉に、その見透かすような静かな眼差しに、なぜだか一瞬ぞくつと寒気がした。

永沢さんはさらりとそう言うと、俺を横目に見て、隣のエドに視線を移す。

「エドアルドもそうでしょう？」

「…………ツ、…」

エドは表情を変えないまでも、その眼差しは少し緊張するように、そして口元の笑みは硬くなった。微笑んだまま何も言わないが、その沈黙が逆に、触れてはならないという雰囲気を漂わせていた。

俺の右隣に座っているジュリアが既に空になったカップを手で包みながら、そういえば、と言う。

「ダンピールには人間の血が混ざっている所為か何なのか…意外と

バランスが良いのか知らないけれど、そういう不安定なことはないのよね……。大体そういう変化があるヴァンパイアには、一族の血が濃過ぎる所為もあるみたいよ。最近の若い子たちにはあまり聞かないし、時代ごとの環境の変化も関係しているのかもしれないけど……。」

その言葉に永沢さんは興味深いわね、と瞳を煌めかせて頷いた。だけどジュリアはううんと唇を尖らせるようにして、純血って秘密主義が多いから私達にはよく分からないわよね、と大分投げ遣りに言う。

「そりゃあ俺達にとっちゃ死活問題だからな。ほいほい他人に教えられっかよ。体がうまく利かない時に襲われでもしたら、例え相手が人間だったとしても一溜まりもないんだぜ？」

ここで初めて、エドがにやにやとおかしな笑みを浮かべつつ（それが自嘲的にも挑発的にも見える）、肩を竦めてそう言った。

「あら、そんなに弱っちゃうの？」

ジュリアが意地悪く目を煌めかせ、それならあந்தのそういう時期を探って、その時に打ちのめせばいいのね、とわくわくと言う。ぶちのめすって……。何かジュリアが言うのと洒落にならない。何の恨みか、その内本当に実行しそうな彼女の過激な発言に、俺は苦笑した。野蠻なんだから…嫌ねえ〜とエドもおどけて笑った。

「まあ簡単に言えば、3階に住んでいるヴァンパイアはそういう人たちが多いから、……神前くんは人間だし、一人でそんな所を歩かない方が良いつてことかな。普段何もなくても、実際に何が起るかなんて私達にも分からないから。」

「そうそう、昼間は寝てる奴等が多いから大丈夫だなんて思っても、うっかり廊下で物音立ててごらん。15，16あたりは特にヤバイわよく？」

永沢さんは辞書のような分厚い本を引き寄せてページを捲りながら言う。その言葉に頷いたジュリアはにやっと笑って再びペンを取ると、間取り図を自分の方に引き寄せて、15号室の辺りに太く湾曲した角を持つ山羊……のようなものを落書きした。

「15，16？」

何それ、と俺が紙を引き寄せれば、見た通りよ、とジュリアが素っ気無く返した。

……山羊？ ……15号室、16号室？ そこって誰が住んでるんだろう。エドに知っているかと問う視線を送れば、彼は、そんなの気にしたこともないなあ、と言うような顔をした。……もともと人間とかヴァンパイアとか関係無く暮らしていたと言っていたけれど、エドはただ他人に関心がないだけにも思える。

ジュリアはもう3階の住人の話に興味を失ったみたいで、飲み終わったコーヒークップを覗き込んでみていた。俺はあと少し残っていた、生温くなったココアを一気に飲み干した。

「ふうん……まあ今の所3階に行くことなんてないと思うけど。」

つーか管理人の真咲さんならともかく、何でレイに頼んなきゃならないんだよ。もし私も真咲もいなかった時は———：そんな風に言ったジュリアの言葉を思い出して疑問に思う。そもそもレイ自身が危険じゃん。実際襲われかけたからね俺。

「えー？　：丹、今度行ってみない？　どんな奴がいるか見てみたいじゃん。本物が見られるかも。」

こんな時代にもヴァンパイアらしいヴァンパイアがいるのかな、なんて変なことを言っているエドだが、……それよりも俺は、ヴァンパイアという生き物の不思議な体質？　というか生態？　というか、そういうものの方が興味ある。何を聞いても、結局人間の俺には不可解なことばかりだ。さっきの話も、実はそんなによく解っていない……。血が濃いか薄いとか？　何それ？

「最近はや、純血でも混血でも人間っぽいヴァンパイアばかり増えちゃって、まあこの時代で生活していくには仕方ないんだけどさ、なんつーか……会った瞬間に、こう、ゾツとするような奴がいなくなってる気がするんだよな。」

椅子の背凭れに完全に凭れかかって頭の後ろで手を組んで、エドは天井を見上げたまま詰まらなそうにぼやいていた。だが急に何か思い出したみたいにはっと息を呑むと、弾けるようにがばっと体勢を起こす。

「あつ、それでも真咲は凄かった…！ 俺さ、ここ何十年か色んな国歩き回って日本に來たんだけど、あの出会いは衝撃的だったな…！」

「は…？」

真顔になったエドはテーブルに腕を置いて俺の方を向いて、急に興奮したように話し始めた。その青い瞳は爛々と光って、その視線と気迫に、俺はうえっ?! と押されるようにしてエドから少し離れた。ジュリアの肩にぶつかる。いきなり自分の方へ寄って來た俺に、ジュリアは何よ、とこっちを見た。

い、いや…：なんとも不思議な状況になっていて……。エドに視線を移したジュリアが呆れた表情になった。

「あの時無性に腹減ってて、でも金もなかったし、一人くらいならいいかな…なんて思いながらふらふらしててさ、でもどうせなら見た目も綺麗な人間がいいじゃん？ 見るからに不健康そうな奴とか不細工な奴とか、絶対そういう奴等の血ってまずくない？ まあそうやって物色してたらまさにどストライクな奴がいてさ、ラッキー

って思って飛び付いたらそれがさ、」

は、腹減ってて…一人くらいならいいかなって…。

信じられない、というようにまるで異常者を見るような目をしていたのか、ぎょっと目を見張った俺を見たジュリアがぷっと小さく噴き出した。そして、だから言ったでしょ？ 純血なんて野蛮な奴らばかりよ、と肩を竦めた。

……っ—か血液に不味いも美味いもあるかよ。

エドは一度溜息をつき、遠くを見るような眼差しで、まるで当時の自分を呪うように、はたまた褒め称えるような顔をした。

「はあ…だけどまさか同族とは思わなかったな。…」

しかも物凄い隻眼…一瞬で俺の気配を見切ったんだから——…
……そうやって呟くように付け足された言葉。その時エドの青い瞳が一瞬、彼には似合わないくらい物静かな暗い色をしたように見えた。

しかしそれも次になればコロッと変わって、またうつとりするような色になる。はあ…とまるで女子が甘い溜息をつくみたいに、ふわふわしてるエドの表情は何かに盲信しているような、正直気色悪い（顔が良いからまだマシかもだけど）。

「あの凍り付くような冷たい眼差し…！ この世の全てを統べるよ
うな……もうあれ、ゾクゾクしたね！ これだッこれこそ俺が求め
ていた、高貴で狡猾な、冷酷無情な、本物の……！ ホント、久し

振りにそう思ったよ。何も言葉が出なかった。あの目だけで殺されるかと思った……！ 真咲になら殺されてもいいとも思ったよ！」

「……まるでワラキアの、カズィクル・ベイみたいなの？」

突然、ジュリアはひっそりと微笑むように、吐息を零すように素早く囁いた。

大きく目を見開いてジュリアを見たエドが、ドンツとテーブルに拳を打ち付け、ビンゴ！と言うように立ち上がった。その、狂ったように熱弁を振るうエドを眺めていた俺も、えッ…？ とジュリアを見る。カズィクル・ベイって…。

「ッそうそう！ それだ、串刺し公なんて…なんて適当な言葉だ！ それこそ真咲に相応しい！」

どこか恍惚とした眼差しで天を仰ぎ、興奮で打ち震えるエドとは対照的に、ジュリアは彼女が時折見せる不思議なほど冷めた表情をしていた。串刺し公…？ と眉を寄せた俺に、トルコの言葉でカズィクルは串刺し…ベイは君主の意味よ、とジュリアが呟くように言った。

「確か…オスマンの兵士たちがそう呼び始めたと聞いているわ。まあ、言い得て妙ってところかしらね。」

「へ？ オスマン…って、あのオスマン帝国？」

高校の世界史で習ったかどうか、とにかく微妙な記憶だ…。

そんな俺に顔を向けた永沢さんが微笑みながら、神前くんは『歴史』が苦手なの？ と首を傾げた。俺は素直に頷く。中学も高校も、歴史？ 社会？ 公民とか？ …その辺りは毎回テストでヒーヒー言いながらも何とか…ぎりぎりで乗り越えてきたという感じだ。それを想像したのか、永沢さんは困ったようにクスクスと笑った。

「そうなんだ。でもこの住人達は何十年何百年を生活している人が多くてね、…学校で習う歴史なんて実際のものとは比べると間違っているものが多いんだけど、全体的な歴史の流れを知っていて損はないよ？ 話の参考くらいにはなるし。」

「へ、へえ…。」

…歴史、…歴史かぁ。

確かに、俺が学校で習ったような『歴史』と、ジュリアや永沢さん、ミツや真咲さんが言っていたような話とはいくつも食い違ってくる場所があったな。だから話を聞いていても何が何だか分からず混乱したのだけだ…。

でももし、真咲さんが言っていたようにヴァンパイアと人間が共に生きていた時代があるのなら、…俺達が習った『歴史』の中にも、ヴァンパイアやダンピールの存在が隠されていたってことになるか？ それに一族ごとにそれぞれ異なる国に仕えてたって、そんなことも言ってたよな。…もしかするとオスマンやらローマ帝国や

ら、歴史上有名な戦争にも人間だけじゃなく吸血鬼も関わっていたってこと？ 学校では何年にどこで何があっただとか、条約がどうのこうの、それくらいしかやらなかったからなあ……。

永沢さんはちらつと横目にエドを見ると、彼も歴史の勉強が必要みたいね、と俺に向かってこっそりと言った。

「え……？」

「だって、カズィクル・ベイと赤羽真咲が同一人物だなんて知らない人は大体、人間たちが作った夢物語のようなくだらない『歴史』でも、じっくり吟味して事実と照らし合わせていく楽しみを知らない人よ。」

永沢さんはにこりと笑って、まるで呪文のように言った。

「カズィクル・ベイの訳語がツェペシユ。ヴラド・ツェペシユ——…ヴラド3世のニックネームだもの。」

もうひとつの忠告

「……みんなの年齢？」

何で？ というように、きょとんとエドが首を傾げる。

こんな時間からたくさん食べて満足したのか（朝っぱらからあの量を食うとは：見てる俺の方が気分悪くなる程だ）、エドは随分暢気な顔をしている―――：良くも悪くもジュリアのお陰で俺達は早めの朝食を終えて、食堂を出たところだった（永沢さんはまだ食堂で作業をしてるし、ジュリアもカウンター奥の自分の定位置に着いてぼーっとしていた）。

玄関ホールのステンドグラスにきらきらとした朝日が差し込んで、床に青や赤、黄、緑：と淡い色を落としている。さっぱりと綺麗な朝の空気で、その下を何事もなく通るエドは朝日が平気なんだろうかと思ったが、ふんふんと鼻歌混じりに機嫌の良さそうな顔をしている時点で、彼にとって日光なんてものはそれほど重大な問題ではなさそうだ。

そういえば、ヴァンパイアでも人間同様に普通に暮らしてる奴もいるってミツが言っていたっけ。まあその人それぞれってことか。

「だって気になるじゃん。同じくらいかと思ったらエドも年上みたいだしさ。」

つーか年上も年上：はつきり何歳って聞いた訳じゃないけど、生きている時代が違ってくるくらい離れてんじゃない？ 違い過ぎて、もはや呆れるしかない。そんな俺に、エドはそうかあ？ と言いたげな

顔をする。

「俺もまだまだペーペーだし？」

「エドが？」

思わず真正面から指差した俺に、エドは別に嫌な顔をするでもなく、うんと素直に頷いた。エドでペーペー…エドだって見た目はともかく結構な歳なんじゃない？ それでもペーペー？

「あ、多分勘違いしてると思うから言うけど、人間とヴァンパイアの寿命は当然違うわけだよな？そこは分かるだろ？」

「うん。」

「はつきりは言えないけど、普通のヴァンパイアなら6…7世紀はいくし…何千年って単位を生きる奴もいる。…俺のじいさんなんかいつから生きてんのか知らないけどさ、今も元気だし、それに比べたら俺なんてまだまだだってこと。」

そう言って、何か例えを探すように視線を逸らして、ああ、と口を開く。

「ほら、レイっているだろ？ アイツなんて見た感じだけでも……700、800はいつてるんじゃない？」

「み、見た感じ……。」

うんうん、と自分で納得するように頷いているエドだが、見た感じと言われても……。

いやいや、どう見てもそんな風には見えないって。そもそもレイってあの不思議なくらい紅い目が印象的過ぎて全体のイメージが……。しかもあの時の状況が状況だったし、年齢を推測出来るほど観察する余裕なかったし、それこそ俺の命の危機だったからね。

「丹から見たら、俺とか何歳に見えた？」

「え、だから俺と同じくらい。」

「……丹って何歳？」

エドが俺の顔を覗き込むように身を屈めて言う（これでも俺の身長も高い方なだけだなあ！）。

「う、今年で20…に、なるけど……？」

強い光を放つエドの青い瞳を見上げておずおずと言えば、思った通り、エドはころっと口を開き目を見開き瞬いた。

「…ツアハハハハ！ 俺、そんな若く見える？！ 20？ 『俺達』からしたら赤ん坊みたいなもんだけど20って、でも、……うわぁ何か嬉しー！ それじゃあ俺も丹の大学通えちゃう？！ いいなそれ、楽しそうじゃん？！」

………食堂で年齢について指摘した俺にミツが怒った気持ちに分かった気がした。
ケラケラケラと腹を押さえたエドが、俺の視線に気付いてか、歯を食い縛ってそれでも抑え切れずにクツクツと震えるように笑っている。

「おいエド、……」

「悪い悪い。でもさ、年齢なんてあるようで無いようなものだから。特に『俺達』には。」

腰に手を当ててふうつと息を吐いて、それでもダンピールは人間と同じように考えてもらっていいと思うけど、とエドはにやりと付け足した。

「ダンピールの寿命は大体が人間と同じくらいみたいだし。そりゃあ混血だから仕方ないかな。」

へえ〜：ヴァンパイアとダンピールもやっぱり違うんだ。

「あ、確かミツは22って言ってたな。」

自分でそう言ってたし、それは確かなんだろう。

でも思ったけど、ミツはもとから童顔なんだろう、あれは。例えばヴァンパイアの血が混ざってるっていてもねえ…。ぷくーと頬を膨らませて怒るミツの顔を思い出して、くすつと笑う。

「ダンピールかあ……それじゃあジュリアは、…」

そう言い掛けてエドを見れば、彼もきつと俺と同じことを考えていたのだろうけれど、透かさずシイツと人差し指を口に当てて、ダメだって！ あの女絶対地獄耳だぜ！ とひそひそしながらちらつと食堂を振り返った。

まさかこの距離で、とは思うけどミツの例もあった訳だから、ダンピールの聴力には人間の想像を超えるものがあるし……。こんな

こと話してるの聞かれたら絶対恐ろしいことになる：女性の年齢を詮索するなんて男の風上にも置けないわね！ と目を吊り上げて怒るジュリアの姿が思い浮かぶようだ。

「……50手前くらいじゃねえ？」

螺旋階段を上って2階について、ようやくエドがううむと顎に手を当てて考え込んでいた顔を上げた。主語がないので一瞬何のことかと思ったが、さっきの話の流れからしてジュリアの年齢のことだ。エドの真面目に考える顔に、苦笑が漏れる。

「うーん、もうちょっと若いんじゃない？ 流石に50って…」

40後半50手前って……俺からしたら完全にオバサンの位置だよな。そりゃあ中には若々しい人もいるけれど。でもジュリアはそうは見えないし（実際そうだったとしても絶対否定しそう）。

それにしても生活様式といい寿命といい、ダンピールって本当に『人間寄り』なんだな。ヴァンパイアでもなく、かといって完全に人間でもなく、それでも人間に似通っていて…ヴァンパイア的能力も受け継いでいて……。

「ヴァンパイアの血、かぁ。細胞の成長を抑制するとか言ってたからな。……それならもしかすると50代60代でも有り得るかも。」

俺もエド同様難しい顔をしながら呟く。

でもさ、……やっぱ人間と同じに考えたらダメじゃねえの？ ダンピールだって外見と中身が正確に対応してる訳でもなさそうだしさ。人間に比べれば、ヴァンパイアもダンピールも外見と実年齢とのギャップが激し過ぎる。永沢さんは精々30代……くらいに思うけど、ジュリアがそれより上っていうのはなあ……。まあ、ジュリアの物怖じしない堂々たる態度を見ると20代の若者には見えないうのも確かだが（あの自分勝手に物事を押し進めてしまう辺りとか？ あの強引さとか？）。

「そうそう。女は化け物だぜ？ それに混血なんて、人間より性質悪イ……。」

部屋の位置が真逆なので廊下に立ち止まって話をしていた俺達だが、エドはそう言って、一瞬苦虫を噛み潰したような顔をした。そして廊下の壁紙をじっと睨み付けながら、ふっと手摺に寄って吹き抜けのホールの下へ視線を移す。どこからともなく入り込む風が、下から上へ吹いて来る……。

明るいホールを見下ろしながら、エドはククツと肩を揺らして笑った。

「丹、」

「ん？」

エドの飄々とした瞳が俺を見る。

しかしその色は鋭く、強烈な光を帯びている。俺に向ける視線をふっと和らげて、だけど少し低く硬い声で（もしかするとそれがエドの本当の声なのかもしれない…）口を開く。

「あの女、そう簡単に信用するなよ———」

「エド…それ、どういう…」

信用するなって…ジュリアのことかよ？

眉を顰めてじっと見れば、エドはすっと目を細くして（微笑んでいるように見える）、俺の部屋とは反対側の廊下へ歩き出した。ペタンというエドの平たい靴の音が、絨毯に吸収されて消える……。

エドは金髪を掻き回して、背中を向けたままちらっと顔だけ振り

向いた。その顔はにやにやふざけた笑いを浮かべている訳でなく、本当に、親切から言っているような静かな顔をしていた。ふっと上を見て、視線を落とす。するとそれと同じように、長い睫毛が頬に影を落とす。

「あの顔、裏表があるってこと。：俺からのチューコクですよ、丹くん。」

ちらともう一度こっちを見て、眉を持ち上げ、口角を少しだけ持ち上げて（その横顔はどこか優しさもあって、引き締まった顔付きが逞しくもあった）、しかしすぐに、油断すんなよ〜特にお前なんてぱくつと一呑みにされちゃうぜ〜？ とにやにやからかうような声で言う。

「なっ…?」

そして大口を開けて欠伸をしながら、ひらっひらっ片手を振って自分の部屋に帰ってしまった。

「何だよそれ。…」

早起きは三文の徳

何だよ一呑みにされるって…。

半ば呆れ、半ば困惑。意味不明なことを言っていたエドを気にしながら（それでもあれは冗談を言っているような顔付きじゃなかった）、静まり返った廊下を進む。

今日はジュリアの所為で早起きし過ぎてるから、これからまた眠ってもいいと思ったけれど、朝食をとった後にすぐごろりと横になる気は起きなかった。頭がすっきりと冴えている内に何か片付けなくちゃいけないものを終わらせてしまおうか……。部屋の荷物を整理するだけで（まだダンボールに入れっ放しのテキスト類がある）、他には特に思い付かない。バイトは明日からで、今日は丸一日休みだし。

「ミツ誘ってチェスの練習でもしようかな……。」

チェスとか出来たらなんかカッコいいし？ 真咲さんほど強くならなくてもいいけれど、ミツには一度くらい勝ちたいし？

頭の後ろで手を組んで天井を仰ぐようにしながら、はあと息を吐く。そしてふと視線を下ろすと、ちょうどそのミツの部屋の前に来ていた。ジュリアに教えてもらった通り、2階の8号室だ（覗き穴の下辺りにはやっぱり何かカードが貼り付けてある。トランプくらいの大きさで、剣のようなものを右手に持った人物が中央に描かれているようだけれど、これも全体的に薄れてしまっていて分からない。何か意味があるのか？）。そして部屋のプレートには「Nanako」と名前が刻み込んである（そういえば初めてミツの苗字を知った）。

「へえ、ナナカド？…っていうんだ。…」

ななかどみつ…？

いや、ミツっていうのはやっぱりあだ名だよな、普通に考えて。
部屋の前で立ち止まって、廊下に誰もいないことを良いことに独り言をぶつぶつ漏らしながら、ふむふむと胸の前で腕を組み、何度か頷く。

「……………ってる。……………だけど、……………お前、……………」

ふっとどこからか誰かの声が聞こえた。

プレートから顔を上げて左を振り向けば、7号室の扉が開いている。ドアノブに手を掛けて立ち止まったまま部屋の中を振り返っている風なその人は、少しだけ疲れたように息をついて廊下に一步踏み出した。

「ああ、……………おやすみ、…」

部屋の奥に向かってそう言って出て来た真咲さんは、その背にミ

ツを背負っている（え、なんで？）。よいしょ、と背負い直して、足元に向けていた顔をふっと上げた真咲さん（眼鏡を掛けてないと、何だか印象が変わる）と目が合う。彼はあ、というように口を小さく開けて、今初めて俺に気付いたような顔をした。だけどすぐに微笑を浮かべてこちらにやって来る。

「おはよう。早いね。……よく眠れてる？ ……」

早朝だからか、周りを気にするように静かな声で、真咲さんは小首を傾げて俺を見る。その肩の向こうにミツの可愛らしい寝顔が見えた（むにゃむにゃと判断出来ないような寝言を漏らしながら、真咲さんの肩に頬を擦り寄せた）。

「あ……はい、ちょっと早く目が覚めちゃって。……」

ぐっすりと眠っているミツは真咲さんの首元に腕を回しているものの、ずずず……と重力に逆らうことなく下にずれていく。真咲さんはミツの脚をもち直して、またトンと背中に持ち上げるように背負い直して、ふっと苦笑を浮かべてみせた（寝ている人間は意外と重い。それが小柄なミツであってもだ）。

俺がじっと気になるようにミツを見ていたからか、昨日の夜随分遅くまで起きてたみたいでさ、と真咲さんが口を開く。

「ミツ、寝惚けて時々部屋を間違えるんだ。いつも談話室のソファ……とかでうたた寝しちゃってることが多いんだけど。……君も戸締

りには気を付けた方がいい。」

知らない内に君のベッドでミツが寝ているかもしれないからね、
と言って、真咲さんはクスクスと笑った。そうして8号室のドアノ
ブに手を掛けてドアを開けると、思ったよりも明るい部屋の中が覗
けた。

ヴァンパイアの部屋は（ミツはダンピールだけど）日光が入らな
いような造りになってるのかなあとか勝手に思っていたけれど、角
部屋で窓の数が1つ多い俺の部屋と比べても、それほど変わらない
みたいだ。正面に窓が1つあって（カーテンが半分ほど閉められて
いたけれど、窓の向こうにはチラチラと木々の緑が見える）、あと
はベッドがありデスクがあり、バスルーム、トイレ、クローゼット
があり……。大体同じ造りのようだ。少しだけ中へ首を伸ばして見
てみたが、意外にもミツの部屋はさっぱりと小奇麗で、あまり物が
ないように思えた。

真咲さんは勝手知ったるように進み、ミツを起こさないようにそ
っとベッドに寝かせてやる。ごろんと腕がシーツの上に放り出され
て、ミツガン…と唸った。けどどすぐに微かに顰めた眉をすつと元
に戻して、すうと心地良さそうに寝息を立てるミツの顔を見遣り、
真咲さんの横顔が少しだけ柔らかく笑う（まるで年の離れた弟を見
るような感覚だ）。そして、真咲さんの視線はふとサイドテーブル
の、水差しなどが置いてあるトレイに移る。そこには伏せられたグ
ラスの他に、万年筆のように太めなペンのようなものが2、3本見
えた（濃いブルーで、全部同じ形のものだ）。そのペンを丁寧に引
出しに仕舞って、ベッドで寝ているミツの所に日が差し込まないよ
うにカーテンを調節して、真咲さんは足音を立てずに廊下に出た。

「朝食はもう済ませた？」

パタンと静かに扉を閉めた真咲さんは左手首に右手をやりながら、
だけどそこにあるはずの腕時計を忘れていたことに気付いて、あれ、
とパンツのポケットを探り、シンプルな文字盤の茶色い革ベルト（
大分使い込んだ感じがある）の時計を定位置に嵌めた（立ち止まっ
て手元に視線を落として時計を嵌めている様は、すらりとしていて、
なかなか格好良い）。そして、時間を確認するのに顔を下に向けてな
がら（長い睫毛が下を向いて影を作る）、もしまだなら一緒にどう
かと思って、とちらと視線だけを上げてこっちを見た。

真咲さんのグレーの綺麗な瞳の色に釣られて、先程すっかり済ま
せてきたはずの俺は思わずこくりと頷いていた。

「そういえば、明日からバイト始まるんだっけ？」

談話室前のテラスにあるテーブルで向かい合いに座る真咲さんは、それで足りるのかと思うくらいの軽い食事をして、温かなティーカップを口元へ持っていていきながら、ふと思い出したように言う。それに、朝日に輝く芝生から顔を戻して（テラスにはとても気持ち良い風が吹いている）、俺ははいと頷いた。

俺のバイト先は駅向こうにある居酒屋だ。

流石に大学のすぐ近くは嫌だったので、大学の最寄駅から二つ目の相庭駅周辺にした（決めた時は、まさかここに引っ越すとは思っていなかったから）。あと、伯父さん家にいた頃は家の近くのコンビニでも臨時でやっていた。そこはオーナーさんが良い人だったから、引っ越しを機に辞めてしまうのは少し寂しかったけど。

とりあえずその居酒屋も、引っ越しのごたごたの為に1週間ほど休みを貰っていたが、それも今日でお終いだ。そこはそんなに広いお店じゃないし、来る客と言えば馴染みの常連客ばかりだけど、見た目以上に毎日忙しいのだ。これ以上休んではいられない（と言うよりも、稼がなくちゃ俺が生活出来ない）。

「だから明日から夕飯は、俺の分は抜いてもらって結構です。学校が始まるまでは毎日入れるんで…。必要な時はその都度頼みます。」

「うん、そうだね、一度リユードと話し合って決めてもらった方がいい。」

「はい、そうします。…」

真咲さんはリユードって呼んでるんだ。

何か意外というか、あまり女の人の名前に聞こえないし、一瞬誰のことを言っているのか分からなかった。リユードってジュリアのことか…そういえばミツが最初に紹介してくれた時に言ってくれた気がしたけれど。

朝食後、再び食堂へ顔を出した俺を見たジュリアが何を勘違いしたのか、丹ちゃんてば欲張りねえ…なんて含みのある笑みを浮かべながら持ってきてくれたのは、生チョコのように滑らかなガトーショコラだった。別に飲み物だけで良かったのだが、ジュリアは無理やり押し付けてきた。それで真咲さんにはいつも通りの食事を用意して、真咲さんと俺とをチラチラと盗み見しながら面白そうにやにやにやっていたな…。ジュリアの含み笑いは少し不気味だった。

ガトーショコラにフォークを突き立て一口パクリとすれば、しつとりと、とても濃厚な深い味が広がる。

「…あ、美味しい……。…」

思わずほうと声が出て、感心したようにガトーショコラを見詰める俺に、真咲さんはにこりと笑う。

「これ、すごく美味しいですね。こんなの初めて食べた…。どこのお店のなんですか?…」

甘過ぎず、紅茶によく合う。ぱさぱさしてなくて、じわりと蕩けるようだ。本格的な味わいに、自然と頬が緩む。

「リユードに伝えておこう。きっと喜ぶよ。」

真咲さんは目を細めて、優雅にティーカップを傾けた。……え、もしかして…。

「これ、ジュリアが作ったのッ…?」

へ…?! こういうのってそんな簡単に作れちゃうものなのか?! 確かにジュリアが出してくれる食事はどれも美味しいけれど、どれも馴染み易い温かな家庭料理ばかりだったから（時々どこだか知らない国の伝統料理みたいなものが出るけれど、ほぼ日本食だったし）、まるで職人の作ったようなこのケーキがジュリアの手によるものとは…。

「なんか信じられない…ジュリアって結構大雑把っぽいじゃないですか、…あ、悪く言ってる訳じゃなくて、性格的に細かいことは気にしないタイプに見えて、こんな、……………」

俺の言いたいことが伝わったのか、真咲さんがああ、確かに、と

頷いて口を開く。しかし口を開き掛けて、……おっと、というように指先で口元を覆った。

「……………誰が大雑把ですってえ？」

なによ、私のことを雑な女って言いたいの？ とねっとりと嫌味っぽく言うのは、音もなく俺の傍らに立つジュリアだ。ぎよっとして、フォークがカチャンと皿とぶつかった。

「え、いや、そうじゃなくて、」

慌てた俺にふんと鼻で笑うような仕草をした後、赤毛を揺らしてずっと真咲さんへ顔を向けたジュリアは、お客さん来てるわよ、と言いつつ軽く顎をしゃくった。

「そうか……………少し急ぎ過ぎたかな、……………」

真咲さんはどこか知っている風に言いながら、静かな顔のまま目を伏せる。そんな真咲さんに、腰元に手を当てたジュリアがやれやれ、というような顔をした。

「そう思っていたのなら、ちゃんと止めてあげなさいよね。」

「そう悠長なことも言っていられないんだよ。」

真咲さんははあ…と息をついて、空になったカップを置いた。

テラスを囲う柵に巻き付いた植物の丸い葉を指で弄っていたジュリアが（辺りにはその花の甘い香りが溢れている）、ふっと顔だけ振り向かせた。赤毛が靡き、鮮やかな青い瞳がちらと見えた。

「あと、……そうそう、アレ、言われた通りに渡しておいたから。」

……アレ？

ガトーショコラの欠片を口に含みながら、そっと視線だけ上げて真咲さんとジュリアを交互に見る。真咲さんのグレーの瞳が一瞬こちらを見て、丹はゆっくり食べておいで、と微笑むとイスを引いて立ち上がる。それと同時に、どこからともなく小さなトレーを取り出したジュリアがやって来て、真咲さんの使っていた食器を当然のように片付け始めた。

「ありがとう、助かった。」

「ええ、だけどヴィオーレは来なかったから、彼の分は残ってるわよ。」

「あー……そっか、どうしようかな、…」

真咲さんはふう、と太陽が輝く空を見上げ、今からじゃレイは無理だしなあ…そう言いながら、手を翳して眩しげに目を細めた。真咲さんの淡い茶髪が日の光を浴びてキラキラと明るく縁取られている。

「…まあ、僕が行けばいいか、…」

何てことないように呟いて、真咲さんはテラスを出て行った。

「……丹ちゃんは、甘いもの嫌いじゃなさそうね。」

真咲さんを見送ったまま、談話室に続くガラス戸の方を見ていた俺に、横からジュリアが声を掛ける。顔を戻せば、真咲さんが座っていた向かいのイスにジュリアが腰掛け、両手を顎に添えるように頬杖をついてこっちをじっと見ていた。口元をほんのり緩めて、その視線は俺の手元に向いている。

「…うーん、特に好きって訳でもないけれど、嫌いじゃないよ。」

このガトーショコラは美味しいし。

そう思いながら最後の一片を口に放り込む。しつこくない甘さは、あと一口、もう一口欲しいと思えるようなものだ。でも思うものに限ってすぐになくなってしまふ（あともうちょっと…って思うところで止めておくのが一番いいんだろうな）。

「あらそつ、良かった。次は何を作ろうかって思っていたの。」

ジュリアは機嫌良さそうににこっと笑窪を作った。

非日常の外的人物

「あーああ、そんなんだったら俺も引越してえよおー！」

チューハイの缶を傾けてぐくりと喉を震わせると、村田はがくつと俯き、はあ〜と大きく溜息をついた。赤羽館の一部屋の家賃を聞いて、安ッ！俺んところより安ッ！と村田が上擦った声を出して騒いだのが数分前。俺は今、悪友である村田公将のアパートに来ている。

ちょうど数時間前、昼食を済ませ自室で寛いでいる最中、突然携帯に電話が掛かってきたのだ。

電話を取った瞬間、すぐに駅まで迎えに来说われ、何が何だか分からず慌てて相庭駅まで行ってみれば、片手にコンビニの袋をぶら下げ、暢気に携帯を弄る村田がいた。小走りでやって来た俺を見つけ、奴はあっけらかんと、引越すっては聞いてたけど住所聞いてなかったんだよなーアハハーなどと笑った。

つまり、場所さえ分かっていたら、人の家に押し掛けるつもりだったってことだ（しかも昼間っから酒を持ち寄って）。村田には引越して一人暮らしを始めるってことを言っていたから、んじゃあ今度からは神前んところで集まろうぜ！と、人の家を好き勝手に使う計画を立てていたようだ。

だけど、友人とはいえ赤羽館に一般人（一般人の人間、ってことだ）を連れていくっていうのは相当の冒険だと思うので、つーかそもそも赤羽館自体が村田たちからしたら異世界みたいなものだと思うし（だって、ヴァンパイアなんて有り得ないだろ！普通の人が聞い

たら、変人の集まりじゃないかなんて思っちゃうよ）、何も知らずに入ったら命の危険があるというのを俺は身をもって知っているの
で、俺の新しい住まいを見たがる村田を宥め、何とか誤魔化すことに成功した。

「あかはねかん……って言ったっけ？ ……空いてる部屋ねーのかなあ
ー？」

村田は床に腰を下ろしてベッドに寄り掛かる状態で、伸ばした足は1年中出しっ放しの小さな炬燵の中に入れている（彼はどうしても炬燵が欲しかったようで、ベッドがあるにも関わらず、大抵は炬燵に潜って眠っていることが多い）。

村田の借りているアパートはそれほど古くもなく（この近所では比較的新しい物件だ）、大学へも徒歩で10分程度、自転車なら数分で行ける位置にある。ワンルームで、俺の部屋と比べると狭いけれど（一か月振りに村田の家に来たが、ここってこんなに狭かったっけ？ ……って思っちゃうほど、赤羽館の造りが大きいのだ）、普通に考えたら大学生の一人暮らしには十分過ぎる広さだった。

「まあこども悪くはねーけど、出来るだけ出費は抑えたい訳じゃん？ ……お前の話を聞く限り、いい部屋みたいだしさあ。……」

縁を指で摘むように持ちながらふらふらと缶を揺らし、村田はほんのりと血色の良い顔を向ける。

しっかしなあ……お前の言うような建物、あの辺りにあったかなあ……？ ……と村田の目がそう言っている。少し羨ましそうな顔をした

ので、俺はさあなと肩を竦めて缶チューハイを呷った。……赤羽館のあの外装は目立つと思うんだけど。

「そういえばさ、…あの子、どうした？ この前お前すげー気に入られてたじゃん、」

あ、と思い出したように言って、村田はどこか楽しそうに身を乗り出した。この前、数合わせで参加させられた合コンの話だ。

村田は顔だけはいいので、こういうことにはよく誘われているが、こいつには1年の頃からちゃんとした彼女がいる。それもとびきりの美人。まあ美人って言うよりもカワイイ系と言った方が近いかもしれない。デイズ二一の映画で出てくるような、くりくりと大きな目とすっとした鼻と、魅力的な唇を持つ女の子。同じ大学でフランスからの留学生だが、密かにファンクラブのようなものもあるらしい（しかしその彼女が村田と付き合っていると知れた時には、誰もが我が耳を疑ったことだろう）。

彼女は容姿もちろん、中身もできた人間だ。彼女を差し置いて、誘われれば二つ返事で行ってしまうような村田には勿体無いくらいの…。だから俺だって、村田の友人とはいえ、なんで彼女のような人が村田みたいな奴を好きになるんだろうなあなんて、不可思議な世の中だと思ったものだ（とはいえ2人はかなりうまくいってるよ。うだから、外野が口を出すのは野暮ってもんだ）。

「あれから何かあった？ 連絡とってんの？」

「ある訳ねー。」

わくわくと期待するような視線を無視し、俺がうんざりしたように返すと、村田は唇を尖らせてふーん？ と頷く。そして結構かわいと感じの子だったけどなー、と詰まらなそうに独り言つ。彼はこの手の話が好きなのだ。

……全く、そんなこと言うのはどの口だ。俺は呆れて、マリアは？ と彼女の名前を出してみた。すると村田は手の平を上に向けて、やれやれ、と外国人のように大袈裟なジェスチャーをした。

「あー、あいつ、休み入ってから実家に帰っちゃって、まだ日本に戻ってきてないんだよな。」

「え、そうなのか？」

……ん、と静かに頷く村田はケラケラと笑っているくせに、少しだけ寂しそうに見えた。

「∴父親の反対押し切って日本に来たみたいだから、1年の頃からずっと揉めてるらしいんだよな。……あいつもあまり言いたくないみたいだったから、詳しく聞いてないんだけどさ。今度こそ納得させてやるって意気込んでたけど。」

「でももうすぐ学校始まるぞ？ 連絡は？」

「ん、そろもうばっちりよ。お前にもお土産買ってくって言った。俺は神前になんかいらないって言ったんだけどお。」

空になった缶を床に置いて、村田は振り返って、今まで自分が寄り掛かっていたベッドに突っ伏した。ぼふっと布団が沈み込む。暫くそうして突っ伏したまま、うー、だとか、あー、だとか意味のない言葉を漏らしていた（多分気持ち悪くなったんだろう。そんなに飲んでないのに、村田にしては珍しい）。

そんな村田を放っておいて、一人暮らしの男子学生にしては大きな過ぎるテレビの横に積まれた幾枚ものDVDのコレクションをぼんやり眺めていた。村田の趣味は映画鑑賞で、アクションやらラブストーリーやらホラーやら何やら色々なジャンルの映画を観ている。だからそのコレクションも大量で、この部屋にどっさりがあるDVDはほんの一部らしい（ここには村田の気に入ったものしか置いてなくて、残りは全部実家に放置らしい。時々家に帰った時に、この部屋に置いておくDVDを再び選出するようだ）。映画のタイトルを見ていると洋画ばかりかと思ったら、奥の方には韓国映画が沢山積まれていた。所謂、純愛物というやつばかりだ。

「あ、その左のやつ、結構笑えた。」

「これ？」

「そうそう、おくさまは18歳ってあったじゃん？ あれを韓国版でリメイクしたみたいなの。知らなかったんだけどさ、」

ベッドの縁に寄り掛かり直した村田が、どうでもよさそうに言った。そしてテーブルに置いてあった煙草を取ると、銜えた煙草の先へカチカチとライターを近付けた。ちら、と視線だけ向けると、いる？　と言いたげに顎をしゃくろるが、俺は首を横に振った。

「わり、お前ダメだったっけ？　消した方がいい？」

口先ではそう言いながら、毛頭消すつもりもない顔付きだ。俺は溜息をついた。

「……いや、いいって。どうせ普段はマリアに禁煙言い付けられてるんだろうから。」

「あー……さすが我が友よ、お前みたいなやつが友達でよかったー、近頃喫煙者には厳しい世の中になりつつあるからな。」

「はいはい、思ってもないことを口に出さない方がいいぜ。……つかこれ観ていい？」

「おー、俺さあ、その、……何だっけ、永峰……何とかって女優好きだな。早く観ようぜ。」

「永峰ユウね、あー、お前の好みそのものだよな。」

：若干つり目だけど。でも無邪気な笑顔は可愛いと思う。

そんなことをぼんやり考えつつ、リモコンを探す。こいつは確か、ペンをペン立てに仕舞うみたいにごちゃごちゃと、テレビからエアコンから色々なリモコンをまとめてカゴに仕舞ってたはず。

や、つり目がいいんだって、あの子は、なんてぶつぶつ言いながら、村田がテレビのリモコンを俺に投げ付けた。

かつての評判、世間の認識

「お疲れさん。……—————そういやまこちゃん、赤羽館に引越したんだって？」

バイトを終え、控室で休んでいると、この店の先輩の響さんがやって来る。

確か響さんはこれからラストまで入ってるはずだ。仕事前の一服と言いながら、響さんはタバコを銜えて俺の向かいのイスに腰を下ろした。

「そうなんです、ここから近くて良かったなんて思っ

約1週間ぶりのバイト先は相変わらず賑わっていて、休みだからといって昨日までぐだぐだ赤羽館で過ごしていた俺としては、今日の数時間で大体が引き締まったような気分だった。正直足がだるかったりする（接客に関しては精神が擦り減った気分）。

背凭れにぐったり寄り掛かった響さんがタバコを吹かしながら、だりーよなあーと小さく漏らす。そこへ、ガチャリと控室のドアが開いて、きゅつとまとめたポニーテールがトレードマークのアルバイターである柳栄子さんが、あれよね駅向こうの、管理人がイケメンのアパートメントでしょ！ と突拍子もなく言った。一瞬何のことかと思ったが、俺の引越しの話を聞いていたようだった。

「栄子さん知ってるんですか？」

「ううん噂よ。まだ若いんだけど凄くしつかりしてて、超イケメンだって、ご近所の奥様方が。すごい評判なんだから。」

俺が聞けば、ぶんぶんと首を振った栄子さんは期待するような目で、だから本当の所それを聞きたかったのよね、とキラキラした顔をした。神前が来る日、楽しみにしてたんだから、とも言う（でもそれって赤羽館のこと聞きたいからなんだろ）。知りたいと思うのは分からなくもないけれど、なんだか言いたくないというか居た堪れないというか、もやもやする。何だろう。

「ああ、そういえばあの洋館も人が住むようになって変わったんだよな。」

響さんは頷きながら、ほうっと思いつくように天井を仰いだ。

響さんの口とその手元からぷかぷかと揺れる白い煙を一瞥して、栄子さんは顔を顰め、店に出る前に吸うなって前にも言われてませんでした？ と厳しい口調で言った。それでも響さんは聞こえない振りだ。この2人はいつもこういう遣り取りをしてるから（結局響さんは直そうとはしないし、栄子さんは思い立てばいつだって響さんのタバコのことをグチグチ言ってる）、俺は巻き込まれないように何も言わないようにしてる。

「変わったって…あそこって、前はとうだったんですか？」

「確か……俺がこっちに越してきた頃にはさ、まだ誰も住んでないみたいで、しかも今よりもっと古くて汚らしくて、あの近所じや不気味がられてたんだよ。ほら、周りに植わってる木が日を遮って薄暗くって。俺も当時大学のダチと見に行ったけど、」

「へえ、それってじゃあもう30年は前よね、」

「はあ？ そんな前じゃねーだろ、今俺のこと何歳だと思ってんの栄子ちゃん。…ま、なんだかお化け屋敷みたいだって言って子供たちが入り込んで悪戯したことがあったり、小火騒ぎがあったり、」

あれからいつの間にか気が付いたら今みたいに立派な塀で囲われて中も見えなくなってんだよな、と響さんが言った。それじゃあその頃真咲さんが日本に来て赤羽館の建て直しをしたってことかな…。

「私、この前、駅向こうに用事があったってそっちの方散歩してみたんだけど、ホントあの塀、高過ぎよねー。散歩ついでにイケメン管理人をこの目で拝みたかったんだけどさ、でかい門も開く気配ないし、……あ、そういえばさ、」

「その管理人はともかく、そこに住んでる人間、夜遅く出掛ける人が多いみたいで、どんな人が住んでるのか色々噂されてるみたいだ

ぜ。」

「神前、赤羽館に赤毛の外人って住んでない？ 私、昼間に一人だけ見たことあるんだよね。何か持ち切れないくらい沢山荷物持って、買い物帰りみたいな感じだったけれど、綺麗な女の人だったのよねー……」

ああ、それって絶対ジュリアのことだ。ジュリアの、栄子さんの言葉通りの姿が思い浮かべられる。大の男でも顔を顰めてしまいそうなくらい重いものだって、顔色一つ変えずに持ち上げてしまいそうだもんな。

栄子さんはその時のことを思い出すように、視線を斜め上に向けた。響さんは、へえ、と興味無さそうに相槌を打った。

「赤毛で、緑っぽい瞳の色だったかしら……。」

「結構……外国の人が多いと思いますよ。まだ会ったことのない人の方が多いですけど。」

とりあえず皆日本人ではないし、無難にそういうことにしておけ。

「そうよね、その噂の管理人さんも随分整った顔してるって言うから、ハーフとか何かかなあ。」

うつとりと栄子さんが呟いて（何を想像しているのか、眠たげな表情のくせ、その口元は幸せそうに緩んでいる）、ほうっと溜息をついた。結局栄子さんが気になっているのは、ご近所で噂されている管理人が美男子であるか否かで、それ以外のことは興味無いらしい。

「……あ、じゃあ俺もそろそろ、」

ふ、と部屋の奥に掛かっている時計に目が付いて、大分遅い時間になっていることに気付いた。

響さんと話をするならともかく（俺の知らない、昔の赤羽館のことも知りたいし）、栄子さんに真咲さんのことを細かく突っ込まれない内に退散するでしょう。そう思って俺が立ち上がった時、短くなったタバコを押し付けた響さんが何かを呟いた。

「……え？」

栄子さんにも聞こえなかったのか、俺たちは同じようにきょとんとした顔で振り返って見た。

「思い出したんだけど、昔はあそこ、精薄の人間収容する寮か何かって思われてたんだよ。変てこな住人が多かったから。何せ、あの辺りをうろつく人間も、見掛けは普通なんだが何か違ったんだよね……。今の時代じゃ、髪の色とか目の色とか容姿は日本人じゃないか

らってことで納得したかも知らないけど、……」

あの高い塀もあの開かずの門も、そういう連中を閉じ込めておくって意味で造ったんかなって言われててな、と言う響さんは何だか複雑な暗い顔をして、イスから立ち上がった。

「20年は前かな。今じゃそんな風には言われないけど、今みたいにキレーな雰囲気になったのはホントつい最近ってことだな。」

俺たちにハッと乾いた笑みを浮かべて、そんじゃーな、と響さんは部屋を出て行った。ぴしゃ、と扉が閉まって、何だか気分の悪くなるような沈黙になる。：セイハクの、シュウヨウ、：？

「なにあのオヤジ、」

栄子さんは憤然とした表情になっていた。確かに、何か嫌な感じだ。折角バイトも終わってスツキリしたっていうのに。

もうどこも寝静まった頃で、灯りといえばポツポツと立っている外灯だけで、立ち並ぶ大きな住宅が黒い影になって闇に混じっている。無意識に足が速くなる。夜中の住宅街って自分の他に誰も起きていなくて、道にも誰も車も通っていないくて、不思議と開放的な気分になるけれど、静か過ぎて逆に俺は今日店で聞いた話を思い出していた。

もうすぐで赤羽館の重厚な門が見えてくることだろう。普段、俺たちはその脇の小さな扉から出入りしているから、決して開くことのない正面の門――……。何でここが使われてないんだろうとか（まあここを開放しておくこともどうかと思うし、あの巨大な門をいちいち開け閉めしたら手間が掛かるしな）、ぼんやり考えながら近付いていくと、暗がりの中、路地の向かいから誰かがやって来るのが分かった。赤羽館の入り口に掛けられた小さな外灯だけじゃよく見えないけれど、ほっそりしたシルエットから女の人だってことは分かる。

「……あ、マイ、さん……？」

遠慮気味に呼び掛ければ、昼間とは違って凜と透き通るような声が、今帰りなの、大変ね、と答えた。すっと滑るように灯りの下にやって来た千草マイさんを見て、さっき暗がりで白くぼうっと浮かび上がるように見えたのは（子供が見たら幽霊と勘違いしそうだ。ちょうど、お化け屋敷だなんだと騒がれていた昔の話を思い出した）、彼女が纏っているマントの所為だったのかと納得。

「今日はいいい夜ね。でも何だか、星が騒がしいわ、…」

マイさんはそう言いながら、顔を覆うベールの奥から空を見上げる。俺も釣られるように夜空を仰ぐ。すると冷たくもなく温かくもなく、さっぱりとした風が吹いていて、雲もなく黒く見える空にぽっかりと黄色っぽい月が浮かんでいた。多分俺の目だから星も見えないんだろうけれど、隣に立つマイさんは、星の煌めきをその瞳に映していることだろうと思う。

ヴァンパイアと人間の視力なんて、どれほど違うんだろう…。

「……………2人してこんな所で、…月見ならテラスの方がいいんじゃないかな。」

朗らかに笑う声が聞こえて振り向けば、真咲さんが門に手を掛けて立っていた。

「今の時間じゃ騒がしくってダメよ。」

淡々と言ったマイさんに肩を竦めてみせてから、真咲さんは一度こっちを見て、おかえり丹、と優しく笑ってくれる。そのグレーの瞳に見詰められるときゅつと身が引き締まるような、嫌な緊張じゃないけど、一瞬どきりとしてしまう。……………そういえば真咲さん、眼鏡掛けてないや。何でか、白衣みたいなものを羽織っているし、…いつもと違う。

「あ…た、だいま、」

ぺこりと会釈したら、ちょうど、真咲さんの後ろから誰かが出てきた。スーツを着ていて、一見仕事帰りのビジネスマンみたいに平凡な人間（少し顔色が悪くて、乾いた唇を頻りに舐めている。神経質っぽい感じ？）。赤羽館と関わりがあるような人間には見えない。でも館内に入れるってことは、全くの純粋な人間ではないってことなのか？ だったらダンピールかな。

ぎゅっと鞆を持ち直したその人はもう帰るようで、一瞬俺とマイさんに気付いたみたいにならんとこっちを見たけれど、すぐに真咲さんの方に顔を向けた。

「じゃあとりあえず、再来週、同じ時間に。」

「はい…あの、…本当に大丈夫でしょうか…もしこれ以上、…」

「…今日診た感じ、その左手はそれほど深いものじゃなかったから大丈夫だと思うし、もし…他の所も爛れてきちゃうようなら、今飲んでる薬を一つ強いものにしないといけないかな。」

気になるようなら、またいつ来てもらってもいいけれど、と言う真咲さんは真剣な（それに加えて心配そうな）眼差しで、男の手元を見詰めていた。

「これから日差しも強くなるから、気をつけた方がいいわ。」

同じように男の手元を見詰めていたマイさんがそっと呟いた。

そしてふらっと俺を見ると、中に入りましょ、と視線だけで言う。
…確かに、ここに突っ立ったまま真咲さんとこの人の話を聞いているのも、気まずいし。とりあえずぺこりと会釈だけして、マイさんの後に続いて赤羽館の中に入った。ちよつとあの人と真咲さんの関係が気になったけれど。

エントランスに溢れる橙色の仄かな照明に、暗闇に慣れていた目が少しだけチカチカした。

「…マイさん、…さっきの男の人ってやっぱりダンピール？ ……」

床を滑るように進むマイさんの白い背中に、思わず声を掛けていた。彼女はふっと顔だけ振り向いた。白いマントの裾がひらひら揺れる。マイさんは一瞬だけ考えるように視線を逸らしたけれど、すぐに俺の目をじっと見た。

「そうね、…彼はヴァンパイアよ。そうは見えないでしょうね。人間的に暮らしてるから。おそらく抑制剤か何かで、抑えてるんだと思うけれど。……」

「へえ、…」

「でもそれって、体に合う薬を見付けないと副作用が酷いのよね。特に皮膚に影響が出るのよ。どこにでもある蛍光灯の灯りだけでも火傷したり、」

そんな状態になったら外には絶対出られないわね、太陽の日を浴びたら途端に塵になってしまうわ、とマイさんは物騒なことを言っ
て（何かの映画で見た、砂のように崩れていく人型が思い浮かんだ）
、じゃあねと階段を上っていった。

残された俺は暫くポカンとそこに立っていて、さっきの男の人を見送って戻って来た真咲さんに気付かなかった。とん、と肩を叩かれて、ようやく隣に立つ真咲さんに気付いた。

「うっわあ！ ……ビックリした…、…」

思わず大声を出してしまって、ちょっと恥ずかしい。真咲さんの方が驚いた顔をしていた（まあそうだよな、何気なく肩に手を置いたらすげービビられたって…）。

「丹、どうかした？」

明るい所で改めて見ても、今日の真咲さんはいつもと違う。

真咲さんって、…何を仕事にしている人？ 白衣って、イコール医者とかそういうイメージしかないな。すらりとした痩身には少し大

きいんじゃないかって感じる白衣を羽織った真咲さんは、どこかの大学院の研究者みたいな……。

「……あはは、研究員か、面白いなそれ。何の研究をやっていると思う？」

真咲さんはポケットに両手を入れて、白衣を広げるように腕を動かしてみせた。……って、え、何、俺、さっき思ってたこと口に出してた？

「はえ?! 俺、言葉に出てましたかッ……?」

軽く肩を竦めてクスクス笑って、いいや、と真咲さんは首を振る。

「何か丹の顔を見ていたら、そんな風に思ってるんじゃないかって。まああながち間違ってもないしね。」

「え、…?」

「一応これでもドクターなんだけれどね。」

「え?」

訳が分からずきょんとしてる俺に、もう遅いからおやすみ、丹、と真咲さんは優しい声で微笑んだ。

大学の授業もぼちぼち始まり、俺はといえば、相庭駅からふたつ目のところにある大学と、近所のバイト先と、そして重厚な門構えの赤羽館を行き来するだけの生活が続いていた。

先日、自転車を安く手に入れたお陰で（悪友である村田があれこれ世話を焼いてくれて、実家が自転車屋の先輩を見付けてくれた）、大学からバイト先、バイト先から赤羽館、そしてまた大学、という平凡で変わり映えない生活も、雨の日ならともかく、なかなかスムーズに進んでいる（ちなみにその自転車はいつもエントランスホールの隅に置かれている）。

けれど、俺が住んでいるのは単なる古い洋館のアパートメントなんかじゃなくて、ヴァンパイアやらダンピールやらが住まう巨大な屋敷で、どんなに頑張っても、平和な日本の、とある大学生の地味な日常とは掛け離れ過ぎている事態が起こる。

いつもなら赤羽館の門を潜って玄関に入って、昼間とは違った静けさと賑わしい気配のする談話室や食堂を素通りして（思ってみれば、夜中に、自分の部屋の外に出たことがない）、部屋に戻って休むはずなのに、その日はたまたまバイトが早い時間に終わって、1時半頃に赤羽館に帰って来た俺は、ちょうど正面の談話室から出て来たミツに会った。ミツは顔を真っ赤にさせて（それは怒りの所為で）ぶんぶんしながら、物凄い音を立てて談話室のドアを閉めた。バン、と鋭い音がホールに響き渡る。……なんだ、なんなんだ？

いつもにこにこしているミツが、こんなに怒りを露わにして、声を掛けても気付いてない風で——……螺旋階段を上がって行くところだったから、慌てて駆け寄ってその腕を掴めば、ようやくミツは振り向いて、俺に気付いたようだった。ミツの茶色い目が俺を見て、真ん丸になる。ミツの顔が、風船の空気がふしゅくと抜けて

いくみたいに、力が抜けたようになった。

「あ……丹、どうしたの？」

「ど、どうしたって……こっちのセリフ。」

じっとミツを見れば、ミツは俺の言う意味が分かったみたいで、今度は恥ずかしさで頬を赤くして、目を逸らした（それはそれで、きゅ、と胸を掴まれるような気分になる）。力の抜けたミツの腕を、俺はぽつと離れた。ミツはぼんやりした目をしながら、ちら、と談話室の方を見た。

「ああ……ちょっと、そうだね…苛々して。……それより、おかえり丹。今日早かったんだね。」

「うん、ただいま。……」

じゃなくて。

ミツは不貞腐れたように唇を尖らせて、そっぽを向いた。

「別に、……気分悪くなっただけ。ごめんね、これ以上話してると八つ当たりしちゃいそう。」

そう言って、素早く階段を上がって消えたミツは、確かに苛々しているようだったけれど、何だかそれと同じくらい寂しげだった。

……なんか、心配だな。何があったんだろう。ちら、と談話室を振り返る。特に人の話し声だとか、他に不穏な何かは聞こえてこない（ごく平凡な、人間の聴力じゃ、敵わない）。一段上の階段に片足掛けたまま、その談話室の品のある扉を見詰める。黄金に磨かれた取っ手を見詰めながら、……ごくりと唾を呑み込んだ。

「……………あれ、」

入る前に、もう一度、扉にそっと耳を近付けて、中の気配を窺ってみたけれど、それも意味なく、とりあえず俺はそうっとドアを開けて、顔を覗かせた。

けれどそこには、俺が思っていたような何かはなく、いつもと変わりない談話室があった。中央のソファーに、レイが仏頂面で凭れていた。テーブルのところに、ワインの瓶とグラス（ステム部分がキラキラとダイヤモンドを散りばめたようなデザインの）が置いてある。

「……レイ、」

お前には名前を呼ばれたくない、とでも言いたげな顔をして、レイの紅い目がじろつと俺を見る。途端に、その場に縛り付けられたような気分になる。……う、…でも、構うものか。とりあえず、この状態から、レイがミツのことを怒らせたに違いないんだから、ミツに謝るよう言わなくては。

おずおずと向かいに近寄って、レイの顔を真正面から見る。座っているレイを見下ろす形になって、俺の方が高い位置にいるのに、レイの威圧的な眼差しが怖い。けれどレイはすぐに視線を左に逸らした。

「ミ、ミツに謝れよ？ ……なんか、凄い怒ってたし、…」

片腕を背凭れ部分に引っ掛けて、足を投げ出すように伸ばして（長い脚は、その内行儀悪くテーブルに乗つけられるんじゃないかと思ってしまった）、ぐったりと沈み込むように座っているレイは異様な雰囲気だ。人の話を聞いているんだか聞いてないんだか。

「それに、凄い悲しそうだったし。……」

レイは無言だ。そういえば、ファーストコンタクトがあれだったものだから、こいつと一対一で話したこと、なかったかも。ミツとの間に何があったのか分からないけど、いくら言っても、自分の興

味の無いことにはさっぱり目も向けない、冷たい奴だと今思った。

「おい、…俺の話、聞いてんのかよ?!」

なんかムカムカしてきて、思わず大きな声が出てしまった。

あ、と思ったけど、別にいい、凄い形相で睨まれたって、俺はただミツに謝って欲しいだけなんだから。それでも内心びくびくしながら見ていると、レイが片方眉を持ち上げて、ずっと俺の方に視線を動かした。

「…な…なんだよ、…」

話を聞く気になったのかと思って、向かいのソファ―に腰掛けたら、レイは眉を寄せた。

「……あのなあ、俺は別に何があったとか知らないけど、…帰ってきたら丁度、ミツがすんごい顔してここから出てきて、」

ふと、手前のテーブルに置いてある、高級そうなワイングラスを見ていたら、まだ赤いワインが半分程度入っているそれが、ふらっと傾いた。

「ミツは何も言ってなかったけどさあ、あれ、絶対傷付いて――」

「……………」

あれ、…………ふらつと傾いたワイングラスが、今度はふわりと浮かび上がって…浮かび上が、……………。

「……—っうわあああ！」

透明人間がワインを飲むように、レイが座るソファアの横の寝椅子辺りで、グラスが不安定に横に倒れて、中のワインが零れ落ちた。でもそれは床の上等な絨毯を汚すわけじゃなくて、宙であっさりと消えていく。いや、何者かの喉へと流されて消えていく。

目をひん剥いて、後退りしてソファアの背にぶつかった俺から視線を逸らして、隣の寝椅子辺りを見たレイが、吐息をついた。

「神前にも見えるようにしろよ。……あ？ ……ったく、悪趣味な野郎だ。…」

レイがうんざりした風に吐き出せば、どこからともなく（まあ例の寝椅子の辺りからなんだけど）、そうね、とうっとりした女の人声が聞こえてきた。俺は思わず飛び上がった（さっきワイングラスが動き出した時もそうだったけど）。

「私ってとっても悪趣味な女。でもね、ぼうやを虐めるのって、とっても素敵。ボーイフレンドは何人いたっていいしね。ワインと同じくらい好きよ。」

今度はワインの瓶が持ち上がって、宙に浮いていたグラスに勝手にワインを注ぎ始めた。

「あのぼうやが怒ったのだって、きつと、彼、私に嫉妬したんだわ。……いやーん、思い出しただけでもぞくぞくする。」

楽しそうな高い声が響いて、赤い液体がたっぷり入ったグラスが、また、空中で横に傾けられる。ぐびぐびと飲みっぷりが聞こえてきそうなくらいの速さで、それがあつという間に消えていく。次第にうつすらと、細かい霧がひとつに集まっていくように、寝椅子に寛ぐ人間の形が出来上がっていった——…ふわぁ、と空中から現れたのは、金髪の長い髪を靡かせた、とびきりの美女だった。

俺は信じられない気持ちでそれを見詰めていた。何度瞬いても、頬を抓っても、今まで誰もいなかった寝椅子の上に、女の人が座っている。シルクのシンプルなドレスを着ていて、ベアトップのデザインだから（その上、スカートがひらひらと柔らかないもので、時折太股が剥き出しになる）、ちよつと、目のやり場に困る。

「ねえレイ、貴方あのぼうやとどこまでいってんのよお……私、絶対許さないんだから。…」

くつたりと背凭れに頭を預けて、甘えるような声を出す彼女は、熱くてとろんとした目を、ちら、と俺の方に向けて（見透かすような眼差しに、瞬間、頬が熱くなった気分だ）、ふふんと口の端を持ち上げた。俺は慌てて視線を逸らす。

レイを見れば、彼は相変わらずうんざりした顔をしていた。

「……なによ、そんな顔しないで。………分かったわよ。分かりました。貴方っていつだってそうなの。つれないわ。そんなんだと、ぼうやにも振られちゃうんだから。いい気味よ。」

涙を浮かべて、じとっとレイを睨んだ彼女に、レイはふんと鼻を鳴らすようにして、勝手に言ってる、と冷たい声で言った（最早、取り付く島のないほど。まあ、レイっていつも無愛想だけど、いつも以上に不機嫌そうに見えた）。そしてすっと立ち上がる。レイの、黒いロングコートの裾がひらりと揺れた。透かさず、寝椅子に凭れていた女の人起き上って、レイの腕を掴んだ。

「いゃん、ぼうやのところに行ってふたりで仲良くするんでしょう？！ いやよ、そんなの。許さないって言った！」

うるうるした顔を向けられたレイは、はあ？ と明らかに不愉快そうな反応を示す。

「酔っ払ってんじゃないねえ、バカ女。」

面倒臭そうにそう言って腕を振り払うと、苛々しながら、レイは荒々しく談話室を出て行った。

談話室に残された俺は、うわ：なんか、変な場面に居合わせた感じ？ タイミング悪いなあ、と内心思った。

状況が全く把握出来ない。さっきまで、談話室にはレイとミツしか居ないと思っていたから、てっきり、ミツが怒った理由はレイが関わってるんだろうと思っていたけれど、ミツがここに居た時から、この、意味分らない透明女（というか、今はただの酔っ払いだ）はいたのだろうか。

というか、彼女もヴァンパイア、なんだろうな。じ、と見ていた所為か、彼女は俺の視線に気付いてこっちを向いて、ちら、と舌を覗かせて、失敗しちゃった、というようなお茶目な顔をした（そうするとぐっと若返って、少女のように見えてくるから、ヴァンパイアって怖い）。あれ、でも、……やばい、このままじゃ酔っ払い女に絡まれるのって、次は俺？

「貴方が神前丹でしょ。よく知ってるわ。何度も見たことあるものの。」

「……あなたは？」

俺が聞き返すと、彼女は一瞬キョトンと碧い目を丸くして、そうね、そうよね、と口を開けてケラケラ笑った。

「私は貴方の顔知ってるけれど、貴方は私のこと、知らないものね！
いやん、可愛い顔して怒らないの。」

彼女の口調に、む、とした俺に（もう…テンションについていけない）、彼女はまたケラケラ笑った。なかなか話が進まない。この酔っ払い女は、俺の苛々に気付かないのか、頻りに笑った後、もう一杯ワインを飲んで、恍惚とした眼差しを宙に向けた。

「私の名前は、……………私の名前は、……………」

碧い瞳が、ぼんやり滲んできて、彼女は口を閉ざす。腰まで長い金髪は、寝椅子のクッションに波のように流れたままで、彼女はじっと宙を見詰めて、ぴくぴくと眉を寄せた。虚ろな眼差しは、焦点が合っていないような……………。

「あの、……………大丈夫？」

何だか気味悪くなったので、小さく声を掛けてみる。すると彼女は、ああ、そうだった、と息をついた。

「皆、私のことはミス・レディと呼ぶわ。」

「ミス…レディ、……………」

全くもって似合わない呼び名だと思うのは俺だけだろうか。
俺の呆れた表情を見て何を思ったのか、ミス・レディは、リユー

ドジュリックと同じにしないでよね、と言う。

「リユードジュリックみたいにかさつな女じゃないのよ。私って、優雅で、優美な女。」

つん、と顎を上げて、偉そうに言いながら、ミス・レディはワインを水のようにぐびぐび飲み干した。そしてケラケラ笑いながら、だって私の方がずっと魅力的でしょ？　と言って立ち上がると、ふわりと広がるスカートの裾を軽く直して、モデルみたいにポーズを取ってみせた。

「ほら、この脚だって、この腰だって、この胸だって、いい体付きしてるじゃない！　ヴァンパイアの中でも一番よ！　なのに何だって、レイはあんなに愛想ないのかしら！」

腰に両手を当てて、ぷんぷんと怒りながら、耳に掛かっていた長い前髪をぐっと掻き上げる（何気無く見ていたが、その手付きはセクシーだった）。でも長い爪が髪の毛に引っ掛かって、彼女は舌打ちを漏らして手を払うと、途端に、長く美しい金髪がバサアと抜けるように消えて、彼女の頭は短髪の黒髪になっていた（目の色は相変わらず碧色だったけれど）。

「うわ、……………変わった、…」

思わず呟けば、彼女は俺の方を見て、にや、と笑う。碧い瞳が、悪戯っ子のように光っていた。

「丹ちゃん、かーあいい。貴方って、どんな女が好き？　こんな感じ？」

ボーイッシュな髪形になったミス・レディは、一度その髪型でポーズを決めて、今度は、黄緑掛かった黄色の髪の毛がぐんと伸びて、宙でポニーテールに結ばれた。その次には、明るい茶髪がくるくるとカールして、ゴージャスな巻き髪になる。その次には、艶のあるストレートの黒髪。ピンク色のショートボブ。銀色の編み込み。水色のおだんご。そしてまた金色の髪。気紛れに三つ編みにしている。

「あは、格好いいでしょう？　でも私、赤毛は好みじゃないのよ。」

そう言ってさっと手で髪を靡かせると、黄緑色が深い青色になって、肩につくくらいの長さの髪の毛は、海の色になっていた。

「私、この色が好きなの。海って、とっても素敵じゃない？　無限に広がる海を見るとね、あれが全部、ワインだったらいいのって思っちゃうわ！」

ケラケラ笑い、ミス・レディは寝椅子に腰を下ろした。その海の色と髪色と髪型は気に入った様子で、変えていない（確かに綺麗な

青色だと思う)。彼女はテーブルに置かれた瓶を持って、耳の辺りで左右に揺らしていたが、もう飲み干してしまったのだから、中身は無いわけで、それを詰まらなそうにテーブルに戻した。

「ワインのない人生は、残酷だわ。」

はあ、と重い溜息をつく。そして、再び遠くを見るような、焦点の合っていないような眼差しで、すくつと立ち上がると、ミス・レディはすー…と煙のように、その場から消えた。

「え、あれ、」

きよろきよろと部屋の中を見渡しても、気配がない。本当に消えてしまったのか、それとも単に姿を消しただけなのか、人間の俺には分からない。

そもそも、ミス・レディが姿を消したり現わしたりするのって、どんな能力なんだよって思う。透明人間を主人公にした映画とか物語があるけれど、あれとはまた違った仕組みなんだろうな…ヴァンパイアだし。

そんな風に思っていると、談話室のドアが開いて、ひくひくと頬を痙攣させて、誰が見ても明らかに機嫌の悪い（さっき談話室から出て行った時よりもっと悪くなってる）レイが入って来た。じろ、と鋭い眼差しが談話室の中を通り過ぎて、俺を見る。だけど、その眼差しはほんの少しだけ和らいだ。……俺は直感的に、この部屋にはもうミス・レディはいないんだと思った。

「……あのさ、さっきのあの人って、」

俺が話し掛けようとすると、再び、ドアが開く。そこから、眼鏡を掛けた真咲さんが姿を現した。白衣のポケットに両手を突っ込んだまま、苦笑しながらやって来る。ああ、丹もレディに会ったんだね、と言う真咲さんは、疲れただろう？ と首を傾げた。

「いつもはテラスでひとりで飲んでるんだけど。レイがいると、こっちに入って来るんだよね。」

「そうなんですか……。」

ソファアーに腰を下ろしたレイが、迷惑だ、と言いたげに鼻を鳴らした。確かに、レイは嫌がっていた感じだった。

「まあ、悪い人でもないんだけどね。」

真咲さんは苦笑い。俺も苦笑いを返す。

悪い人じゃないっていうのは、さっきほんの少し関わっただけだったけど、それはよく分かる気がする。ミス・レディは、自分の発言がそれほど他人に影響を及ぼすとは思っていなくて、純粹に、思ったことを口に出しちゃう人なんだろうと思う（自分の感情の赴くまま的な?）。

「さっき、煙みたいになくなって居なくなっちゃったんですけど、」

「ああ、さっき食堂で会ったよ。なあ、レイ？」

ワインを求めて食堂に行ったんだ。何となくそう思う。レイはま

た、ふん、とそっぽを向いた。

「本当は人間には彼女の姿は見えないはずなんだけれど、さっきは丹がいたからね、体調を調整して、君にも姿が見えるようにしてたんだよ。ヴァンパイアには普段も、普通に見えてるから、急に彼女が消えたり現れたりするって驚くことはないね。」

「なんか不思議なんですよねえ、そういうの。人間の視力には見えないってことですよ。」

「…ん、そうなるのかな？　　どうだろうね。」

…ヴァンパイアの目って、どれだけ物が見えるんだろう。やっぱり不思議だ。そんな風に思っていると、顔に出ていたのか、真咲さんは俺を見て、苦笑いでなく、ほんのりと優しく笑っていた。

「丹、花火やろう？」

可愛らしく小首を傾げて、花火の詰め合わせ（スーパーやなんかに売っていきそうな）のパッケージを顔の高さに持ち上げたミツが部屋にやって来たのは、つい10分前。10時半過ぎだった。

それから、俺たちは談話室前のテラスから少し出て（談話室には、食事を終えた赤羽館の住人たちが寛いでいる）、石畳に囲われた噴水の近くで、バケツを下ろす。

ここから、テラスでワインを飲んでいるミス・レディや（彼女の姿は見えないけれど、ベンチに腰掛けているっぽい。あそこにグラスと瓶が浮いてるから）、近くのテーブルに座っているレイや、その隣で煙草を吹かしているオジサン（大きい色付き眼鏡を掛けた、中年のダンディーな人だ。顔付きは日本人っぽいけど…。最近夜になるとよく見るけど、話したことがない）や、そこにお洒落なティーセットを持ってやって来たジュリアの姿がよく見える。談話室から真咲さんも出てきて、レイたちがいるテーブルに着いた。オジサンが何か話し掛け、真咲さんと笑う声が聞こえてくる。楽しそうに談笑している。

ふと、真咲さんがこっちを見たので、目が合う。真咲さんは目を細めて、ジュリアたちに何か呼び掛け、ジュリアや眼鏡のオジサンが、微笑ましいものを見るように、こっちを振り向いて見た。

「火、点けるよ。蝋燭、ここでいいよね、」

俺の隣で、ミツは持ってきた蠟燭を地面に立てて、マッチを擦っていた。ジュツと音を立てて燃え上がったマッチは、ほんのりと橙の光を灯した。

「なんか、まだまだ花火なんて季節じゃないよなあ…梅雨にもなっていないし。」

それでも懐かしいと思って言うと、マッチの光に照らされて、ミツがこちらに視線を向けて、小さく微笑んだのが見えた。

「仕方ないじゃない。今日商店街で買い物したら、くれたんだもの。」

ミツは昼間に、夕飯の買い出しに付き合わされたらしい（きっとミツは、ジュリアの年の離れた弟に勘違いされたんじゃないか？ ひどければ、小中学生に間違えられることもあるらしいから）。

「でも僕も、花火なんていつ振りだろう…母さんがいた頃は、こういう小さな花火セットを買って、2人してやった覚えがあるけれど、」

「うん、俺も花火なんてさ、夏休み…いとこの家に遊び行っただけにやるくらいだった。」

しかもそれだって、小学生の頃の話なんだからなあ。

ガサガサと袋から花火を取り出すと、ミツは、長い棒の、手に持つタイプの花火を俺に渡し、自分も同じタイプの花火を取った。それを蠟燭の火につけると、先端がジリジリと赤くなった後にパチパチ弾けて、明るい火花を散らす。しゅうしゅう不透明な白い煙が出て、あの、目に染みるような、噓せ返るくらい濃い火薬のにおいに包まれる。煙の中で、花火がチカチカ輝くのが見えた。色鮮やかな光だ。

「…きれい！」

ミツは目を細めて、斜め下に向けた花火を見詰めている。テラスでこちらを見物している真咲さんやジュリアたちも、わあっと声を上げたようだった。

花火の先から光の筋が弾け飛んで、その輝きが一瞬にして失せた後にも、暗闇に残像となって見えていた。俺の花火もう消えてしまっただけ、手元に残ったものは、黒い炭のように燻っている。水を汲んだバケツの中に入れば、ジュツと香ばしいやら寂しいやら、そんな音を立てた。

「すぐ終わっちゃうな、あ、この赤いやつやってみよっかなあ、……っふふ、」

何を思い付いたのか、ミツはわくわくしながら、先端が赤い色の

花火をごそつと数本取り出した。それぞれを両手に持って、火をつける。

「見て！」

ミツは俺から少し離れると、花火を持った両手を広げて、くると回ってみせた。勢いのある火花が、さあーと流れ落ちるように散っている。ミツはテラスの方に花火を向けると、手首を回して花火を揺らしながら、おーい！ と呼び掛けた。

「レイ！ 見て見て！ ほら、」

ミツははしゃいだ声を出しながら、ぴよんぴよん楽しそうに飛び跳ねていた。

両手に持った花火は、ぐるぐると宙に円を描くように素早く揺れていた。空中に残った光は、うっすらと何かの形になっている――――…テラスを見れば、ちょうどレイが顔だけこちらに向けた所で、さつきからこっちを見ていた眼鏡のオジサンがにやにやししながら、レイをからかうように肘で小突いていた。

「あはは、…これももう終わっちゃった！」

黒く燃え尽きた花火をバケツに入れて、ミツはにこにこ笑っていた。

次に俺が火をつけたのは、濃い緑の花火で、それはやけにバチバチと火花を散らして、音を楽しむようなものらしい。

「なあに、色々あるのね、花火って。」

いつの間にかジュリアも近くに来ていて、ジュリアは屈み込みながら（長い赤毛を邪魔そうにしながら、横に結んで）、まだ新しい花火の束を興味津々に見ていた。その中からひとつ摘み上げて、あ！これ知ってる！と高い声で言う。ああ、あのひよろひよろ細いのは、線香花火だ。

「ナンとか線香って奴よね？……あら、線香ナンとかだった？」

ナンとか線香って、……蚊取り線香じゃないんだから。

「ジュリア、それ線香花火だよ。僕好きだなあ、それ、」

持った花火を上下に振りながら、ミツが言う。ジュリアは線香花火を置いて（じゃあミっちゃんやりなさいよ、と）、違う花火を手にとった。それは手に持つ部分の台紙が銃の形をした（戦隊もののヒーローが持つ武器みたいな）、子供向けの花火だ。

「ばーん！　ばーん！　…あはは、丹ちゃん、これ変なの、」

火花を飛ばしながら、ジュリアはおかしそうに撃つ真似をした。短い花火は本当にすぐに消えてしまったけれど、ジュリアはしばらくその花火の燃え殻を持って、愉快に笑っていた。目尻をくしゃくしゃにして笑う顔は、なんだか随分幼く見える。ミツにしろジュリアにしろ、花火を持っているから尚更だ。

「ねえ、お茶入れるから、向こうで休みなさいよ、」

「えー？　でもまだ、線香花火が残ってるもの。」

「レイでも連れてきなさいよ、丹ちゃんはあっち行きましょ。ほらほら、」

ジュリアは渋るミツのお尻を叩いて、テラスへ押し遣る。え？　と困った声を漏らしながらも、ミツは駆けていった。

俺とジュリアがテラスに行くと、ちょうど入れ違いになる形で、ミツがレイの腕を引っ張っていった（レイは渋々といった顔付きだ）。テーブルには真咲さんが座っていて、俺を見上げて笑った。

「あれ、あのオジサンは？」

灰皿に吸い殻があるけれど、…。

向かいに座りながら、真咲さんを見遣る。真咲さんの視線の先を追ってみれば、眼鏡のオジサンはミス・レディがいるらしいベンチに座って、何やら苦笑しながら話を聞いていた。ミス・レディと話をするのは、誰だって苦勞するらしい（何を言われたのか、オジサンはおいおいそりゃないぜ…と相槌を打っていた）。

「リユード、バーボンだ、バーボン持ってきてくれ、」

「はい、…それで？ アンタはワインね、全く…飲み過ぎよ、…え？ …そんなこと言っていると、そのうち全身ぶどう色になるわよ、」

ミス・レディが持っているグラスは、もう空だった。空き瓶を拾いつつ、ジュリアはあと溜息をつき、談話室へ入っていった。

「丹、これでいい？」

真咲さんがティーポットを傾けて、白いカップに注げば、湯気と一緒にジャスミンの香りが広がる。

「うん…ありがとう、」

テラスは、談話室からの灯りと外灯でほんのりと明るい。

けれど、俺とミツが花火をやっていた噴水の辺りは、ここから見たら結構薄暗かった。テラスもどこもかしこもそうだけど、赤羽館には、様々な草花が周りを囲っていて、静かな月明かりに、ひっそりと影となって見えている。

その中で、今、ミツが火をつけた線香花火の小さな丸い光は、赤く赤く燃えて、素朴な温かさと懐かしさを感じさせた。しゃがみ込んで線香花火を見詰めていたミツが、ふっと、噴水の縁に座っているレイを見上げる。ミツは何か話し掛けて、柔らかく笑う（それは、本当に親しい人間だけに向けるような、無防備な、…）。花火を見下ろしていたレイの紅い目が、じっとミツを見詰めた。

「……ミツって、よくレイのこと怖くないよなあ、…」

思わず呟いた俺に、真咲さんは口に近付けたカップを下ろして、俺と同じように、ミツとレイを見詰めた。

「丹は、怖い？」

「……怖いというか、近寄りがたい感じがする、のかな…。」

素直に言うと、真咲さんはおかしそうに笑った（そうだよなあ、と頷くように、優しく）。

「あいつ、無愛想だからな。でも、……ミツをここに連れてきたのは、レイなんだよ。」

え…？

真咲さんは、その時を思い出すように目元を和らげ、ミツたちを優しく見守るような——それでいて微かに切なそうに——眼差しを向けている。確か、ミツが赤羽館に来たのって…5年か6年くらいは前だったよな、この前ミツに聞いたんだけど……。

「あの時は僕も驚いた。……けど、…」

真咲さんは外へ向けていた視線を戻し、俺と顔を見合わせて、ほっとするような力の抜けた笑みを浮かべた。

「出来ればこのまま、…皆ここで暮らしていければいいと思うよ。」

真咲さんはしみじみと、グレーの瞳を伏せて、カップに口をつけた。

煩わしく鳴り続けている携帯を引き寄せて、アラームを止める。
目を開けるのさえも億劫で、そしてまた枕に頬を押し付けて、眠りに戻る。

それを何度繰り返したか分からないけれど、しつこく響く電子音に、ようやく瞼を持ち上げる気になって、俺は携帯画面を睨みつけて、そこに映る時間を確認した。目を擦る。ぼんやりぼやけてたそれが鮮明に見えてくると同じように、俺の脳味噌も、現在時刻を表す4つの数列を順に目で追いながら、左右に強く揺さぶられたように愕然とした。窓辺がやけに明るくて眩しいと思ったら、こんな時間だったなんて。

「やばッ…！」

今日、1限から講義入ってるんだっ——…と思ったのは、俺の脳味噌が時刻を確認して、30秒程度経ってから。それから慌ててベッドから転げ落ちて、ざっとシャワーを浴びて、歯を磨いて支度して、小型の冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを引っ掴んで、鞆を引っ掴んで、部屋を飛び出た。静まり返った廊下に騒々しい物音を響かせたのは（多分他の部屋の住人は、ほとんどが寝ているのだろう。申し訳ないことをした）、俺が起きてから30分後のこと。躓きながらも、螺旋階段を駆け降りて、広くて朝の清らかな光に満ちたエントランスホールを突っ切って、自転車をつ張り出したところへ、食堂の方から声が掛かる。

「やだ、まだ起きてなかったんだ。遅いから、どうしたものかと思
ってたけど。」

たっぷりした赤毛を後ろに靡かせて、食堂のドアのところに寄り
掛かったジュリアが、驚いたような呆れたような表情で言う。青い
瞳が大きく丸まって、じ、と細まる。

「木曜は朝から授業があるって、この前言ってたなあって思って、
もう少し遅かったら起こしに行こうと思ってたのよ。」

そんな慌てて、朝、ちゃんと食べて行かないと力でないわよ？
と眉を寄せながら、ジュリアはこちらにやって来る。ジュリアは食
事のことに関しては、結構厳しい、…というか母親のようなことを
言う（これを本人に言ったら、絶対に怒られる）。

「今ならまだ、ギリギリで間に合うんだよ。食べてる暇もないし、」

「わかってるわよ。だから、ほら、これ、」

はあ、と大きく溜息をついて、そう言いながら、ぽん、とこちら
に投げて寄越したのは、青い包みだ。ガサガサと中を見ると、ビニ
ール袋にサンドイッチがあって、その下には弁当箱らしき物（オレ
ンジ色のバンダナの奴）が入っていた。うそ、これ作ってくれたの
？！
キラキラと期待するような俺の眼差しに、ジュリアは特に照

れもせず、いいから持つて行きなさいよ、と言う。

「残り物でもいいから、弁当があれば楽って言ったの、丹ちゃんじゃない。」

「わあ、サンキュ！ 助かる！」

ジュリアはにこ、と首を傾けて笑った。

こうして、始業時間ぴったりに講義室に滑り込んだ俺は、まあ何とか、一番後ろの座席に、何事もなく着席した。そこに、俺よりも10分程度遅れて、村田公将が何食わぬ顔でやって来て、俺の隣に座る。俺は、こっそりと、空腹で鳴るお腹をサンドイッチで満たしている最中で、村田が来ていることに気付かず、脇腹を小突かれて、ようやく隣のにやにや顔に気付いた。

「なんだよそれ、手作りじゃん。」

村田の目は弓形になっていて、からかう気満々という感じだった。ちら、と鞆やテキストと一緒に置いてあった青い包みの中を覗き込んで、その中身が弁当だと気付くと、ひゅう、と唇が、口笛を吹く形に変わる。：村田のことだ、言いたいことはよく分かる。分かるけど、これはそういうんじゃないからな。

「ほんなんじゃあいってば、」

「俺は何も言ってるねえよ。つか、ちゃんと飲み込んでから喋れよ。」

「む、…だから、お前が思ってるような弁当じゃないってば、」

「ほ、…じゃあどなんんだか、この村田公将様が拝見してやる。」

あ、まだ板書、書き写してないのに——…もそもそ話す教授の声と、消されていくホワイトボードの文字に、俺は気を取られていた。村田はさっとオレンジ色のバンダナを解くと、へっへんと笑いながら、蓋を開ける。そして、ほう、と息をつく。

「村田、それ一応、俺の昼飯なんだから、あんま触らないで、…」

板書を写しつつ、そつと告げれば、村田に伝わったのかどうか、村田は無言のまま弁当に蓋をした。しかし、じ、と熱く注ぎ込むような村田の視線を感じて、ノートにメモする手を止めてそっちを見れば、村田はにやぁと目元を蕩けさせて、嫌らしいくらいにやにやしていた（げ、なんだよ気色悪い）。

「そうでござんすね。…こんなにお前への愛が詰まった弁当、食うなんて野暮なことするかよ。」

……はあ？ また何を言い出すかと思ったら。首を傾げて怪訝に見れば、村田はひらひら手を振って、分かった風に頷いた。そのしたり顔が、なんかムカつく。

「あーはいはい、照れなくてよろしい。アナタにも、ついにこういういい人が出来たのね……うう、公将、寂しい。……でも、丹の幸せは祝ってやらなくちゃ、」

「キモいんだけど、何？」

「だから照れんなって言ってるんだろ、」

「だから何がどうなってそうなるんだよ、」

これ、赤羽館で皆の食事作ってくれてる人が、作ってくれたんだよ、と言いつつ弁当を取り戻し、俺も確認するように弁当の蓋を開ける……しばらく、絶句。思いの外、衝撃は強かった……つか、何このハート。弁当の内容としては申し分ないはずなんだけんど（ほら、ご飯とおかずと、すごくバランス良い感じに。色合いも）、その飾り付けというかなんというか……。

「な、にこれ……！」

ご飯の上には、海苔か何かでハートを形作ったものがチラチラと散らばっていて、卵焼きもハート形で、ドデカイのがひとつ中心に陣取っているし、ハンバーグも同様だ。マカロニのサラダに混ざっている野菜も同様だ。うへーっ！　なんだこれ！

一瞬眩暈がして、俺は慌てて弁当に蓋をして、咄嗟に村田を見れば、奴はやっぱりにやにや笑っていた。

「ふふーん、羨ましいー、俺もマテに頼んでみようかなーへへへー、」

……イラッ、としたのは、多分仕方ないことなんじゃないか。村田のあの表情を見れば、誰だって癪に障るはずだ。締りのない顔でにやにやしなながら、時々ちらっと俺を見て、その後、自分が注文した食堂の定食のお皿を見る。その、何か言いたげな視線は、食事中ずっと絡まるように向けられていて、流石に、いや、相当、うざかった。

あれからジュリアは、昼飯が必要な日には、必ず弁当を作ってくれるようになった（午前から講義がある日、教えた覚えがないけれど、ジュリアには俺のスケジュールなどお見通しらしい）。ただ、初めのあのふざけた弁当があったから（あんなこっ恥ずかしい弁当！ 村田に愛妻弁当だなんだとからかわれたんだからな！）、俺も警戒して、朝、弁当を受けとる前には、絶対に中身を確認することになっている。そうするとジュリアは苦笑いしながら（でも文句は言わず）、作りたての弁当の蓋を開けて見せてくれるようになった。

「は〜ん？ 今日愛が詰まっていますこと！」

食堂の日替わり定食のトレーを持ってやって来た村田は、俺が出した弁当を見て、にやにや笑った。

「お前の彼女、マメだな。あ、それ超うまそー、」

「だからそんなんじゃないって、」

「照れんなって。しかしお前が合コン乗り気じゃないのって、彼女いたからかー。知ってりゃ無理に誘ったりしないのにさー…」

「だから、……」

村田は、はあ〜と大きな溜息をつきながら（それが超わざとらしくて）、パチンと割り箸を割った。いや、溜息つきたいのはこっちだって。俺は否定するのも面倒になって（だって昼飯には毎回のように言われるんだからな）、村田を無視して食べ始めることにした。お、今日は唐揚げ入ってる。

ジュリアって、料理は何でも出来るくせに（どこの国の料理も）、なぜだか鶏肉だけは触りたくないって言い張ってたから、今までの食事の中では鶏肉の影は全くなかったのだ（鶏肉を使う料理は、鶏肉の代わりに色々工夫してるみたいだから、結局全部美味いんだけどさ）。だけど、弁当と言ったら唐揚げだろ？　なんだかそれは譲れなくて、何度もジュリアに頼んでみたら、どうやら俺の願いは叶えられたようだ。

「…ああ、そういや、さっき食堂行ったじゃん？　すげー人だったんだけど、その大半が女子でさ、」

村田が、アジのフライにかぶり付き、思い出したように言った。俺たちはいつも食堂の中じゃなくて、その外の、テラスにあるテーブルで食べているので、ここからでは建物内の喧騒は聞こえないのだ。

「メニュー頼むでもなく、入り口の辺りに固まってて、邪魔だった。皆、同じ所を見て、ひそひそキャピキャピうぜーから、俺もそっちの方をちらっと見たわけよ、」

びし、と箸の先で俺の方を指しながら、そしたらさあ、と詰まらなそうな顔をした。

「外国人の男がさあ、誰か待ってるみたいに座ってんだよな。そいつがまたイケメンもイケメン、ロシア人の：誰だっけあの有名な俳優：に似てる奴、足組み直したりして、ただ座ってるのに様になってるんだ、」

だから女共が周りではしゃいでたんだなって思ったんだよ、と言いつつ、納得してないような、ムカついているような悔しそうな、複雑な顔をしながら、村田は乱暴にお茶を飲み干した。

「あんな野郎、うちの学校にはいねえぞ？ 誰待ってんだか知らねえけど、おめーみたいな人間が来るとこじゃないっつの！」

へえ、と適当な相槌を打っていたからか、どんと拳を握り締めて文句を垂れた村田は、じとつと俺を見た。その視線が下がって弁当を見遣り、再び俺に戻される。そして、おめーには彼女がいつからなあ！ 精々その子に逃げられねえようにしな！ と八つ当たりされた。……おいおい、見ず知らずの外人になに嫉妬してんだこいつは。

「もう、誰だっていいだろそんな奴。お前は周りの女子が自分を見

ていないと不機嫌になるのか？」

村田はちえっ、と舌打ちを漏らし、ご飯を掻き込んだ。もごもご動く口からはみ出そうな位、村田の口の中には白米が詰め込まれている。その、ハムスターみたいに膨らんでいる頬を、呆れて眺めていると、村田の視線がまた持ち上がって、ふわと俺の頭の上を通り過ぎていく。そして村田は、あっ、と指し示すように、箸を向けた。

「ふぁ、ほまへはあッ！」

何だよ。うるさいなあ。俺の後ろに何かあるのか…？

「…はあ？　口ん中いっぱい喋るな、よ……？」

「よっ、まーこと！」

少し皺れたTシャツに細身のジーンズ。片手を斜めに上げて、にかつと満面の笑みを浮かべて立っているのは、…。

「エドッ！」

周りがざわざわ落ち着かない雰囲気になっていたのは（加えて、村田は胡散臭い奴を見るような目で、エドを睨み付けている）、エドが来ていたからか！？　エドは爽やかで快活な笑みを浮かべながら、丹：口開けっ放し、と一瞬だけ、にやぁと表情を崩した。

「丹の大学って、こんな感じなんだ〜明るくっていいよな、」

エドはきよろきよろ目を走らせながら、キラキラ光るような金色の髪を掻き上げた（…：辺りの女子たちが、うっとりとしたのは間違いない。村田はケツというような顔をして、そっぽを向いて自分のご飯を掻き込んだ）。

「いやほら、俺って今20才だしさ。丹と同じように、普通なら大
学通ってるんじゃないのハタチってのは。」

しれっと言いながらも、エドは笑いを堪えるように頬を震わせて
いて、目元はうっすら弓形に細くなっている。うわー、エドめ、年
齢のことはもういいじゃないかよ！俺が言ったこと、まだ気にし
てるのか？

「いいねー大学生ってのは。可愛い女の子も多いし。んーふふ、選
り取りミ、ド、リ！」

エドはにっこりと完璧な笑顔を（俺から見たら胡散臭い愛想笑い
を）辺りの女子に撒き散らし、ひらひらっとどこかに手を振る。向
こうの方で、キャーッと黄色い声が上がった。

「おいエド、あまり目立つなよ、」

隣に座ったエドに、顔を近付けてひっそりと言えば、エドはきよ
とんとした。

「何で？」

顔を突き合わせて、エドもひっそりと返す。

「何でって…、…」

……視線が痛いんだよ。エドも村田も何でそんなに平然としていられるんだ？ 特に張本人のエド。そこに座っているだけで、この辺りの全ての人間の関心を吸い寄せている。

「つか、あの子、なかなかいいんじゃない？ タイプは何だろう？ 俺さ、ABのpositiveが好みなんだ。ちょっと酸っぱくて、味がスマートなの。」

にひひ、と笑いながら、エドは青い目を鋭く走らせる——…俺は思わずイスからずり落ちそうになった。なっ…なんて言うんだエドは！ 向かいに座る村田は、そんな俺を怪訝な顔で見た。

「あ、AB型のプラスってことだぜ？ AB—positiveって、」

「エ、エド！ いくらなんでもそれはっ…だ、だめだ、殺人になる！ お願いだから、犯罪は起こさないで！」

がばっと身を乗り出して、近くにあるエドの顔をますますじつと

見上げたら、エドは一瞬真顔になって、そして風船が破裂するような音で、嘖き出した。

「ぷっ…はは、あはははは！ 丹、お前、…ははっ、殺人で、…あは、ッ…」

急にケラケラ笑い出したエドは、文字通り腹を抱えて、笑い過ぎて、はあはあ辛そうに息をしている。

「何だよ、俺は本気でッ…」

「だーかーら、」

エドが笑うのを止めて、低い声を出す。俺にしか聞こえないような、そんな、不思議な響きを持った声だ。

「この時代、採血とかあるだろ？ 簡単に言うとき、直接傷付けないければ…血を交えたりしなければね、相手にもそれほど影響ないんだぜ。」

ふふ、とまだおかしそうに笑いながら、エドは囁いた。

「飲み放題やり放題：あ、やり放題は駄目だな、かなりリスクあるから、ほら、セックスはさ、あれはいけないね、人間が感染予防に使うような避妊具とかでも駄目、血が適応しなきゃ即死だから、」

昔っから他種族と交わるのって、タブーだったんだよ、今はそんなのも変わってしまったけど、とエドは真面目に言う。……こんな昼間っから、しかも公共の場で言うようなことか。そっとエドから離れて、黙ったままエドを見ていたら、すっかり定食を食べ終えたりしい村田が興味なさげな顔を装いながら、で？ と説明を求めるような目を俺に向けた。……村田、どこまで聞こえてたんだろう……。ちら、とエドを見ると、大丈夫大丈夫、丹にしか聞こえてないって、と言うようにウィンクした（……全然大丈夫そうに思えないんだけど）。

「……え、ああ、……えーっと、エド、こいつは友達の村田。で、村田、この人はエド。赤羽館に住んでる人。」

「そ、エドアルド・ニッカー。20才。よろしく。」

どうやらエドは、ハタチという年齢を突き通すらしい。まあ外人って、年齢より大人っぽい人、多いから。つかヴァンパイアは姿を変えられるし、皆見た目は若いから、本当の年齢は誰にも分からないだろう（まさか何百なんて単位、思い付かないって）。村田は、申し訳程度会釈した。

「今日はただ、近くに用事あったから、寄ってみただけ。もう行くよ、」

朗らかに挨拶したエドは、しかしすぐに立ち上がると、にっと笑った。

「see ya! 丹、勉強頑張れよ、」

まるで兄貴みたいな調子で言いながら、エドはまたひらっと片手を上げて、ふらりと大学の敷地を横切って行ってしまった。あんなことを言っていたくせに、声を掛けようとまごまごしている辺りの女子に全く見向きもせず。

「なんか…変わった人だな。…」

村田が、呟く。まさしく風の如く、突然吹かれてやって来たと思ったら、エドは颯爽と行ってしまった。…何がしたかったんだろう。エドの考えていることは分からないな。

談話室でミツと、チェスをやっていた時だ。

その日は大学の講義が急に休講になったから、折角朝一で行ったのに帰って来たのだ（あの教授、前回の時も調子悪そうだったから仕方ないんだろうけど）。昼は、ジュリアの作ってくれた弁当があるけれど、何か他にも作ってもらおうと思う。

「おっと、丹、余裕だね。お昼ご飯のことでも考えてたでしょ！」

ミツが半分楽しそうに、半分怒ったように言う。顔を上げれば、ミツはチェステーブルの端っこに肘を置いて、頬杖をついてこっちを見ていた。茶色の瞳がキラツとして、丹も上達したものね、と笑う。

「……そうかな、でもまだ一度もミツに勝ててないじゃん、」

「そりゃあね、僕はレイに習ったんだもん。」

ふふん、と誇らしげに言ったミツは、にこにこ得意げな顔をしながら、疾づくに勝負のついていたチェスの駒を片付け始めた。

「ちえ、……じゃあ俺は真咲さんに教えてもらおうと！」

それならミツにも勝てる気がする。レイだって、真咲さんには敵わなそうだしな。

わざと唇を尖らせて、拗ねたように言ってみれば、ミツはあははと笑いながら、またやろうね、と言った。俺もその顔を見て、にっと笑う。そうして白と黒の駒を箱に並べていると、俺たち以外に誰もいない談話室のドアが開いて、ホールの方からジュリアと違う誰かの声が聞こえてきた。

「……あら、真咲様は、いらっしやいませんの？……」

か細い声に振り向けば、鳶色の瞳を丸くさせた少女が、ドアからほんの少し顔を覗かせていた。白色に近いブロンドの巻き髪が、ふわりと背後に揺れている。その後ろの方で、ジュリアが、ほら行くわよーと言っている声がうつすら聞こえた。

「…あ、…ジュリアさん、でも、……」

俺と同じように振り向いたミツが、セシル！ と、少女の名を呼んだ。

その、物語の中に登場するような美少女を細部まで具現化したような少女は、一度ホールの方へ向けていた顔をこっちに向けて、顔見知りであるミツを見付けると、ほうっと頬を綻ばせた。そして談話室のドアを大きく開けて、こちらにやって来る。ふわりと白いワンピースから伸びる脚はこれまた白く、眩しい。彼女は軽快に足を

動かして、トン、とステップを踏むように、チェステーブルの横に
来た。

「まあ、ミツさん。今日はレイ様とご一緒じゃありませんのね。…
…そちらの方は、……」

近くで見てもやっぱり、どこかお金持ちの家のお嬢様、みたいな
感じの子だなーと思う（いや、単純なイメージで）。世間知らずで、
純粹で、無邪気に他人に笑い掛けるような。ぼんやりと、その小さ
な顔を見上げていると、ミツが俺の紹介をしていた（鳶色の瞳が、
丸くなりながら、こっちを見ている）。慌てて、会釈する。彼女は
可愛らしい靴の先を揃えて、ワンピースの裾を軽く持つと、ひらりと
優雅に会釈した。

「11号室の神前丹です。」

「6号室のセシルでございます。…神前丹さん、名前は存じており
ました。真咲様の、大切なお方とか。今日、こうしてお目にかかれ
て、嬉しいですね。」

にこり、と完璧な笑みを浮かべて（それはもう陶器の置物のよう
に、丁寧な描かれた絵画のように）、セシルはさりとて言う。その、
何というか、丁寧な言葉には慣れてないから、今、俺はちよつと、
カルチャーショックを受けたような気分になっていた（なんて例え
ればいいのか分からないんだけどさ！）。ミツは、セシルのこういう

話し方が気にならないのか、セシルと俺の顔を見比べながら、それよりさ、と何かに気付いたように言った。

「セシル、今日はお出掛け？　可愛い格好してるね、」

きょとんとしたミツの言葉に、セシルがはっと飛び上がるようになって、急に赤くなった頬を隠すように手を当てながら、あの…はい、そうなんです…と消えてしまいそうな声で頷いた。

「あの、…あの、…今日は、その、…高木様と、…」

…高木様？　恥ずかしいのか、もじもじとしながら、セシルはどンドン俯いて、終いに、きゃ！　と顔を両手で押さえた。

「そうなんだ…良かったじゃん！」

「あの、…はい、…とても、」

わあ！　と自分のことのように嬉しそうにしながら、ミツはにこにこセシルを見上げる。セシルは、落ち着かなそうに両手を合わせて握り締めたしながら、それでもミツの言葉に、心底嬉しそうに頷く。ミツとセシルの顔を交互に見ながら、あ、と思う。…これは、恋する人の目だ。

「……分かった、デートだ。」

ぽん、と手を打つように思ってた言葉が、これほど相手を驚かせるなんて思ってもなかった。

俺の言葉に、セシルはパツと大きな目をこれでもかと大きく見開いて、わなわなと震え、ミツと俺とを交互に見ながら、口をパクパクさせて、でで……でで、デートッ……?! と裏返った声を震わせた。

「そんな、私、……えっと、……そんな、……高木様と、デート……?!?」

おおおお食事をするのって、そういうことなんですか?! と身乗り出して、セシルは真っ赤な顔をぐっと近付けた（美少女なだけに、無駄に迫力がある）。うわ! と思わず仰け反る。しかしすぐにパツと体を離し、彼女は興奮を落ち着けるように、その場でうろろそわそわ足を動かした。

「ああッ……どうでしょう、そんな、……恥ずかしい! 私、……私、……でも、……嬉しい、……!」

ぽ、と湯気が出てしまうんじゃないかというほど、セシルの白くて美しい顔が赤く染まっている。恥ずかしい、嬉しい、どうしましよう、と口走りながら、ぶんぶんと首を振る（折角綺麗にセットし

た髪が、宙を舞う。首を振る度、胸元に揺れるクロスのネックレスが、シャラリと音を立てていた。そして、ハッと動きを止めると、うつすらと潤んだ瞳をこちらに向けながら、…あの、私、…どこも変じゃないでしょうか？ 高木様に釣り合うでしょうか？ と熱っぽい小さな声で囁いた。急に近付いたセシルの顔に、俺は再び仰け反った。

「え、」

「……高木様の隣を歩いて、…恥ずかしくないでしょうか、私は何を言われてもいいのですが、…私の所為で、高木様が…その、悪く言われるのは…我慢なりませんの……」

「ああ、うん、大丈夫大丈夫、」

「ほんとう？　ほんとうに？」

強烈な眼差しで俺を見ながら、力を込めて繰り返したセシルに、慌てて俺も力強く頷いた。ミツはミツで、大丈夫だよ、すごく可愛い、とセシルを宥めるように言った。俺とミツと2人に言われてようやく納得したのか、セシルはそっと息をつく、ワンピースの裾を気にするように直していた。そして、髪の毛をクルクルと撫でつけるようにして、パチパチと気合を入れるように頬を叩く。俺たちは黙って、そんなセシルを眺めていた。

そこに、談話室のドアが再び開いて、少し陰しい顔をしたジュリ

アが顔を覗かせた。

「……もう、セシル、行くわよって言ったでしょ？」

「…あら、もうそんな時間でしたか？」

「何、油売ってんのよ。そんな男たちに油売っても、何の得にもなりやしないのよ。」

げ、何気に酷いこと言われてる。

でも、ピリピリしたようなジュリアの空気に、俺とミツはそっと視線を交わしただけで、静かにしていた。

「まあ、ジュリアさん、私、油なんて売ってませんけど。……ああ、オリーブオイルが切れてました？ 私、お父様をお願いして、送ってもらいましょうか？ あと、美味しいワインも頼んでおきましようか。そろそろいい季節ですわ。…」

丸い目をぱちぱちさせて、セシルは真面目に言った。ジュリアはそつと横を向いて溜息をつく、そうね、と頷くだけだった。

「セシル、もう出ないと時間に合わないんじゃない？ 行った

方がいいよ、」

ミツが立ち上がって、そこまで送るよ、と言うようにセシルを促した。ジュリアが目配せするのを見て、俺も立ち上がる。するとセシルはミツや俺を見て、まあ、ありがとうございます、と笑って、再びちょこんとスカートの裾を持って挨拶をした。

そうやってエントランスホールに出て思ったけれど（さっき並んでみて分かったけれど）、相変わらず一番背が高いのがジュリアで（これは：男として悔しい）、ミツはセシルとどっこいどっこいって感じ。ヒールのある靴を履いているセシルの方が、若干高く見えるけれど、小柄な女の子が2人並んでる感じで、妙に微笑ましい：と思う（ミツに言えば、怒られると思う）。

玄関を出る前に、ジュリアがセシルに白い帽子を被せていた。つばの広い、日除けにもなるような帽子だ（イメージ的に、ますます良家の子女という感じだ）。セシルのブロンドにも、今日のふわふわした服装にも似合っている。

「結構、日が強くなってきてるからね、ちょっと心配だけど……」

薬は飲んだのね？ とジュリアは囁くように聞いていた。……ああ、そっか、そんなの気にならなかったけれど……セシルもヴァンパイアかダンピールなんだ。

「はい、今朝の分は。あと、お昼の分と夕方のものも持ちましたわ。夜の分は、こちらに帰って来てからでも十分間に合います。」

ん、よろしい、と言うように、ジュリアが頷く。

そうしながら、セシルの髪の毛を綺麗にセットし直すジュリアの顔は、娘を見送る母親のようなものだった（これも本人に言ったら怒られるけど）。セシルははい、と頷いて、ジュリアから自分のバッグを受け取った。

「…あの、…真咲様は、……」

……そういえばセシル、さっきから探してたな。

セシルの視線に、ジュリアは一瞬斜め上に目を向けた。

「さあ、寝てるんじゃないかしら。……いいのよ、放つといて。今日はね、貴女は楽しんでくること。それだけよ、」

それでも、ジュリアが玄関の取っ手に手を掛けて、セシルの背を押した時、ホールの後ろの方から、階段を、慌てて駆け降りてくる足音が響いた。ミツが俺の隣で、うわ！ 大丈夫、真咲？ と声を上げていた。ジュリアは何とも言えない表情で、セシルは目を大きくさせてぱちと瞬きをする（でも真咲さんが来て、あきらかにホッとしたように表情が緩んだ）。

真咲さんは階段の手摺りに掴まって体勢を立て直すと（はあ、と肩を大きく上下させて、息を落ち着かせる）、こっちを見て、苦笑いを浮かべた。

「…ああ、大丈夫、ちょっと足滑っただけ。……間に合ってよかった、」

どうやら、ジュリアの言っていた通り部屋で休んでいたらしい――。

眼鏡も掛けてないし、金色に近い柔らかな茶髪は外に跳ねていて乱れているし、シャツは慌てて羽織って来たというように、クロゼットから新しく引っ張り出した感じと疲れて草臥れた感じが合わさっていた（それでも変に見えないのは、真咲さんの立ち振る舞いに品があるからだ）。じっと観察していた所為か、俺と目が合うと、真咲さんはバツが悪そうな顔をした。……あれ、真咲さん、瞼が腫れぼったい感じもする。

「セシル、……ああ、この前ジュリアに選んでもらった服か、……よく似合ってる、」

真咲さんはこっちにやって来ると（近くで見ると、なんだか頬が瘦けているように見えて、顔色も悪いし、もしかして調子悪いんじゃない？）、セシルを正面から見ても、にこっと笑った。まあ！と頬を染めたセシルは、帽子のつばを持ちながら、キラキラ目を輝かせて真咲さんを見上げている。

「ありがとうございます、真咲様、」

「うん、気を付けて行っておいで、」

真咲さんは微笑むと、そつと身を屈めて、セシルの帽子に薔薇のコサージュを付けた。真咲さんの指先が帽子から離れるのと同じように、ほんのりと、薔薇の香りがしたようだった。

「では、行って参ります！」

門を出た所に停まっていたタクシーに乗り込んで、晴れやかな笑顔で手を振っていたセシルを見送って、俺は何でかほつとした。ジュリアはタクシーが角を曲がるのを見ていて、ミツは目が合うと、あは、と小さく笑って、真咲さんは…体を傾けて、門に寄り掛かるようにしていた（ただ、少しだけ、その表情が険しいのは気の所為だろうか）。

「あの子…大丈夫かしら、……まあ、高木さんも初めて会う訳じゃないし、あの子のことはよく知ってるし、…何かあればすぐに連絡は取れるし、……」

ジュリアは腕を組んで、片手を顎に添えるようにしながら、ぶつぶつ呟いていた。空を見上げて、太陽を睨みながら、もう少し曇ってくれないかしら…なんてことも呟いていた（セシルは日光が苦手なんだろう）。

「丹、中に入ろう?」

「うん、」

……ジュリアが色々世話して、心配してた理由が、ちょっとだけ分かった気がする。日光のこととかだけじゃなくて、……セシルって、子供のように純粹で、のんびりしていて、ゆったりマイペースな性格なんだろうな、と思った訳だ。一体何才か知らないけれど（ヴァンパイアだとしてもダンピールだとしても、全く見当つかないしな）。

俺の顔を見上げたミツが、ふむふむと、俺が考えていることを当てようと目を煌めかせた（男の子で上目遣いが可愛いと思えるのは、俺が知る限りではミツくらいじゃないかと思う）。

「丹、ダメだよ。女の子に直接年齢は聞けないもの、ね——…
て…ッ真咲?」

赤羽館へ戻ろうと、門の方へ振り向いたミツが、慌てた声を上げた。えッ…? 同じように振り向けば、真咲さんは、門に完全に背を任せて、目元を覆うようにして手で押さえながら俯いていた。指先はほんのり赤いのに、手はぶるぶる震えていて、冷や汗なのか…額や生え際にはたっぷり汗が浮かんでいる。俯いた影の中で、強く歯を食い縛ったのが見える——…やっぱり、調子悪かったんだ。

「真咲さん…！　ちょ、ッ…大丈夫ですかッ…？」

慌てて駆け寄って、体を支えるように肩に触れたら、すっとするくらい冷えていて、冷気を浴びたような気分になる……。吃驚して、思わず手を離す。真咲さんは静かに、呼吸を落ち着けるように息を吐き出しながら（それでも、体はまだ震えている）、ふっ…と顔を上げた。虚ろに瞼を持ち上げて、ぎらぎらと熱っぽい光を放つ鋭い目は、うつすらと赤く濁るように見えた。

「丹ッ離れて！」

「……えっ…、」

それはなんだか、ぞっとするようなもので（背筋をぞくぞく這い上がるような）、そんな風に感じた自分が信じられなかった。ミツの声に、俺は体が固まる。

「……リユード！」

思わず怯んだ時、門に腕をついて体勢を持ち直した真咲さんは、俺の肩越しに（その視線は俺を透かして違う所を見ているように奇妙だった）、低い声で一言叫ぶように名前を呼んだ。それはびりび

りと体の芯に響くような、聞いたことのないくらい、怒気を含んだ声だ。体が竦む。冷や汗が垂れる。何でだろう…なんか分からないけど、怖い…。

そう思った途端、誰かが俺の腕を後ろに引っ張った。ミツだ。

そして、舌打ちを漏らして右目を強く押さえた真咲さんの下に、ジュリアが駆け寄った。よろけた所を、真咲さんの左腕を自分の肩に回して、ジュリアが支える（もう、だから言ったじゃない！と珍しく困り切った声で言っていた）。赤毛が視界を遮る。……そのジュリアの髪よりも、ずっと濃くて、ずっと危険で、怪しい気配を孕んでいたのは、真咲さんの目の色……？

「丹、中に入ろう。」

「でも、」

「いいから、」

さつきよりも随分厳しい口調で言い切ったミツは、半ば引き摺るようにして、赤羽館の門を潜り、エントランスホールを突っ切って、俺を談話室に引き込んだ。

橙色の照明や、テラスに集まる小鳥たちの囁りや、ふかふかのソファーや、古い時計の針の動く音や………静かな談話室に入ると、途端に、外の話し声や音が遠ざかって聞こえなくなった。それなのに、あの、赤色が焼き付くように瞼に残っていて、俺はぞっとした。切れ味のいいナイフが、表面の皮膚だけを薄く傷付けて、痛みは無いのに、そこから真っ赤な血だけが溢れ出てくるような、そ

んな、無音の光景が目の前に浮かんた。自分でも分からない内に、体が震えていて、サアーっと血の気が引いていくような気分になって、目の前がぼやけた。気持ち悪い。頭がズキズキして、吐きそうだ…。

「……ッ丹！　ちょっと、丹ォ！」

ミツの声を聞いたところで、俺の意識はぷつんと途切れた。

「アンタがいないから、大ッ変だったんだから！ 主人の面倒見るのが従者の役目でしょうがッ！」

ジュリアの、甲高い声が聞こえる。それに、仕方ねえだろ、日がある内は無理だ、と冷静な低い声がきっぱり言った。

「もう…死の淵を見た気分だったわ！……ワラキアの英雄が、日が怖いだなんて情けないことってんじゃないわよおお！ 馬鹿あ！」

ふ、と頭上に見える、落ち着いた焦げ茶の天井と照明の橙色の灯りから顔を逸らして、横を見れば、ジュリアが髪を振り乱して、感情的な声を上げていた。ソファアに凭れているレイの胸倉を掴んで、詰め寄るような体勢だ。真正面で大声を出されているレイは、眉を寄せて顔を逸らしている。……あれ、俺は今、どこにいるんだ…？

「んな、目の前で大声出すんじゃないやねえよ…！」

「なによ馬鹿！」

ヒステリックな声を出して、ジュリアがふん、とそっぽを向く。

その、青い瞳と目が合う。

「……あ、」

手触りが良くてふかふかで、ちょうどいい加減で沈み込むクッションは、……ああ、ミス・レディがよく座ってたあの寝椅子だ。俺に気付いたジュリアがやって来る。その体の向こうから、レイが感情の読めない目でこっちを見ているのが見えた（その紅い目の色は、思ったよりも澄んでいて、あの時見た赤とは違って見える……）。

「丹ちゃん、調子大丈夫？」

「……うん……」

ちよつと頭が重い感じするけれど、別に何ともないし。それよりも、……。

「あの…真咲さんは大丈夫なの？」

そう聞けば、え、と一瞬驚いた風に目を丸くしたけれど、曖昧に笑って頷いたジュリアを見て、とりあえずほっと安心した――……レイが、黒いコートの裾を翻して、どこから取り出した煙草を銜えて火を点けながら、ガラス戸からテラスへと消えた。談話室

にも微かに煙の筋が流れる。それを目で追いながら、ぼんやり思う。

「……なんか最初から調子悪そうだったし、…真咲さん、最近ちゃんと休んでなかったんじゃないかな。……」

「…そうね、でも大丈夫よ、」

ここ何日か、あまり見掛けなかったから、俺は何とも言えないんだけど…。そんな風に思っていると、俺が転がっている寝椅子の傍にそっと腰掛けたジュリアが、不思議そうな顔をして（少し困ったような。少し眉を寄せて、少し笑みを浮かべて）、丹ちゃんは、怖いなんて考えもしないのね…、と静かな声で言った。

「……え？」

あんまり小さな声だったから（囁くような、思わずぼろっと口から出てしまったような言葉で）、ジュリアが何でそんなことを言ったのか分からない。ジュリアは、眉を下げて八の字にして、控え目に微笑んでいる。その顔がなんだか、悲しんでいるようには見えないんだけど、切ないような、そんな気持ちになる。

「ううん……そう思ってくれてありがとう、」

その言葉の後に、私たちのこと、って言葉が続くんじゃないか…、何故だかそんな気になる。そして何となく、ジュリアは笑いながら泣いているんじゃないかって、思った。その位、どこかしんみりしていて、それでいてほっこり温まるような言い方だったから。

「それより、お腹空いてるんじゃない？ もうこんな時間だし、…」

そういえば、…！

「……って、…え、今何時なの？」

お腹空いてるけど、…あれ、そういえば俺、どのくらいここに寝てたんだ？　なんか、脳味噌もぼちり目覚めた感じで、体も結構すっきりしていて楽なんだけど、…もしかしてかなり長い時間、寝てた？　慌てて時計を探した俺に、ジュリアがさざりと言った。

「もう、7時前よ。今からすぐ準備するから、丹ちゃん、何食べた
い？」

一瞬、聞き間違えかと思った、というか、聞き間違えであればいい
って思った。けど、ジュリアが嘘言う訳もなくって、壁際にある
お洒落なキャビネットの上にある時計をようやく見付けて、正確な
時間を確認した。

「どうしたの、そんな血相変えて、」

どわあああッ！ バイトの時間ッ！ やばい！ 店長に怒られる
！ 携帯ッ：連絡しなきゃ：っ！ か携帯どこ？！ 部屋だっけ？！
え！ 俺の部屋どこだっけ！

「あっちよつと！ そんな慌てて、……気を付けて行きなさいよッ
！」

返事をする余裕もなく、混乱する頭を叩きながら、談話室を飛び
出した。

昼間のこの時間帯には、赤羽館の食堂は閑散としている。多分、ほとんどの住人が眠ってる頃だろう。真咲さんは朝見掛けたけど、どこか出掛けてしまったみたいだし、ジュリアはキッチンの奥で何かやってるし、昼間なのに人がいないって、慣れたけど変な感じ。

「それ、なあに？」

カレーの乗ったトレイを持ちながら（俺はもう食べたけど、このカレー、超辛かった）、ミツが隣の席にやって来た。俺が見ていた写真を、首を傾げて覗き込むように見ている。

「ああ、これ、この前クラスの奴らと花見に行った時の写真。村田がくれたんだ。」

飲みサーメンバーが多かったから、この数時間で消費した酒の量は測り知れない。酔っ払いばかりで馬鹿騒ぎしながら、誰かが写真を撮っていたことは覚えてるけど、その写真を見たことなかったから、実は俺もどんなのが映ってるのかドキドキしている（嫌な予感でいっぱいなんだけど）。それにしても何枚あるんだろう、村田がくれた封筒から出した束は結構厚みがある。

最初の数枚は、花見ということもあって、きちんと桜を映している。それに、皆まだビールで乾杯して、ひと口ふた口飲んだだけだったから、顔付きがまともだ。全員満面の笑みで、楽しそうに映っ

てる。

「わあ、結構上手に撮れてるじゃん。この桜だけの写真、プロの写真みたい！」

隣で覗き込んでいたミツが、感心したように言う。

こういう飲み会が好きな連中が、なかなかいい場所を陣取ってくれたから（桜の花の付き方とか角度とか枝の形とか、やけに拘っていたらしい。ホント馬鹿だ）、確かに桜は最高だった。満開で、でも風が吹く度ちらちら散っていて、その風景がじんと沁みるように、柄にもなく、日本に生まれて良かったなんて思ったものだ。多分、時期も良かったんだと思う。これがあと数日遅かったら、もう散っていたんじゃないかな（あの時、雨が続いたし）。

でも、安心して見ていられたのは本当に最初の数枚で、次からは、一枚捲る度に、呆れ果てるか情けなくなるかのどっちだった（どっちにしろ、精神的ダメージになったのに違いはない）。俺が疲れ果てた顔になった隣で、ケラケラ笑いつ放しだったミツは、自分には関係ないからいいけどさ。泣き上戸笑い上戸くらいならまだしも、女の人を見付けければ（見ず知らずの人も）所構わずお姫様抱っこをしてくるくる回りだす奴とか、片っ端から知り合いに電話を掛けまくる奴とか、本当に命の危険を感じるくらいのキス魔になる奴とか、なぜか酔っ払うと川を見に行きたがる奴とか、とにかく道端で爆睡する奴とか、もう滅茶苦茶なんだからな！

「丹はさ、お酒強い？　でもこれ、結構酔ってるでしょ。」

「え？ ああ、俺、そんなに強くない。すぐ顔が赤くなるから。」

ミツが指差した写真の俺は、完全に酔っ払かっている。だって何かこれ、焦点合っていない感じの目してるもん。うへえ、我ながら気持ち悪い顔してる（まあ、そういう危ない顔した奴しか映ってないからあれだけど）。

「コイツとか、コイツ、飯塚とかはザルなんだよなー。」

「へえー、この人は？」

「あー、コイツはさあ、…」

ミツに説明しながら、改めて、癖のある奴らばかりだなと思う。学部が違々と、全く関わりのない奴もいるけれど、このメンバーは案外気の合う奴らばかりだ。

「女の子もいるんだね。」

「うん。この4人は学部バラバラだけど、同じ高校だったから凄く仲良いんだ。」

「可愛い子たちだね。こっちの子は？」

「こっちの子は……何て言うか、うーん、正直言ってもあまり関わりたくない子なんだよなあ、……あ、本当はいい奴なんだろうけどね。ちよっとしつこいんだよねー……。」

濁しつつそう言えば、え、と口を開けたミツが、……丹迫られてるの？ とひっそり囁いた。ミツの思考回路ってどうなってるの？！

「そっそんなんじゃない！」

「僕は嫌いだけど、こういう子って男の子が好きそうな顔してるじゃない。」

んもー、なに楽しそうにしてんだよミツ。

「えへへ、でもさ、そういう困った子がいたら言ってよね。串刺しになるまえに止めてあげないと流石に可哀そうだしね。」

へ……どういうこと？

首を傾げた俺に、ミツはふふんと得意げに笑いながら、自分のトレーを手前に引き寄せてスプーンを取った。……あ、そのカレー、やばいくらい辛いんだって……！ そんなに口に入れたら、

……！　そう思ったが、俺が止める前に、スプーンいっぱいに掬ったカレーを、ミツは大きな口を開けて一口でパクリと食べてしまった。

「ひどいよジュリア、僕のカレーいつも甘口じゃん！　なのに何で今日はこんなに辛いのか？！」

やられたッ、不意打ち反対ッ、とぶんぶん怒りながら、ジュリアに抗議するミツは、未だに口の中がひりひりするのか、舌先を出してヒューヒュー言っている。しかしそれでもあのカレーを我慢しながら平らげたミツは偉いと思う。俺も、途中で何度か残してしまおうと思ったけれど、なぜか止められなかった。結局、唇をひりひりさせながら、俺もあのカレーを完食したのだ。それは、辛いけど旨い、辛いけどもう一口くらい食べたい、と思ってしまっからで、突き抜

けるような強烈な辛さに涙目になりつつも、飲み込んだ後に残る旨みが堪らなく、またまたスプーンを手にとってしまうという絶妙なサイクルに陥ってしまうからだ。

「なによミツちゃん、そんなに辛かった？　美味しかったでしょ？」

カウンター越しに、食べ終えたトレイを受け取りながら、ジュリアはどうでもよさそうに言う。ミツはう、と言葉に詰まって、のろのろ視線を落としながら、それでも、……美味しかったけどさ、と頬を膨らませてジュリアの言葉を認めた。

ジュリアは一度俺たちに視線を向けると、よろしい、と勿体振るように頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0497x/>

赤羽館

2011年11月18日04時03分発行